山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第94集

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園

上の平遺跡 第６次調査

UENODAIRA SITE

東山北遺跡 第４次調査

HIGASHIYAMAKITA SITE

銚子塚古墳南東部試掘

CHOSHIZUKA TUMULUS

1994.3

山梨県教育委員会

序

この報告書は、「甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」整備事業に伴い、1993年度に発掘調査した山梨県東八代郡中道町上の平遺跡・東山北遺跡と銚子塚古墳南東部試掘調査について、その成果をまとめたものです。

上の平遺跡は既に1979～1986年の間に5次の調査が進められ縄文時代の住居跡23軒・土坑117基、弥生時代の住居跡18軒・方形周溝墓124基、平安時代の住居跡3軒などが見つかっています。今回は「公園」の外周道路部分を中心とした第6次調査にあたり、縄文時代の住居跡12軒・竪穴状遺構6軒・土坑70基、弥生時代の住居跡1軒・方形周溝墓5基（ただし新たな発見は1基のみ）の調査を行いました。その結果、弥生時代に非常に多くの方形周溝墓がつくられただけでなく、縄文時代中期には住居跡などの遺構が多く密集し、かつ全国的にも10数例しか発見されていない「の」字状垂飾や多数の土偶が出土するなど、通常の集落でなく特異な性格をもった拠点的集落であることが明らかになりました。

東山北遺跡も1990～1992年の間に3次の調査が行われ、国内最大クラスの古墳時代前期の第2号方形周溝墓をはじめとして他に同時代の住居跡1軒、方形周溝墓1基、また弥生時代後期の住居跡27軒、土器焼成遺構1基などが見つかっています。今回は第4次調査にあたり、第2号方形周溝墓の周溝部分を保存するために用地の追加買収をした部分を対象としました。調査によって、近世～近現代の溝1本を確認し、この中から古墳時代の馬具2点、水晶製勾玉1点、金銅製刀装具などを発見しました。このことにより、今は現存しないもののかつては古墳時代後期の古墳が近隣に存在したということが推定されました。

銚子塚古墳東南部試掘は、国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の南縁から曽根丘陵に向かって立ち上がる北向きの斜面を対象とし、24本の試掘溝を掘って調査を進めました。その結果、丸山塚古墳の東方の二本の試掘溝において、弥生時代後期末にあたる土器底部などが出土し、この付近に弥生時代の集落跡が存在する可能性が高いことがわかりました。

これらの調査によって、遺跡の重要性がますます明らかになり、しかも公園中に保存される意義は大きなものがあります。この報告書を学習や研究の資料としてご利用くださることを希望します。

なお、末筆ながら本調査にご協力いただいた方々並びに各機関に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

目　次

序
目次
例言・凡例
第１章　上の平遺跡・東山北遺跡発掘調査銚子塚古墳南東部試掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
　第３節　地理・歴史的環境 …… 1
第２章　上の平遺跡発掘調査（第６次） …… 5
　第１節　調査方法 …… 5
　第２節　基本層序 …… 5
　第３節　縄文時代の遺構・遺物 …… 6
　第４節　弥生時代の遺構・遺物 …… 44
　第５節　自然科学分析 …… 50
第３章　東山北遺跡発掘調査（第４次） …… 53
　第１節　東山北遺跡の概要 …… 53
　第２節　遺構・遺物 …… 53
第４章　銚子塚古墳南東部試掘調査 …… 58
まとめ …… 59
写真図版
　図版１上の平遺跡遺構
　図版２上の平遺跡遺構
　図版３上の平遺跡遺構
　図版４上の平遺跡遺構
　図版５上の平遺跡出土土器
　図版６上の平遺跡出土遺物
　図版７上の平遺跡出土炭化種実
　図版８東山北遺跡・銚子塚古墳南東部試掘調査

例言

1．本報告書は、平成５年度の甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園整備事業に伴って発掘調査された、山梨県東八代郡中道町上の平遺跡・東山北遺跡の発掘調査及び銚子塚古墳南東部試掘調査の報告書である。

2．発掘調査及び出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関副主幹文化財主事末木　健・文化財主事村石眞澄が担当した。

3．本報告書は村石眞澄が編集を行い、執筆は原則として第３章を末木　健、その他を村石眞澄が担当した。自然科学分析について委託した部分については、執筆者を文頭に示した。

4．写真撮影は、現場においての遺構などは末木　健・村石眞澄、遺物は村石眞澄が行った。

5．遺物実測・トレースは平川涼子・古屋和喜子・内藤由紀子・伊藤順子・石神孝子・宮里　学が行った。

6．石器の石材鑑定は宮里　学が主に行い、一部河西　学（帝京大学山梨文化財研究所）の助言を受けた。

7．本報告書にかかわる出土品及び記録図面・写真などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

8．発掘調査から報告書作成にあたっては、下記の方々からご教示・ご協力をいただいた。厚く感謝申し上げる（敬称略）。

上野真由美、河西　学、川崎　保、櫛原功一、小薬一夫、浜野美代子、町田勝則　他

凡例

1．遺構・遺物の挿図の縮尺は原則として以下の通りである。

　遺構　全測図 1/3000、遺構位置図 1/300、住居跡 1/60、土坑 1/30、方形周溝墓 1/100

　遺物　縄文土器実測図 1/6、土器拓影 1/4、土偶・土製品 1/2 1/3 1/4、石器 1/1 1/2 1/4 1/8

2．遺構平面図の小穴中の数字は深さ（cm）を表す。

3．遺構平面図・断面図において網かけ部分は焼土及び炉の範囲を示す。

4．写真図版の縮尺は約１/10を原則とし、それ以外は個々に示した。

第１章　上の平遺跡・東山北遺跡発掘調査
銚子塚古墳南東部試掘調査の経過

第１節　調査経過

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の整備に伴って、上の平遺跡・東山北遺跡の発掘調査及び銚子塚古墳南東部試掘調査を実施した。

上の平遺跡（第６次）　公園外周道路の整備に伴い現農道下の幅約３ｍ、延長約168ｍの細長い範囲及びこの東に隣接する南北18ｍ、東西17ｍの買収地を対象とした。調査は現農道下であるため、桃などの収穫期を除いた、1993年５月６日～７月23日、８月30日～11月26日の期間に行った。

東山北遺跡（第４次）　公園外周道路用地とした部分が第３次調査（1992）によって第２号方形周溝墓の周溝部分に当たることが判明したため、これを避けるために追加買収した範囲を対象として、1993年４月19日～４月30日の期間に調査を実施した。

銚子塚古墳南東部試掘　国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の保存整備事業の一貫として1983・1984年に調査した範囲の南側に当たり、1993年７月19日～７月26日の期間に調査を実施した。

第２節　調査組織

調査主体	山梨県教育委員会	教　育　長	加藤正明
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所　　長	大塚初重
		次　　長	三科英訓
		埋蔵文化財指導幹 調査研究課長	森　和敏
調査担当	山梨県埋蔵文化財センター	副主幹・文化財主事	末木　健
		文化財主事	村石眞澄

調査員　　平　重蔵

作業員　　出月満す江、出月遊亀子、長田可祝、久保田明義、越石　力、小林よ志子、志田由記子、平　美与枝、土屋ふじ子、内藤安雄、中込よしミ、中込星子、中澤敏雄、宮坂晴幸、矢崎米子

第３節　地理・歴史的環境

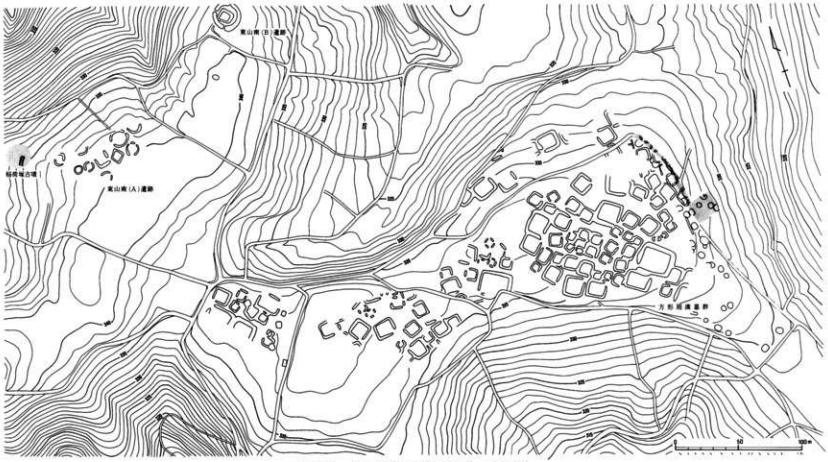
上の平遺跡・東山北遺跡・銚子塚古墳南東部は、いずれも甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の内に位置する。曽根丘陵は甲府盆地南東縁に西東13km、南北３kmに広がっている。北側にあたる前縁は高くなり急傾斜し甲府盆地床にめり込み、南側の後背地は緩傾斜で御坂山地に接している。これら盆地床および御坂山地に接する部分は断層とされている。前縁の後背から御坂

1．下曽根横下遺跡
2．かんかん塚（茶塚）古墳
3．丸山塚古墳
4．銚子塚古墳
5．女沢A遺跡
6．女沢B遺跡
7．女沢C遺跡
8．米倉山A・富蒲池遺跡
9．清水遺跡
10．西原遺跡
11．東原遺跡
12．向山遺跡
13．下向山遺跡
14．金沢天神遺跡
15．天神山古墳
16．米倉山B遺跡
17．小平沢古墳
18．鍋弦塚古墳
19．稲荷塚古墳
20．東山南遺跡
21．大丸山古墳
22．東山北遺跡
23．上の平遺跡
24．宮ノ上遺跡
25．立石遺跡
26．諏訪前南遺跡
27．別所遺跡
28．諏訪前北遺跡
29．諏訪前西遺跡
30．熊久保遺跡
31．天神山塚古墳
32．物見塚古墳
33．宮の前遺跡
34．天神遺跡
35．白戸遺跡
36．坂下遺跡
37．前附遺跡
38．馬場遺跡
39．上原西遺跡
40．北原遺跡
41．経塚（長寺尾経塚）
42．北の山南遺跡
43．北の山北遺跡
44．飯沼塚2号墳
45．天神下遺跡
46．下原遺跡
47．狐塚古墳
48．下原南遺跡
49．御所山南遺跡

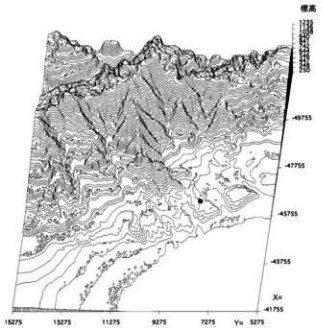
第1図　周辺遺跡分布図

山地にかけては明瞭な平坦面を残す台地であり、遺跡の立地としては非常に良好な地形である。

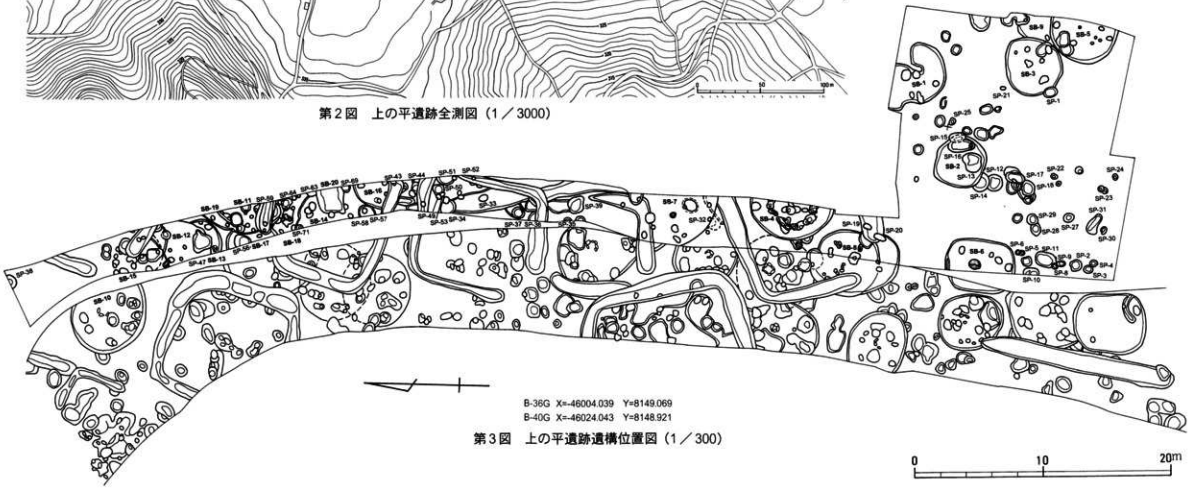
周辺の遺跡分布をみると、旧石器時代では上の平遺跡・宮の上遺跡・立石遺跡・下向山遺跡・小平沢遺跡などの遺跡がかなり集中し注目される。縄文時代では上の平遺跡・下向山遺跡・立石遺跡など中期初頭の遺跡がとくに集中し特異な地域である。さらに弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓が125基発見された上の平遺跡、国内最大規模の東西36m×31.4mを誇る古墳時代前期の方形周溝墓が発見された東山北遺跡、古墳時代前期から小平沢古墳・大丸山古墳・銚子塚古墳・丸山塚古墳などの古墳が営まれている。伝統的墳墓である方形周溝墓と畿内から新しく伝わった前方後円墳がほぼ同時期に隣接して築造され、ひとつの地域に二つの墓制が並立するという古墳時代の権力のあり方を考える重要な地域である。



第２図　上の平遺跡全測図（1／3000）



第４図　周辺鳥瞰図



B-36G　X=-46004.039　Y=8149.069
B-40G　X=-46024.043　Y=8148.921

第３図　上の平遺跡遺構位置図（1／300）

第２章　上の平遺跡発掘調査（第６次）

第１節　調査方法

調査区が現農道下であるため、便宜的にこの農道を軸として５ｍグリッドを設定した。グリッド起点を北西にとり、西から東方向へＹ～Ｚ・Ａ～Ｆとし、北から南方向に31～50とした。グリッド名称は該当グリッド内に立ち北西隅の杭に記入した。また調査担当者が公園内に設置されている測量基準点「基５」および「基９」から国土座標を測量し、Ｂ－36Ｇの北西杭はＸ＝－46004.039ｍ、Ｙ＝8149.069ｍ、Ｂ－40Ｇの北西隅杭はＸ＝－46024.043ｍ、Ｙ＝8148.921ｍの値を得た。国土座標は、平面直角座標Ⅷ系原点からの距離。

第４・５次調査の北東に隣接し、これら過去の調査と重ねあわせて全貌が確認された遺構もいくつか存在した（第３図）。

第２節　基本層序

上の平遺跡の基本層序を次に示す。ほぼ平坦な台地状の地形で、基本層序に大きな変化はみとめられない。

耕作土

第Ⅰ層：暗黄褐色土層　Ⅲ層下の黄褐色土層と比べてやや軟質で、色調は赤味を帯びる

第Ⅱ層：黒褐色土　１mm大の白色粒子を含む。この層の直上付近には火山ガラス濃集層（ＡＴ）があり、立川ローム層第Ⅱ暗色帯（約２万年前相当）に対比される

第Ⅲ層：黄褐色土層　Ⅳ層下の黄褐色土に比べ粘性・しまりが弱い

第Ⅳ層：黄褐色土層　ブロック状に剥離するやや軟質なローム層

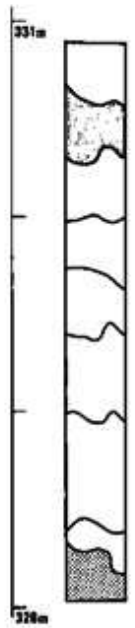
第Ⅴ層：黄褐色土層　赤色スコリヤを多く含む硬質のローム層

第Ⅵ層：黄褐色土層　粒子は極めて緻密、１mm大の白色粒子を多く含む

第Ⅶ層：黄褐色土層　赤色、青色スコリヤを若干含む

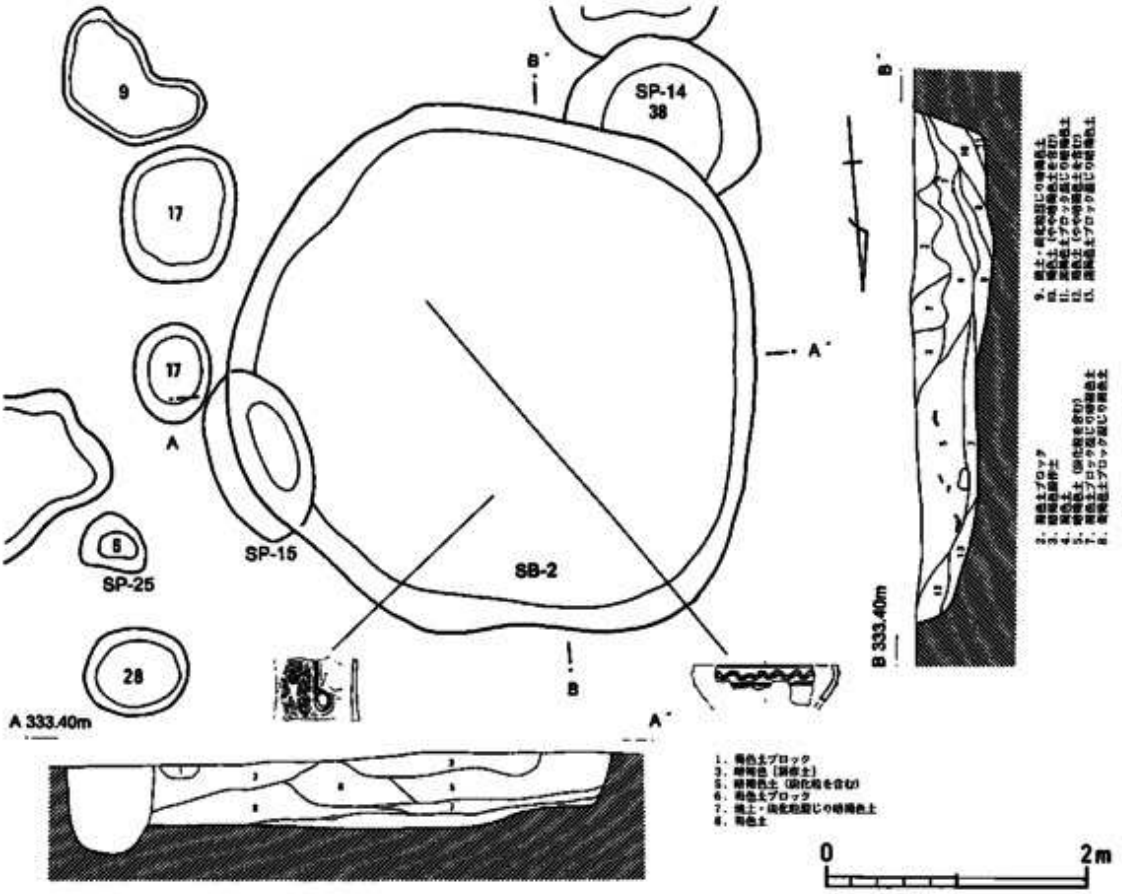
第Ⅷ層：灰褐色粘土質土

第Ⅸ層：橙褐色軽石層　Pm-Ⅰ（約８万年前相当）

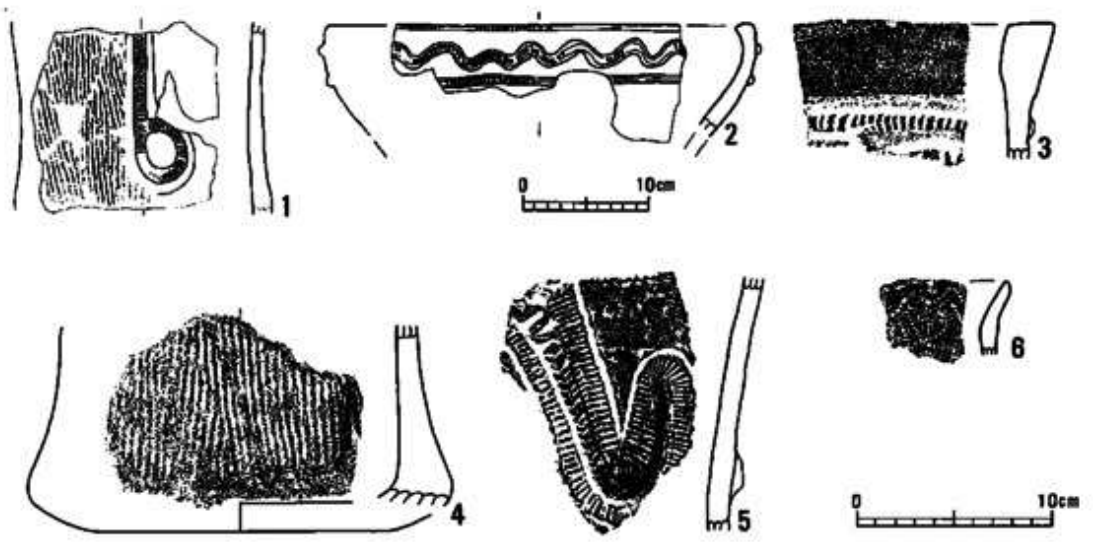


第５図基本層序

遺構の確認される層位は第Ⅰ層の上面で、基本的にはこの層を遺構確認面とした。この確認面では弥生時代および縄文時代の遺構がほぼ同一レベルで検出される。住居跡などの壁はほとんど削平されていることから、当時の生活面よりかなり削られていることがうかがえる。また、第Ⅱ層の黒褐色土と遺構覆土の色調が非常に類似しているため、第Ⅱ層中に床面をもつ住居跡などは遺構の確認に苦慮した。



第６図　SB2住居跡



第７図　SB2住居跡出土土器

C－45G以北は遺構の重複が激しく、遺物を多く包含する面では住居跡など遺構のプランの把握は困難であり、遺物の出土位置を記録しながら掘り下げ地山近くまで達してやっと遺構のプランを確認するという調査方法を取らざるを得なかった。また溝状遺構（略称ＳＤ）、集石状遺構（略称ＳＷ）も調査を進めたが、中に鉄片や合成樹脂など近現代の遺物も認められため、この報告では割愛した。

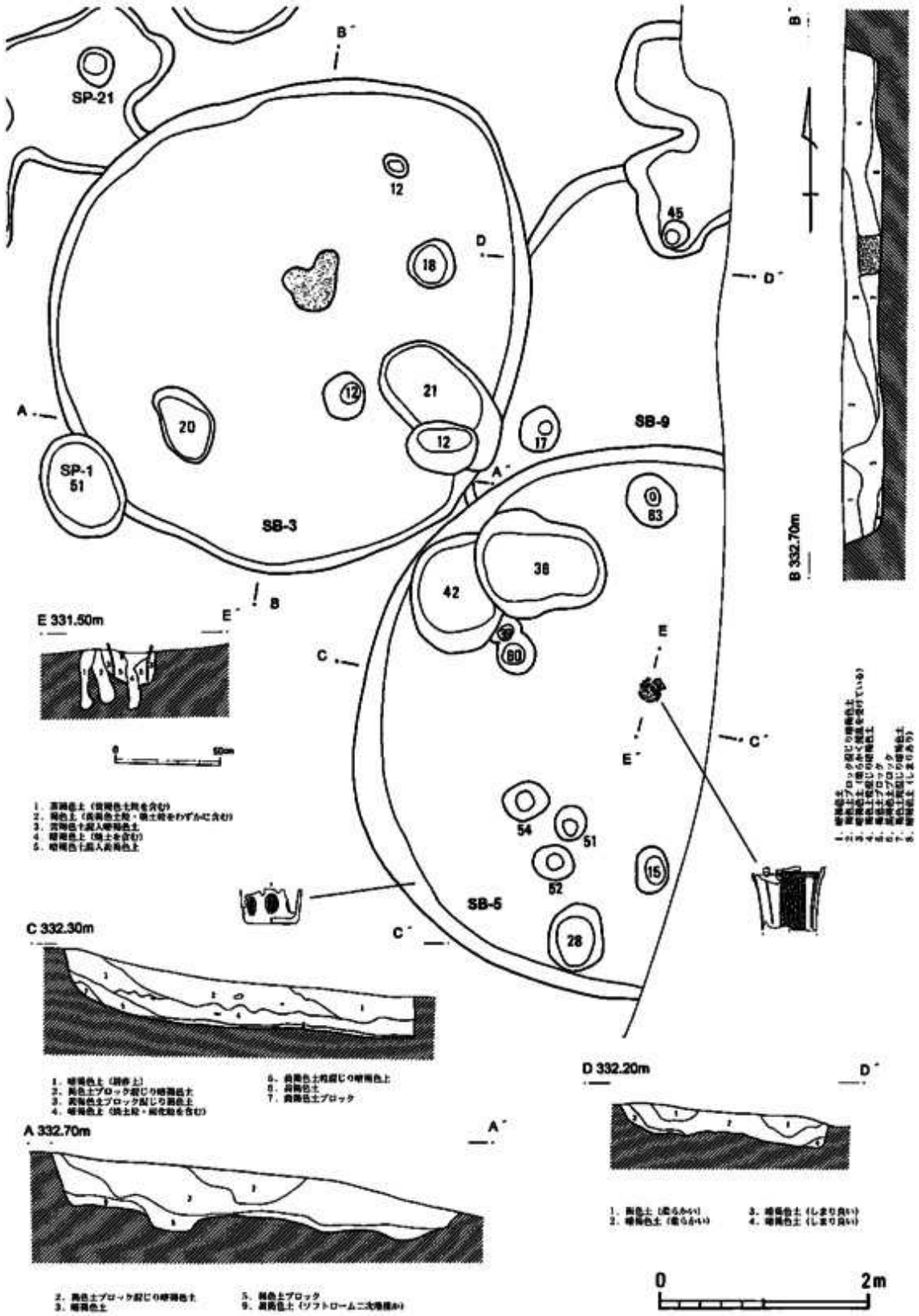
１．住居跡・竪穴状遺構

ＳＢ２竪穴状遺構（第６・７図、図版２）

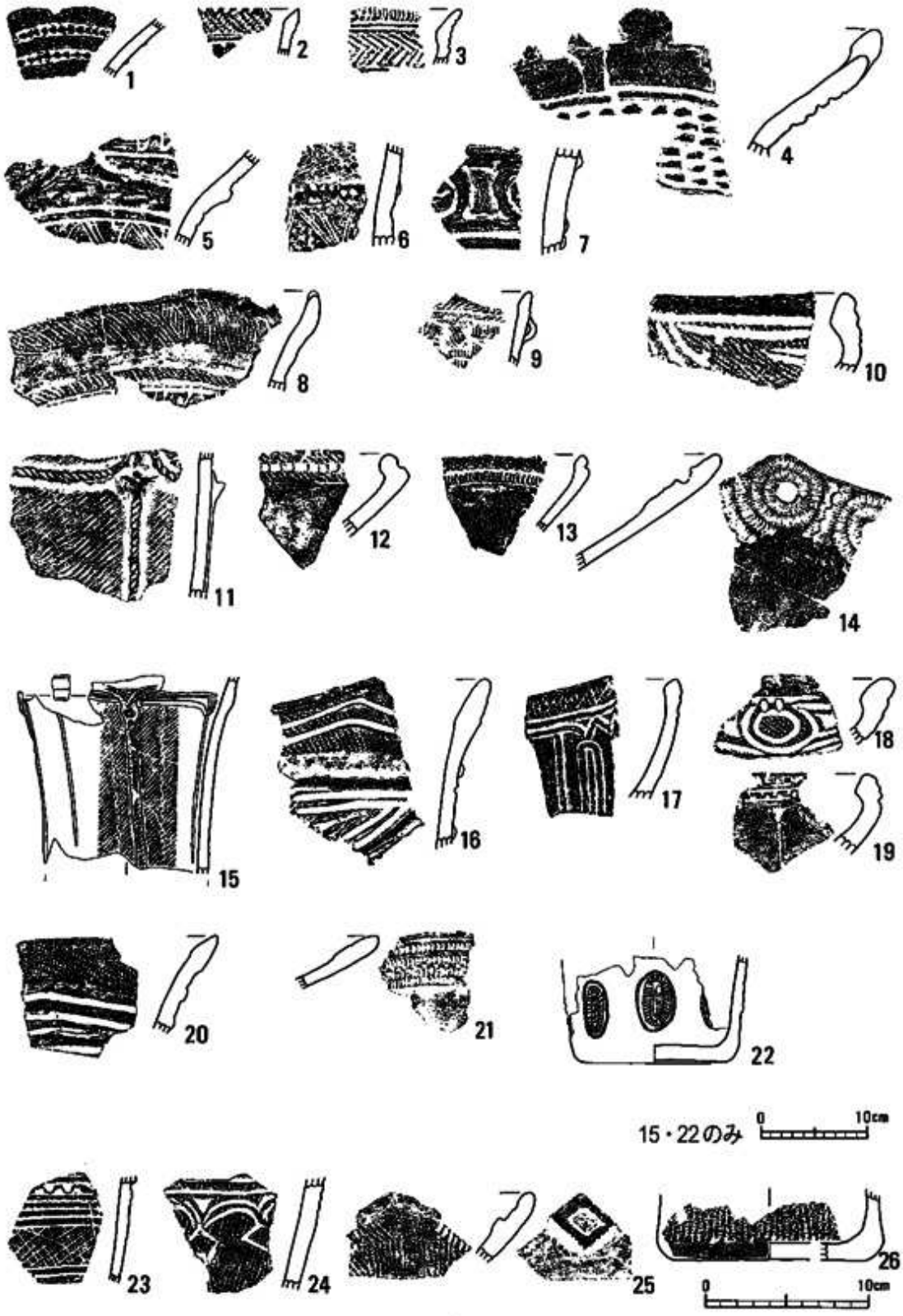
位　　置　Ｅ－６Ｇ　ＳＰ14・ＳＰ16を切り、ＳＰ13・ＳＰ15に切られる。
形状・規模　不整楕円形　長軸3.92ｍ、短軸4.08ｍ
床　・　壁　床面は硬化しておらず不明瞭、壁高は20～50cm
　炉　　覆土に焼土・炭化物を含む堆積はみられたが、明確な炉は確認できなかった。
その他の施設　柱穴は認められず、多くの土坑が重複して発見された。この遺構の性格は明らかではない。
出土遺物　第７図１は胴部下半で屈折底をなすものと考えられる。２は刻みのある小波状隆帯をもつ浅鉢と考えられる。３は隆帯上に爪形の刻みをもつ。４は胴部下半で屈折底。５は隆帯上の杉綾状の刻みとこれに沿う幅広連続爪形文が施される。以上の土器は藤内～井戸尻期。６は幅狭い押し引き文が施されたミニチュア土器で前期末～中期初頭に属すると考えられる。この遺構の所属時期は藤内～井戸尻期。

ＳＢ３住居跡（第８・９図、図版２）

位　　置　Ｇ－７Ｇ　台地縁辺に近い東緩斜面に立地する。ＳＢ９住居跡を切り、ＳＢ５住居跡に隣接している。
形状・規模　円形　長軸5.06ｍ、短軸4.52ｍ
床　・　壁　床面は硬化しておらず不明瞭。壁高21～52cm
　炉　　中央やや北から焼土のまとまりが規模36×25cm、厚さ20cmの範囲で認められたが、焼成された部分はなかった。
その他の施設　ピットは４個検出されたが、いずれも深さ20cm以下であった。
出土遺物　第９図１は結節状浮線文が施される、十三菩提期。２～５は五領ヶ台期、２は口唇の刻みと沈線下に刺突状の三角印刻文がみられる。３～５は沈線文系、４は楕円形の大きな突起と鋸歯形の小さな突起が付けられ、その下には瓦状押引文が施される。５は橋状把手の一部がみられる。６は隆帯に深い刺突、細く鋭い沈線文が施される。他の大半の土器の色調が暗赤褐色であるのに対し淡黄色と異質である。７は隆帯により楕円区画文がつくられ、押引文による鋸歯文らしき一部がみられる。狢沢期。８～12は五領ヶ台期の縄文系土器。８は口唇部に４個の小突起が付く。９は整った橋状把手が付く。11は隆線によるＹ字状文が付けられている。12～14は五領ヶ台期の浅鉢、14は内面に連続爪形文が施される。この遺構の所属時期は五領ヶ台期。



第8図　ＳＢ３・ＳＢ５・ＳＢ９住居跡



第9図　ＳＢ３・ＳＢ５・ＳＢ９住居跡出土土器（ＳＢ３：4、ＳＢ５：15～22、ＳＢ９：23～26）

ＳＢ５住居跡（第８・９図、図版２・５）

位　　置　Ｇ－７Ｇ 台地縁辺に近い東緩斜面に立地する。ＳＢ９住居跡を切り、ＳＢ３住居跡に隣接している。調査区の東端に当たり、ほぼ半分を調査するに止まった。

形状・規模　円形？　長軸5.24ｍ、短軸3.3ｍ（現存）

床　・　壁　やや硬化していた。壁高38～58cm

　炉　　埋甕炉、炉体土器は第９図15。掘り込み規模は31×30cm、深さ24cm。焼土は少量であった。この遺構の所属時期は五領ヶ台Ⅱ期。

その他の施設　柱穴と考えられるものは、深さ50cmを越えるものが５基、その他が３基であった。

出土遺物　第８図15は隆線によるＹ字状文が垂下し、結節のあるＲＬの縄文が施される。15～20は五領ヶ台Ⅱ期の縄文系土器。22は内面に連続爪形文が施された五領ヶ台Ⅱ期の浅鉢。21は胴部下部で縦方向の楕円区間文が付けられる、新道期。

ＳＢ９竪穴状遺構（第８・９図、図版１）

位　　置　Ｇ－７Ｇ 台地縁辺に近い東緩斜面に立地する。ＳＢ３・ＳＢ５住居跡によって切られ、しかも調査区の東限に当たり、ごく一部を調査したのみに止まり、全貌は明らかでない。

形状・規模　円形？　長軸3.5ｍ（現存）、短軸1.8ｍ（現存）

床　・　壁　床面は硬化しておらず不明瞭。壁高28cm

　炉　　検出せず

出土遺物　第９図23は五領ヶ台Ⅱ期の沈線文系。24は五領ヶ台Ⅱ期の縄文系。25は口唇部に刻みをもち、外面に縄文、内面には隆帯により菱形の区画が付けられている。26は屈折底で中期中葉に属する。

ＳＢ４住居跡（第10～13図、図版２・５）

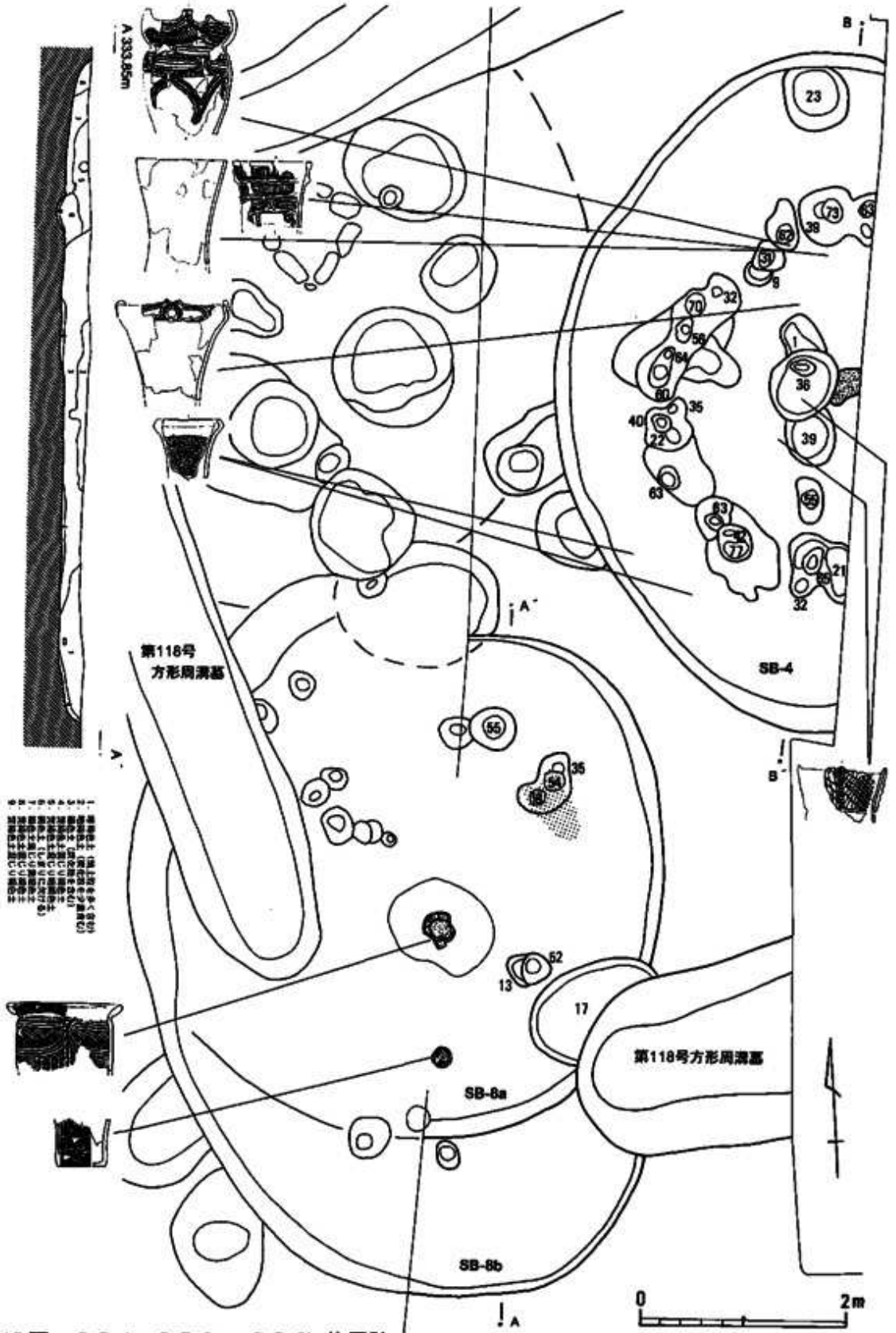
位　　置　Ｄ－３Ｇ　調査区東端にあたり、約半分を調査するのみである。

形状・規模　円形　長軸6.58ｍ、短軸4.29ｍ（現存）

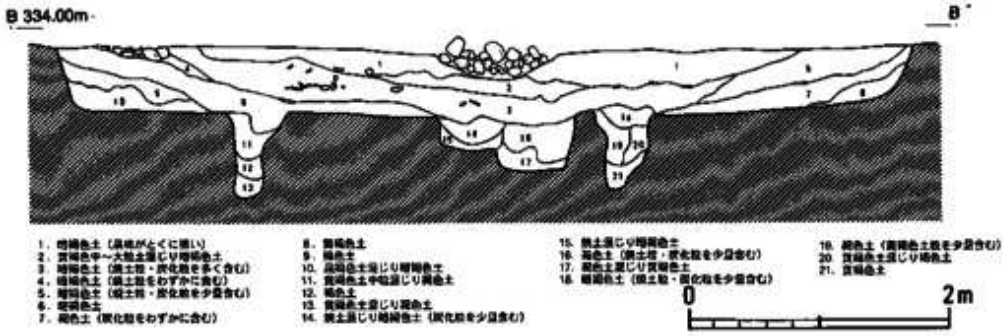
床　・　壁　やや硬化していた。土層断面にて壁高50cmを測る。

　炉　　地床炉、火床面はほとんど硬化していない。一部調査範囲外に伸びているが、規模41×21cm（現存）、深さ23cmを測る。

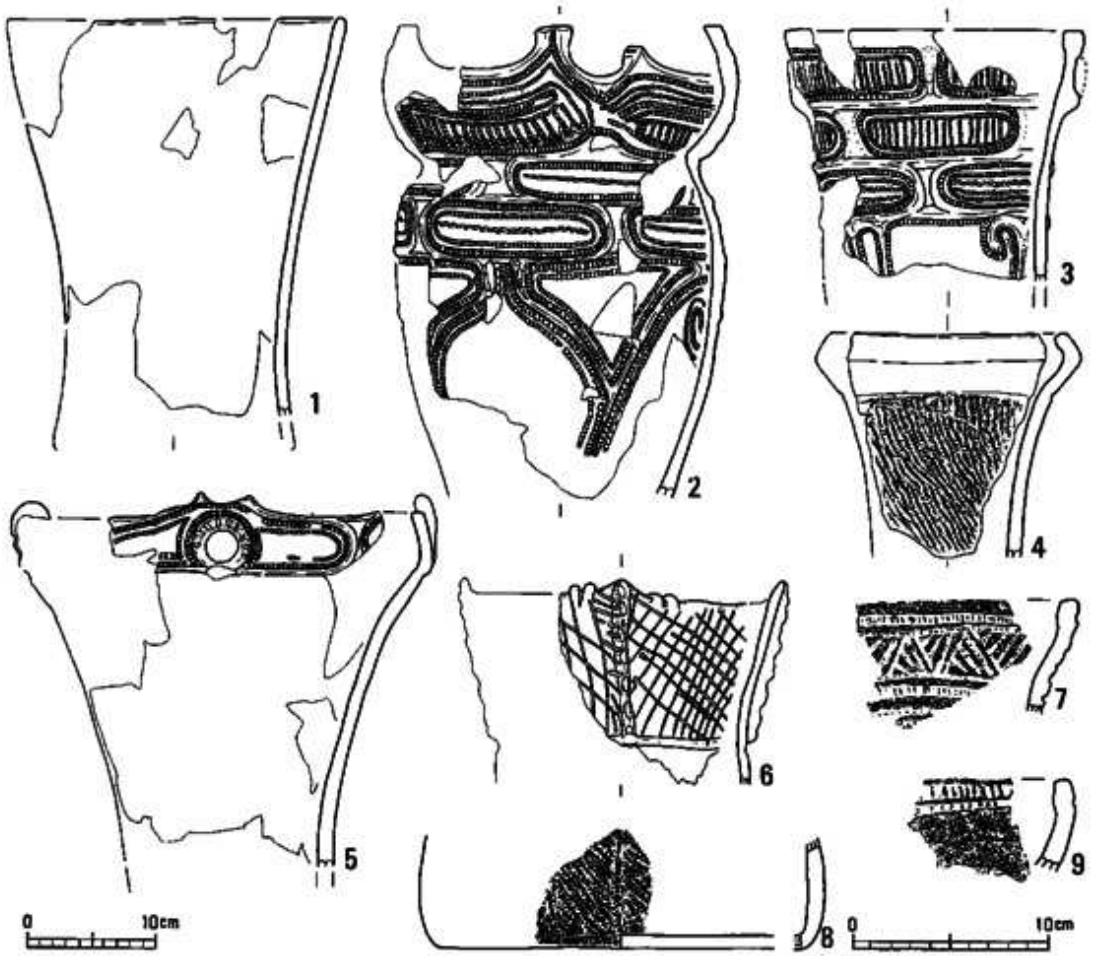
出土遺物　第34図15の線刻のある石皿が覆土上層より出土。第12図１は無文の深鉢。２は非常に屈曲の強いキャリパー形の深鉢である。角押文を主体とし、楕円区画文の中の鋸歯文などと一部に三角押文が用いられている。３は最上段の楕円区画文の間に刻みをもつ突起が２単位付けられている。角押文により施文されている。４は口縁部無文帯があり以下縄文が施文される、藤内・井戸尻期。５は口唇に２個の突起をもち、この下に刻みをもつ円環状の隆帯があり、これを中心に区画文が付けられる。６は波状口縁をなしその波頂から指頭押圧をもつ隆帯が縦に付けられ、鋭い沈線により格子目が施される。また波頂部の左右に２個単位の突起が付



第10図　ＳＢ４・ＳＢ８a・ＳＢ８b 住居跡



第11図　ＳＢ４　住居跡土層断面図



第12図　ＳＢ４住居出土土器

けられる。前期前半の中越式。７と９は角押文により施文。８は縄文の地文に結節浮線文が縦に貼付される底部、十三菩提期。１～３・５・７・９は狢沢期。第13図１・２・４・６は五領ヶ台期の沈線文系。１は結節浮線文状にみえる連続爪形文が施される。３は竹管による交互刺突と角押文による鋸歯文が施される。狢沢期。５・８・９は五領ヶ台Ⅱ期の縄文系。７は隆帯が横に走り、沈線状の押引文とつま楊枝状の刺突が施される。10は角押文が施される、狢沢期。11は内面に連続爪形文が施される。五領ヶ台期の浅鉢。12・13は口縁下と底部上が大きく張る

深鉢の口縁部と屈曲底部、井戸尻期。この遺構の所属時期は狢沢期。

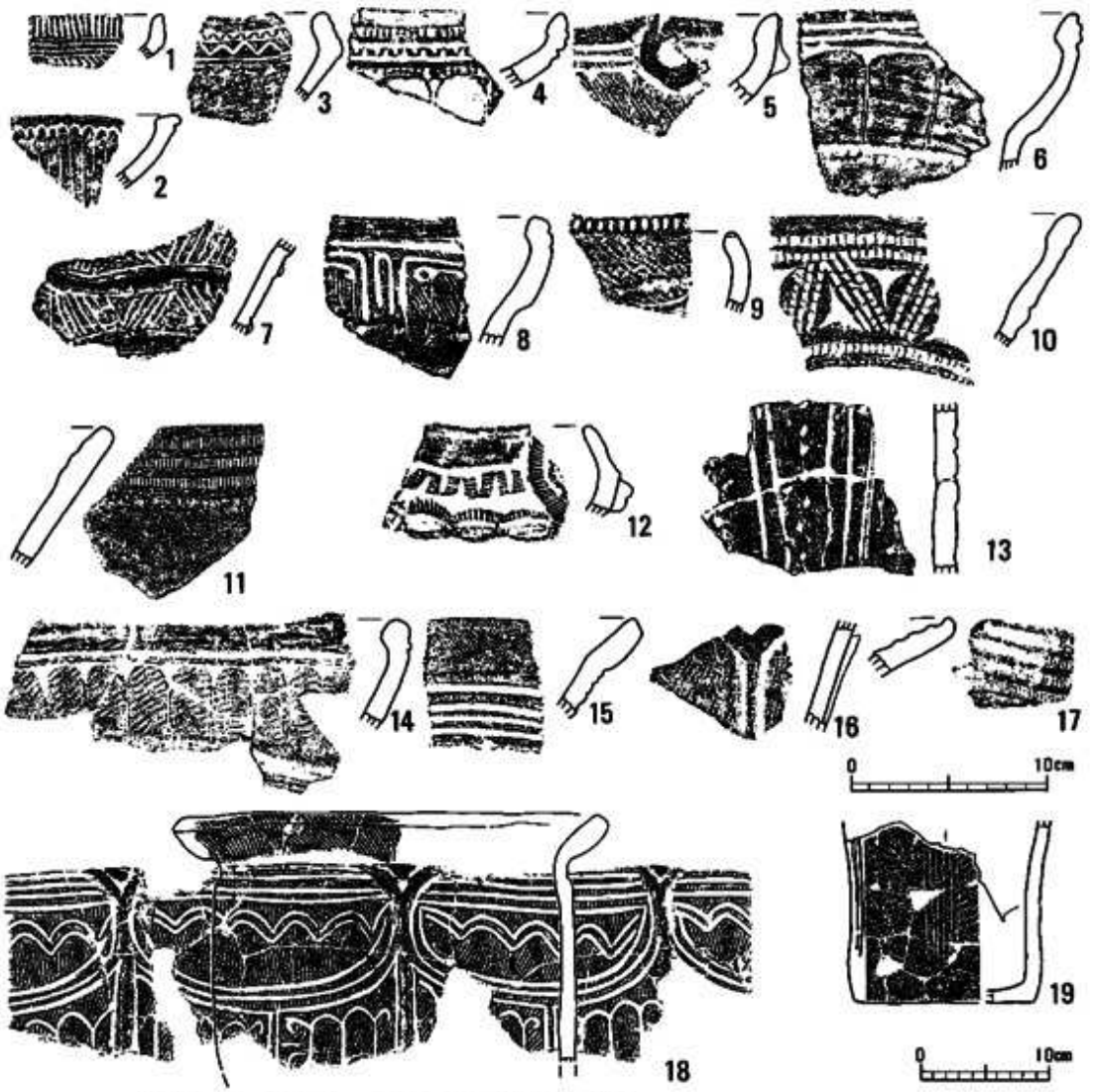
ＳＢ８ａ住居跡（第10・13図、図版３）

位　　置　Ｃ－４Ｇ　第４次調査に22号住居址と命名されたもの。第６次調査時に南側の埋甕炉を発見し、プランを再検討し２軒の重複であることが判明する。北側をＳＢ８ａ住居跡、南側をＳＢ８ｂ住居跡と整理段階で命名する。

形状・規模　円形、長軸5.1ｍ（推定）、短軸4.8ｍ（推定）

床　・　壁　良く踏み固められ、ほぼ平坦。壁の立ち上がりはなだらかである。壁高23cm

炉　　埋甕炉、炉体土器は第４次報告されたもので第13図18に示した。掘り方は90×110cmの不整楕円形、深さ約20cm。所属時期は五ヶ領台Ⅱ期。



第13図　ＳＢ４・ＳＢ８住居跡出土土器（ＳＢ４：1～13、ＳＢ８：14～19）

出土遺物　床面より10cm浮いたピットプラン上から、オニグルミ核などの破片が集中して出土した。合成樹脂（パラロイドB72）にて硬化させ取り上げた。詳細な種子同定は第５節参照。第13図14～16は縄文系土器。17は内面に連続爪形文が施される浅鉢、いずれも五領ヶ台II期。14はＳＢ８ｂ住居跡に属する。

ＳＢ８ｂ住居跡（第10・13図、図版３）

形状・規模　円形？、長軸4.8ｍ（現存）、短軸2.2ｍ（現存）

床　・　壁　良く踏み固められ、ほぼ平坦。壁の立ち上がりはなだらか。壁高24cm

炉　　埋甕炉、炉体土器は第13図19、焼土はほとんどみられなかった。所属時期は五ヶ領台II期。

ＳＢ７住居跡（第14～16図、図版３・５）

位　　置　Ｄ－39Ｇ　袋状土坑ＳＰ72・ＳＰ73に切られ、さらに北側南側をそれぞれ第118号方形周溝墓と第49号方形周溝墓に切られている。また北側では後世の耕作が深く、プランを確認できなかった。

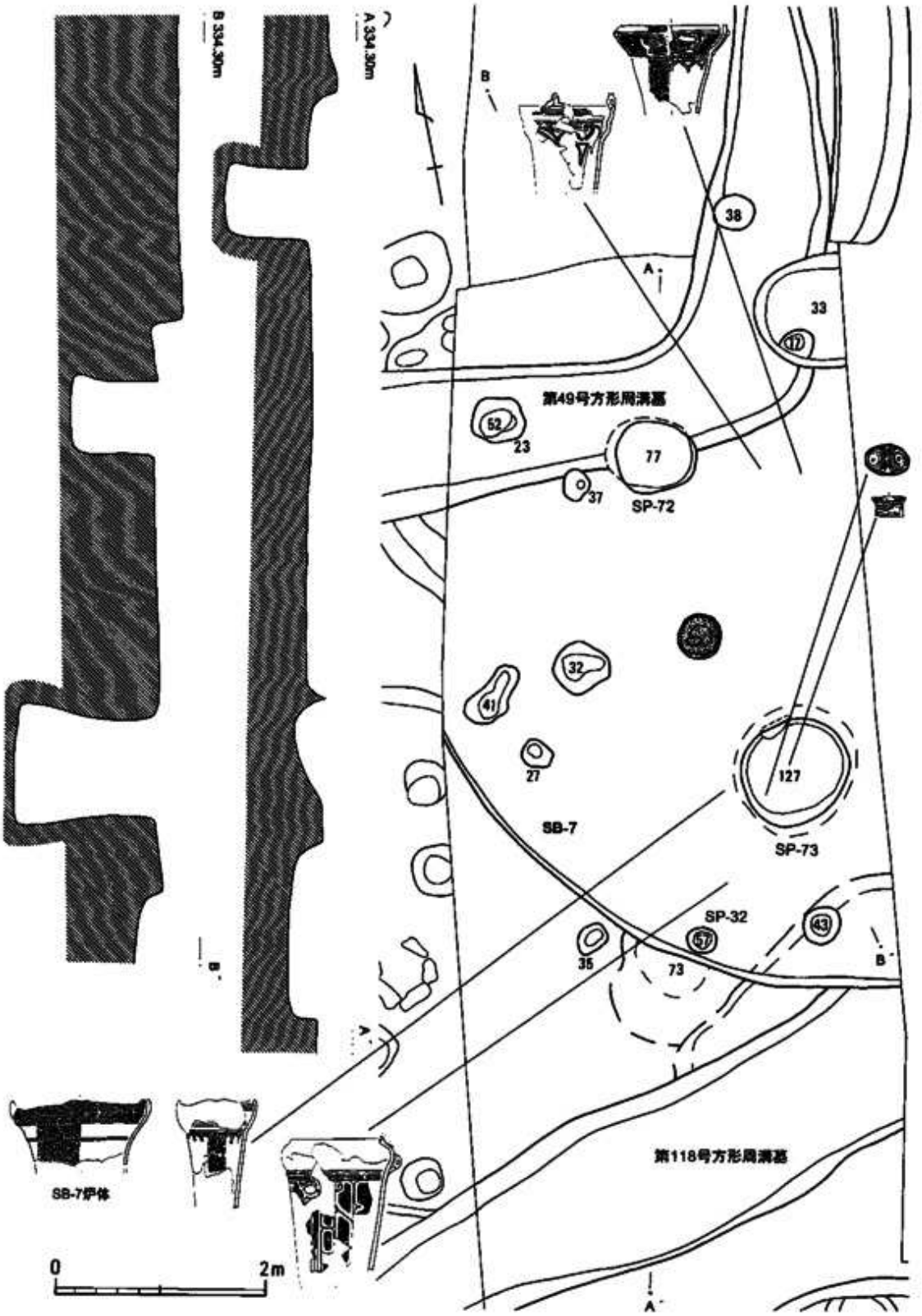
形状・規模　円形、現存長5.7ｍ

床　・　壁　硬化は弱かったがほぼ平坦で、壁の立ち上がりはなだらか。壁高22cm

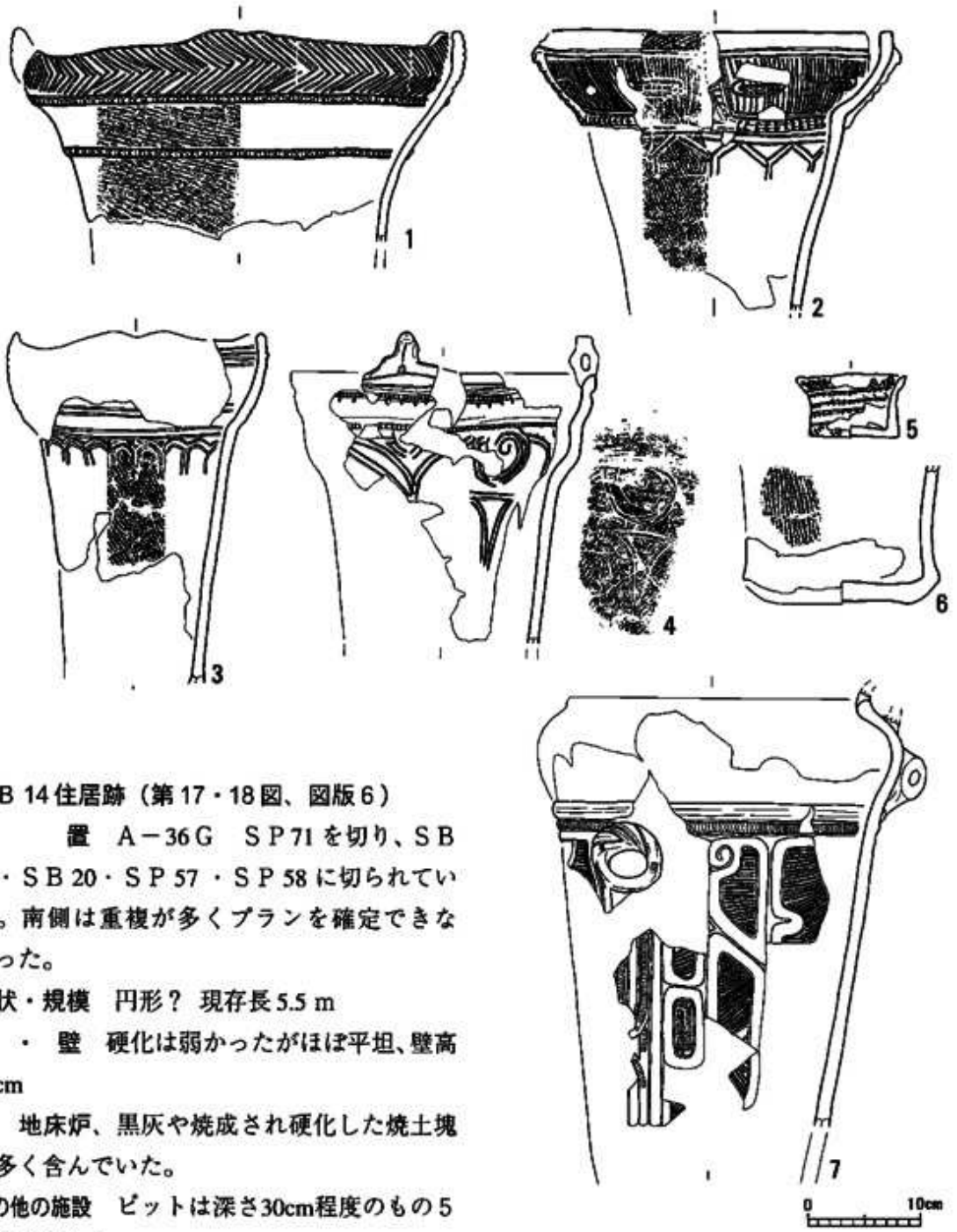
炉　　埋甕炉、炉体土器は第15図１。焼土をかなり含んでいた。所属時期は五ヶ領台期。

その他の施設　ピットは40cm以上の深さがあるものがＳＰ32を含めて４基、その他に深さ30cm前後のものが４基。

出土遺物　第15図１は炉体土器である。口縁部には矢羽状の集合沈線を巡らせ、その下は縄文を地文とし、四角錐が連続したような押圧隆帯が頸部に２条めぐっている。五領ヶ台II期。２～４は縄文を全面に施文しこれを地文とし、沈線によって文様を表出している、五領ヶ台II期。２・３は胴部に結節縄文がみられる。４は小さな三角印刻文が刺突によって付けられている。６は撚糸文が施された屈折底、藤内・井戸尻期。７は口縁部無文帯がありその下にパネル文手法が用いられている、藤内期。６と７の土器は流れ込みである。第16図１は波状口縁で縦に隆帯があり、連続爪形文で充填されている、十三菩提期。２～４・８～９は五領ヶ台期の沈線文系である。３の空白部分は削り込まれている、五領ヶ台Ｉ期。５は瓦状押引文や三角印刻文が付けられ、口縁上部に細線文が施されている。６は三角印刻文に細線文。７は縄文を地文として結節浮線文が貼付される、十三菩提期。10は瓦状押引文に細線文。11は縄文地文。12は沈線に細線文。13は刺突状の三角印刻文。14は口縁部のみに沈線が施されるが太く粗い。15は刺突状の三角印刻文。16は２個の突起、刺突状の三角印刻文。17は縄文地文。18は縄文地文、橋状把手が退化し潰れたもの、20は同一個体である。19は縄文地文上に押圧隆帯。21は橋状把手の潰れたもの。22は突起の上の口唇に２個の刻みがあり、刺突状の三角印刻文をもつ。23・24は結節縄文の地文。25は縄文地文。26は連続爪形文が付けられる。色調は灰白からオリーブ黒、白川下層式。27は棒状具による刺突文。結節縄文を地文とする底部。その他の第16図の土器は五領ヶ台期。


B 334.30m
A 334.30m
B
B'
A
A'
38
33
17
第49号方形周溝墓
52
23
77
37
SP-72
32
41
27
SB-7
127
SP-73
SP-32
57
43
35
73
第118号方形周溝墓
SB-7炉体
0
2m

第14図　ＳＢ７住居跡



第15図　ＳＢ７　住居跡・ＳＰ73土坑出土土器（ＳＢ：1～4・6～7、ＳＰ73：5）

ＳＢ14住居跡（第17・18図、図版６）

位　　置　Ａ－36Ｇ　ＳＰ71を切り、ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＰ57・ＳＰ58に切られている。南側は重複が多くプランを確定できなかった。

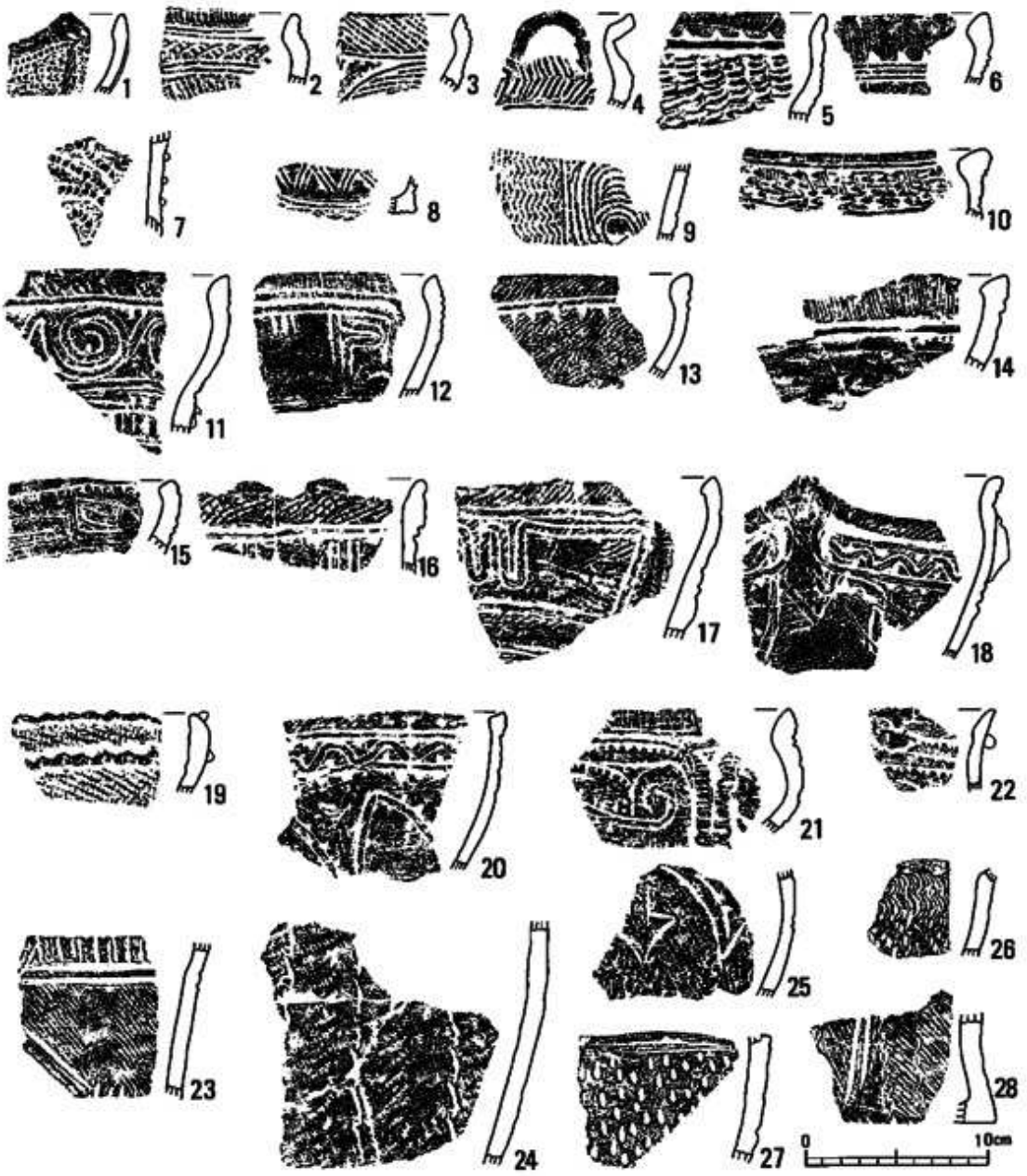
形状・規模　円形？　現存長5.5ｍ

床　・　壁　硬化は弱かったがほぼ平坦、壁高20cm

炉　地床炉、黒灰や焼成され硬化した焼土塊を多く含んでいた。

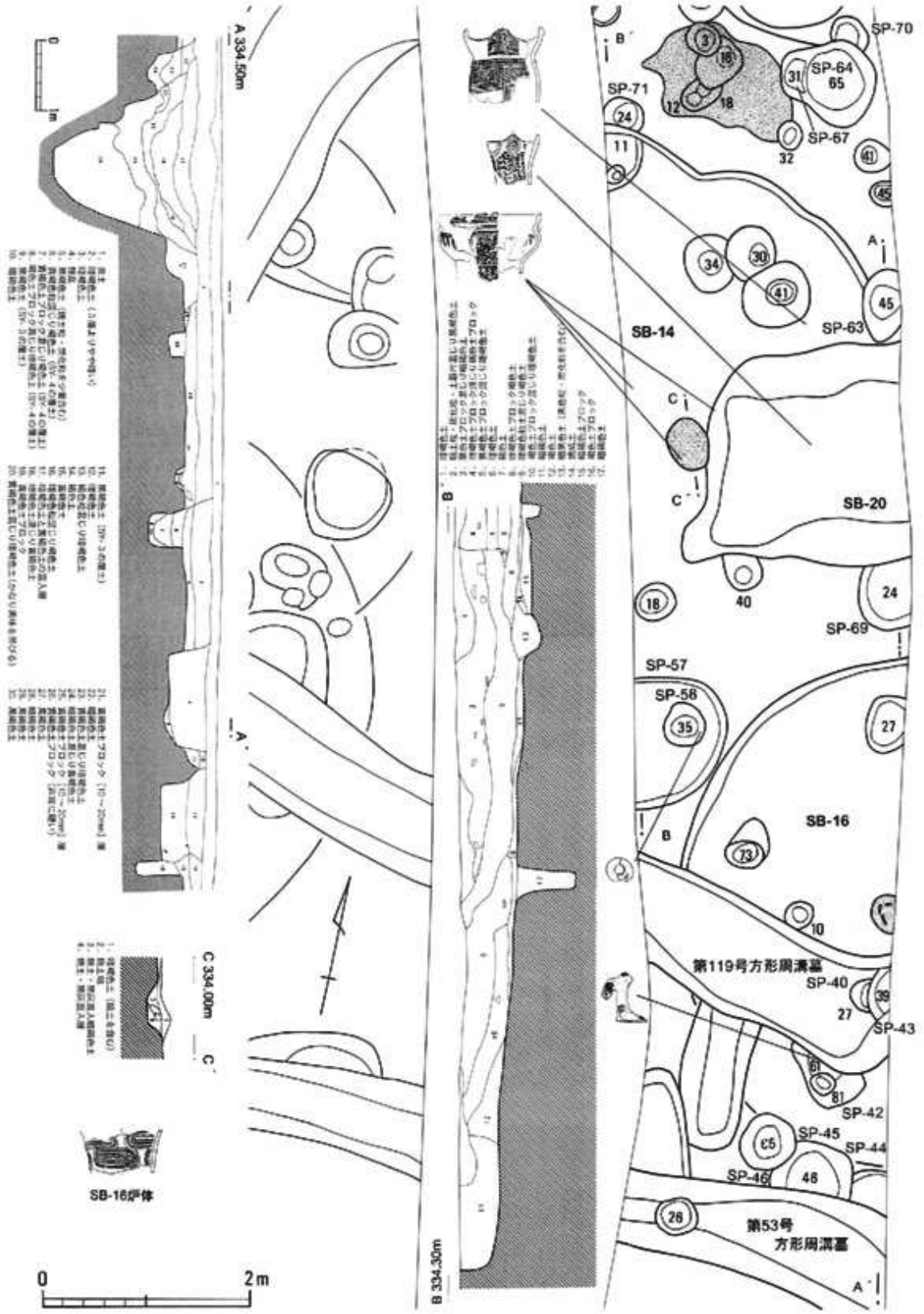
その他の施設　ピットは深さ30cm程度のもの５基を確認した。

出土遺物　第18図１は球胴形の縄文系の深鉢。２・４は沈線文系土器、４は空白部が削り込まれている。３・５・６は口唇に刻みをもつ波状口縁の深鉢。７～９は浅鉢、７は屈曲部に連続爪形文、８は内面に連続爪形文、９は屈曲

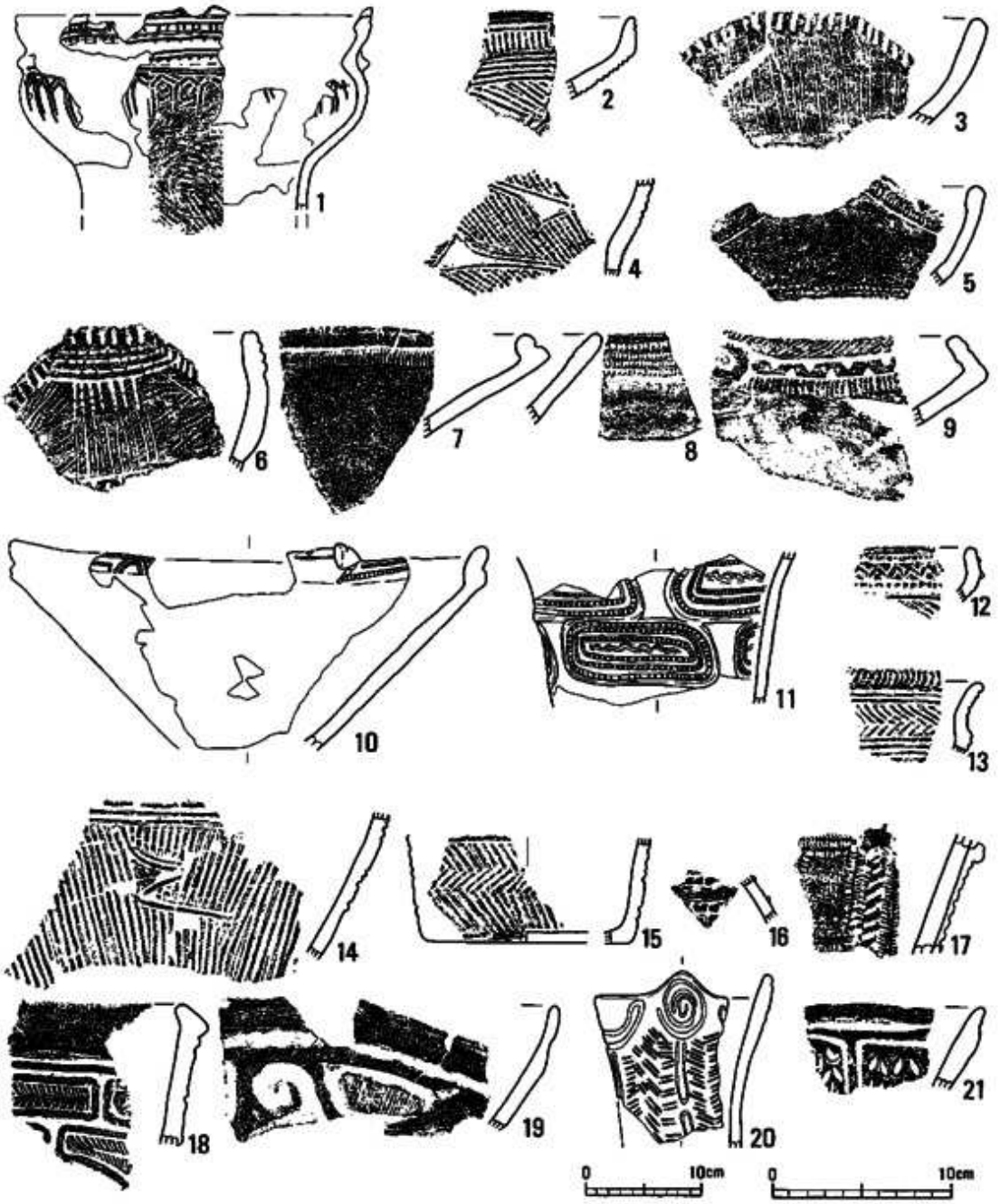


第16図　ＳＢ７住居跡出土土器

部に縄文地文上に交互刺突や連続爪形文が施されている。以上いずれも五領ヶ台期。
遺構所属時期は五領ヶ台Ⅱ期。



第17図　ＳＢ14・ＳＢ16住居跡・ＳＢ20遺構



第18図　ＳＢ14・ＳＢ16住居跡・ＳＢ20遺構出土土器（ＳＢ14：1～9、ＳＢ16：10～13、ＳＢ14：14～21）

ＳＢ16住居跡（第17・18図）

位　　置　Ｂ－37Ｇ　第119号方形周溝墓に切られ、南側のプランは不明。

形状・規模　円形？、現存長2.8ｍ、壁高５cm

床　・　壁　平坦で硬化した良好な床面、壁の遺存は悪く壁高５cm

炉　　埋甕炉、炉体土器は第18図11で炉内にはかなり焼土があった。掘り方は規模36×18cm（現存）、深さ15cm。所属時期は猿沢期。

その他の施設　ピットは73cmとかなり深いものを含め3基

出土遺物　第18図10は口縁部に角押文が施された狢沢期の浅鉢。11は炉体土器、角押文と三角押文が施される狢沢期の深鉢。12は無文地に結節浮線文が横位に二条走り、その間に鋸歯状に細粘土紐が貼付されている、十三菩提期。13は五領ヶ台期の沈線文系。

ＳＢ20遺構（第17図、図版6）

位　　置　Ｂ－36Ｇ　ＳＢ16、ＳＰ63・ＳＰ69を切る。

形状・規模　不整形方形？　現存長軸2.2m、短軸2.1m、深さ1.6cm。調査範囲外に伸び、全体の形状は不明。断面はほぼＶ字状である。覆土下層は10～20mm大の硬い黄褐色土塊を多く含んだザクザクの堆積であり、この上に暗褐色土が堆積している。これらの観察によれば、かなり大きな営力により地山の黄褐色土が移動し、そこで出来た窪みに暗褐色土が流入したものと考えられる。この遺構の性格は明らかでない。この営力は自然現象によるものである可能性がある。

出土遺物　第18図14・15は五領ヶ台期の沈線文系。16は無文地に結節浮線文、十三菩提期。17は隆帯上に刻みがあり、これに沿って幅広三角押文と三角押文が施される。18は疑似隆帯による横位のパネル文、藤内期。19は曽利III～IV期の深鉢。20・21は曽利Ｖ期。遺構所属時期は中期末か。

ＳＢ11住居跡（第19～21図、図版3・5）

位　　置　Ａ－35Ｇ　ＳＢ17・ＳＢ19・ＳＢ18住居跡、ＳＰ59・ＳＰ60を切り、第119号方形周溝墓に切られる。

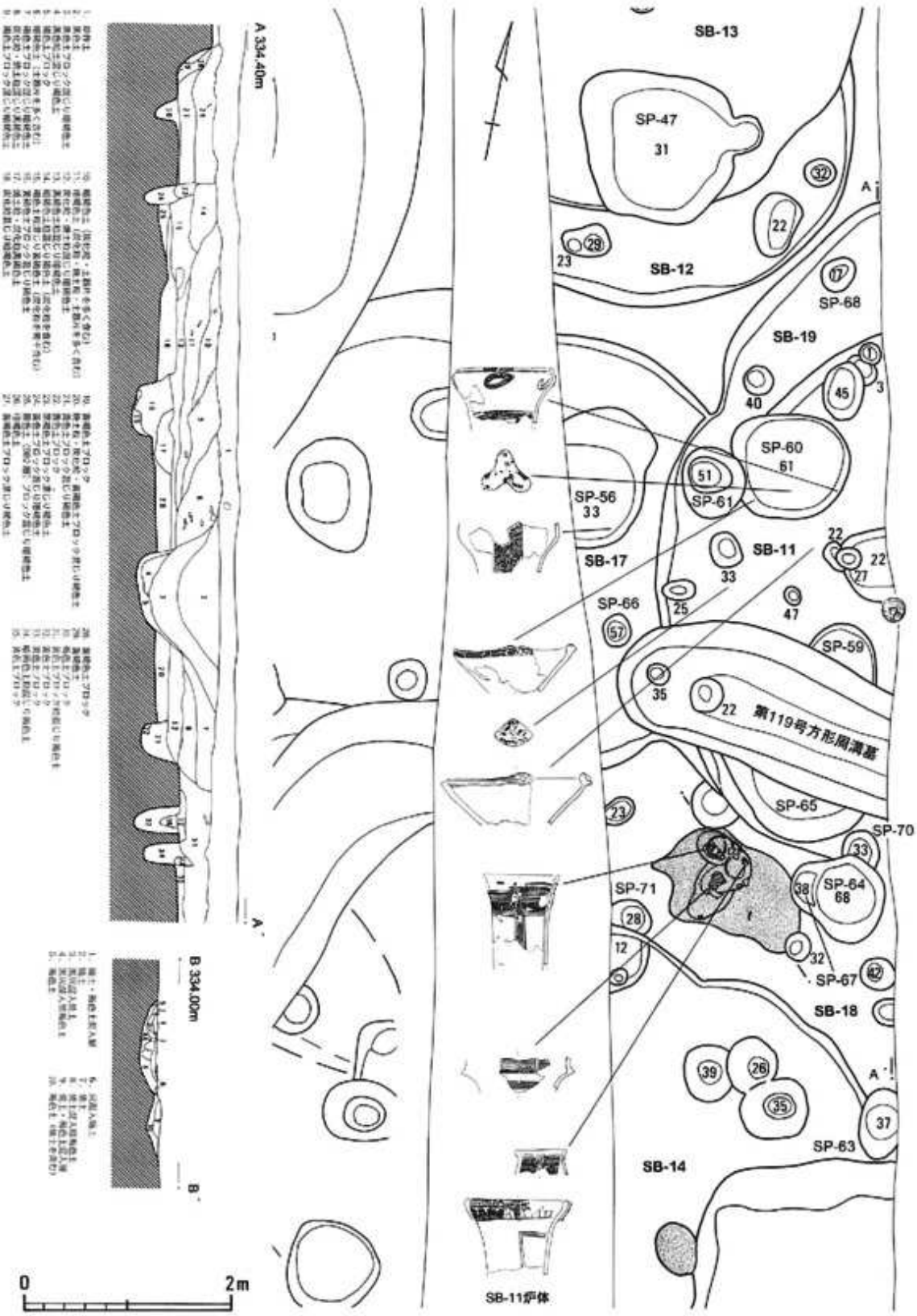
形状・規模　円形？　現存長3.2m。重複が多くプランは明確でない。

床　・　壁　床面は12・13層の下面であり、以下の18・20層は掘り方もしくは別遺構と考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は平均して約10cmを測る。

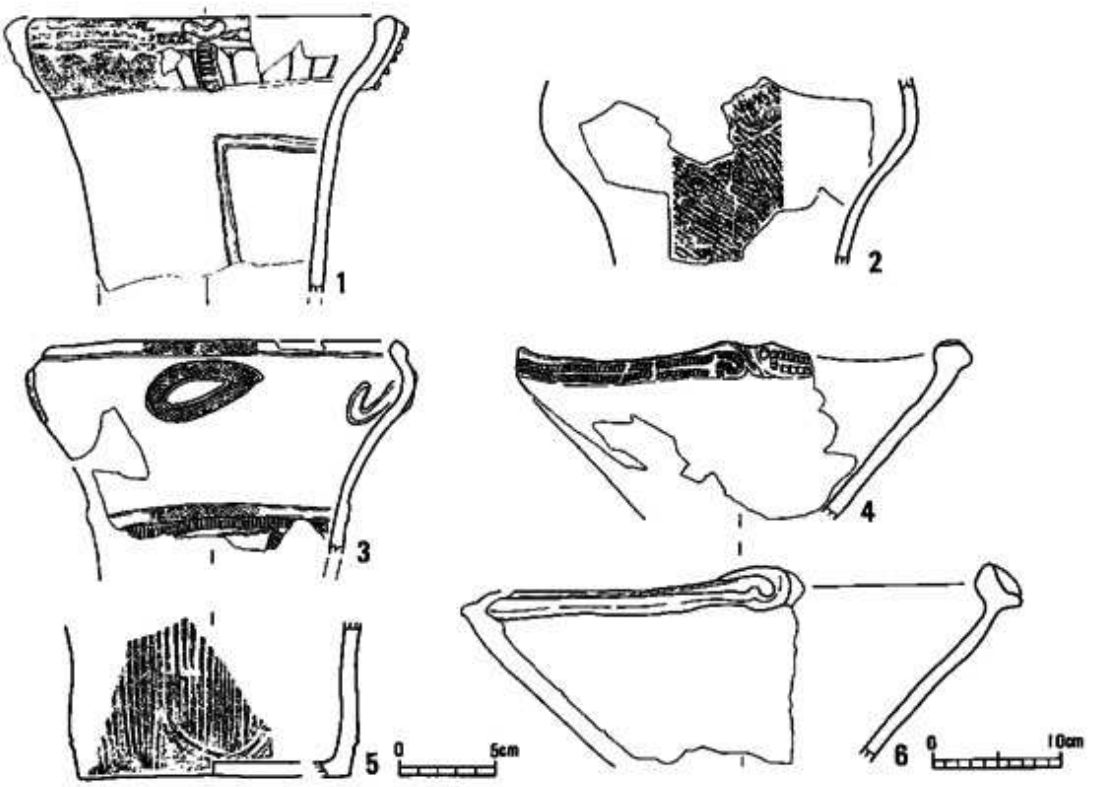
炉　　埋甕炉、炉体土器は第20図1の深鉢。遺構所属時期は五領ヶ台最終末。

その他の施設　ピットは炉と壁の中間に深いもの1基と壁際から5基が検出された。

出土遺物　第20図1は炉体土器。縄文地文に沈線にてＹ字状文が表現され、胴部は無文地にクランク状の隆帯文が付けられる。五領ヶ台最終末。2は球胴形で縄文が施される。五領ヶ台期であろう。3は隆帯上に縄文が施される深鉢、藤内期。4は口縁外面に角押文が施される。狢沢期。5は五領ヶ台期の沈線文系。空白部分は彫り込まれている。6は口縁部に隆帯が巡らされる、中期中葉。第21図1は口縁に沿って隆帯が貼付されその上に縄文、口唇に刻みが施され、以下には竹管文による押引文が付けられる。2～4、7、11・13・15・18・19は五領ヶ台期の沈線文系。8～10・12・14は五領ヶ台期の縄文系。5は竹管文によるＹ字状文の一部が認められる。6は口縁のみ縄文が施される。16は横位に角押文が施され、一部に縄文が見られる。五領ヶ台期末～狢沢期。20は連続の爪形文・三角押文が施される狢沢期。21は低平な隆帯上に縄文が付けられ、幅広の爪形文と蛇行沈線が施される、藤内期。22は太い沈線で菱形に区画し、



第19図　ＳＢ11・ＳＢ18・ＳＢ19住居跡



第20図　ＳＢ11住居跡出土土器

口縁波頂下に三角形の刺突を加えている。23も三角形の刺突が施される。24は刻みのある隆帯が垂下し、連続爪形文が施される。25は口縁部が屈曲し、これに連続爪形文が施される、猪沢期の浅鉢。

ＳＢ17住居跡（第19図、図版３）

位　　置　Ａ－35Ｇ　ＳＢ11住居跡と第119号方形周溝墓とＳＰ56に切られる。第５次調査の42号住居址の一部と思われる。

形状・規模　円形？　現存長4.2ｍ。

床　・　壁　床面は重複が多く明瞭ではなく、南側がやや低い。壁高15cm

その他の施設　ピット１基を検出

出土遺物　第21図26と28は五領ヶ台期の沈線文系。27は五領ヶ台期の縄文系。29は内面に連続爪形文が施される五領ヶ台期の浅鉢。30は五領ヶ台期の胴部下半。31は沈線を地文とし隆帯上に爪形文が付けられる、五領ヶ台期。遺構所属時期は五領ヶ台期。

ＳＢ19住居跡（第19図、図版３）

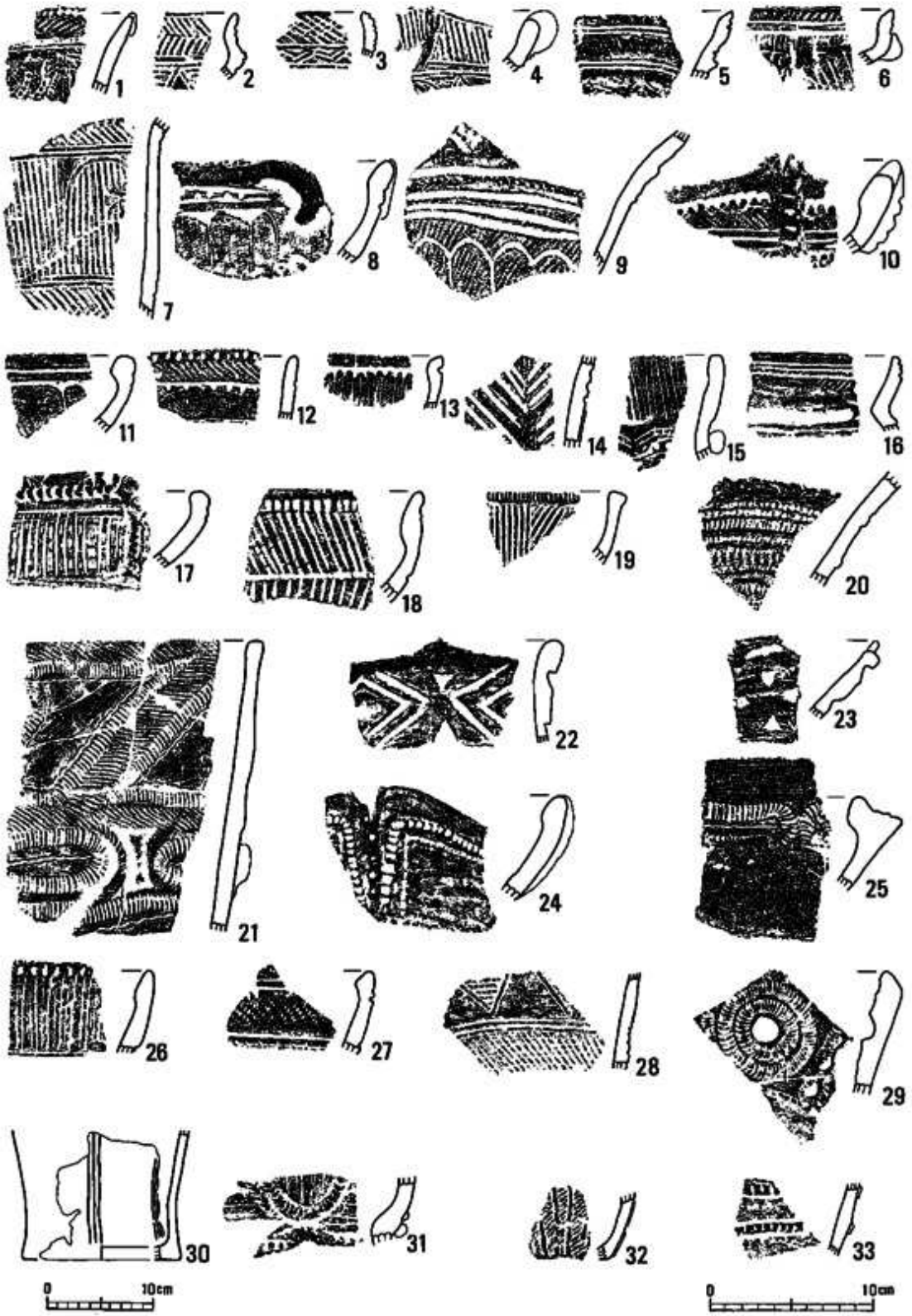
位　　置　Ａ－33Ｇ　ＳＢ17住居跡と重複し、ＳＢ11住居跡などに切られる。一部分のみを調査するに止まる。

形状・規模　円形？　現存長2.5 m
床　・　壁　床はほぼ平坦、壁高26cm
その他の施設　ピット2基を検出
出土遺物　第21図32は縄文地文の上に細粘土紐が貼付される、十三菩提期。32は細い隆帯上に竹管文による刻みが施される。

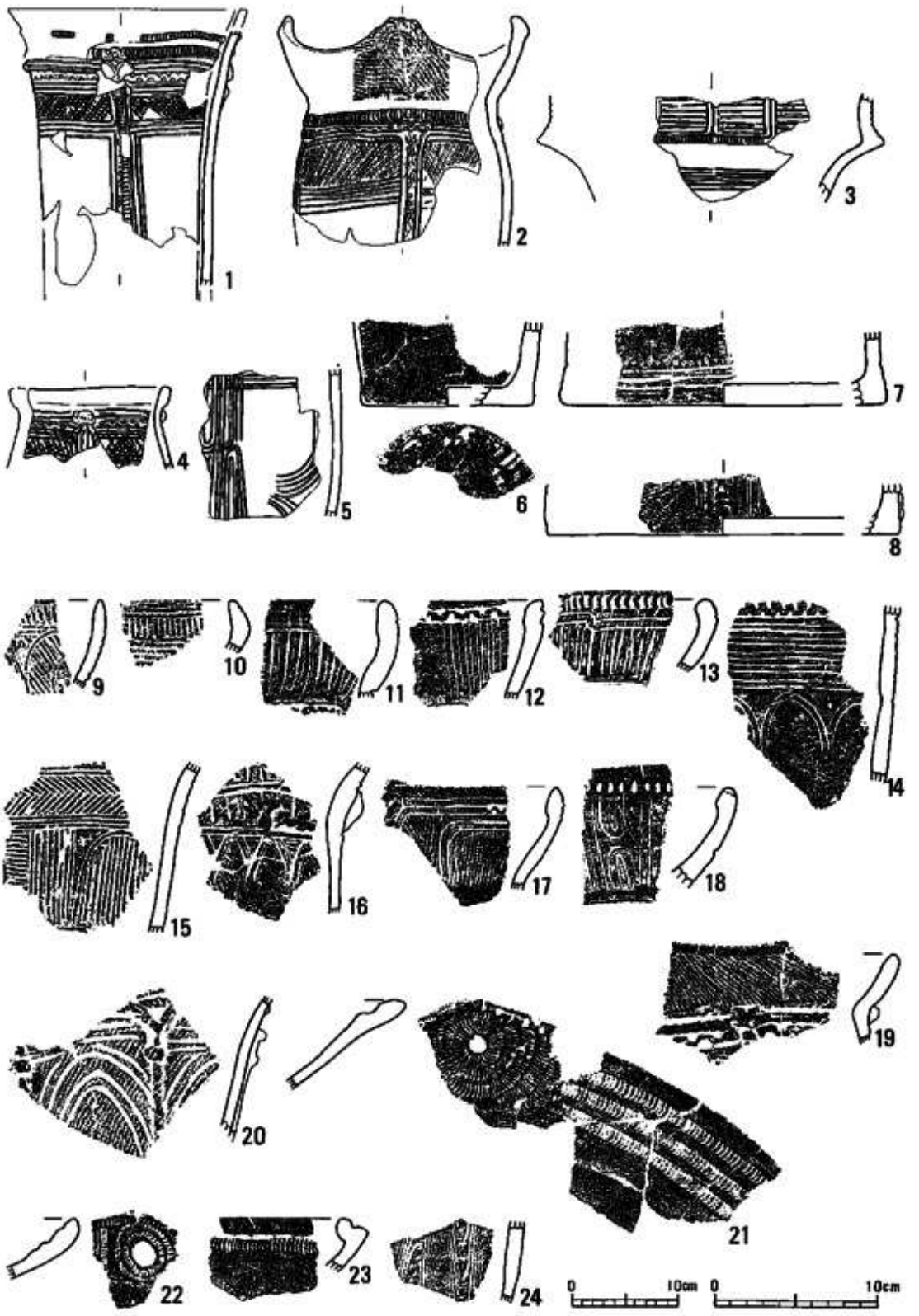
ＳＢ18住居跡（第19・22図、図版3・6）
位　　置　Ａ－35Ｇ　ＳＢ14・ＳＢ11住居跡などに切られる。炉を中心とした住居の中心部のみである。
形状・規模　不明　現存規模4 m
床　・　壁　焼土・炭化物が散布し、良く硬化した床面である。壁は検出できず。
　炉　　繰り返して炉が構築され、少なくとも4基が認められた。その内訳は良好な埋甕炉1基、炉体土器は第22図1、第22図3の土器が中心にあり埋甕炉と考えられるもの1基、さらに窪んだ火床面が1基である。遺構所属時期は五領ヶ台II期。
その他の施設　ピットが8個みられた。
出土遺物　第22図1は炉体土器、五領ヶ台期の沈線文系。竹管の押引による沈線によって区画をし、その中を沈線にて格子目文を充填する。交互刺突もみられる。3～5・7・9は五領ヶ台期の沈線文系。3・4は炉中から出土。6は底部に網代痕が認められる。8は縄文地文に隆帯か。10～13・15・16は五領ヶ台期の沈線文系。10・14～21は縄文を地文とする、五領ヶ台期。21・22は内面に連続爪形文が付けられる、五領ヶ台期の浅鉢。23は口縁が強く屈曲する浅鉢。24は木目状撚糸文が施される。

ＳＢ12住居跡（第23・24図、図版3）
位　　置　Ａ－34Ｇ　ＳＢ13住居跡やＳＰ47を切る。
形状・規模　円形　現存長軸2.9 m、短軸3.7 m
床　・　壁　ほぼ平坦、壁高12cm
　炉　　地床炉、炉中央から第24図15の土器が出土しているが、埋設した痕跡は確認出来なかった。16も炉中から出土した。覆土を水洗選別した結果、ヘビ類の椎骨1点を検出した。遺構所属時期は藤内期。
その他の施設　ピットは壁際に6基
出土遺物　第24図15は大型深鉢、隆帯脇に幅広の連続爪形文、藤内期。16は竹管による疑似隆帯で区画をつくる。隆帯上にも竹管文によって爪形文が施される、藤内期。

ＳＢ13住居跡（第23図、図版3・6）
位　　置　Ｚ－34Ｇ　ＳＢ12・ＳＢ15住居跡・ＳＰ47に切られる。ＳＢ12住居跡とは平面的にも大きく重なり、両者の床面はやや接近しその間のレベル差は約10cmである。



第21図　ＳＢ11・ＳＢ17・ＳＢ19住居跡出土土器（ＳＢ11：1～25、ＳＢ17：26～31、ＳＢ19：32・33）



第22図　ＳＢ14・ＳＢ18住居跡出土土器（ＳＢ14：2、ＳＢ18：1、3～21）1～5のみ1／6

形状・規模　円形？　現存長3.8 m

床　・　壁　中央部やや低いがほぼ平坦、壁高は5 cm程度でかろうじて検出した。

炉　　ＳＢ12住居跡の床面下から埋甕炉を3基を発見。北側の埋甕炉（炉体土器は第24図13）と南側の埋甕炉（炉体土器は第24図12）は炉体土器の上部の遺存がやや悪い。南側の埋甕炉（炉体土器は第24図12）がもっとも遺存がよい。またこの南側の炉は地床炉としても使用されたらしく、地山が熱を受けて焼成されている。これらの使用時期差の判断は難しいが、遺存状態から考えれば南側の埋甕炉が新しいと言えよう。遺構所属時期は五領ヶ台II期。

その他の施設　この住居跡に伴うピットは、北側の埋甕炉の東西にある3基であろう。

出土遺物　第24図12・13は縄文の地文に沈線を施したもの。14は沈線にて懸垂文が施される。第24図1～4・7～9・11は沈線文系。5～6・10は縄文を地文とする。以上いずれも五領ヶ台期。

ＳＢ15（第23・25図、図版6）

位　　置　Ｚ－33Ｇ　ＳＰ48・ＳＰ55、ＳＹ2方形周溝墓に切られる。重複が激しく、また床面も硬化が悪く、プランを明確に出来なかった。

炉　　地床炉2基、どちらも良く焼成されている。

その他の施設　土坑が2基、ピットが16基確認された。

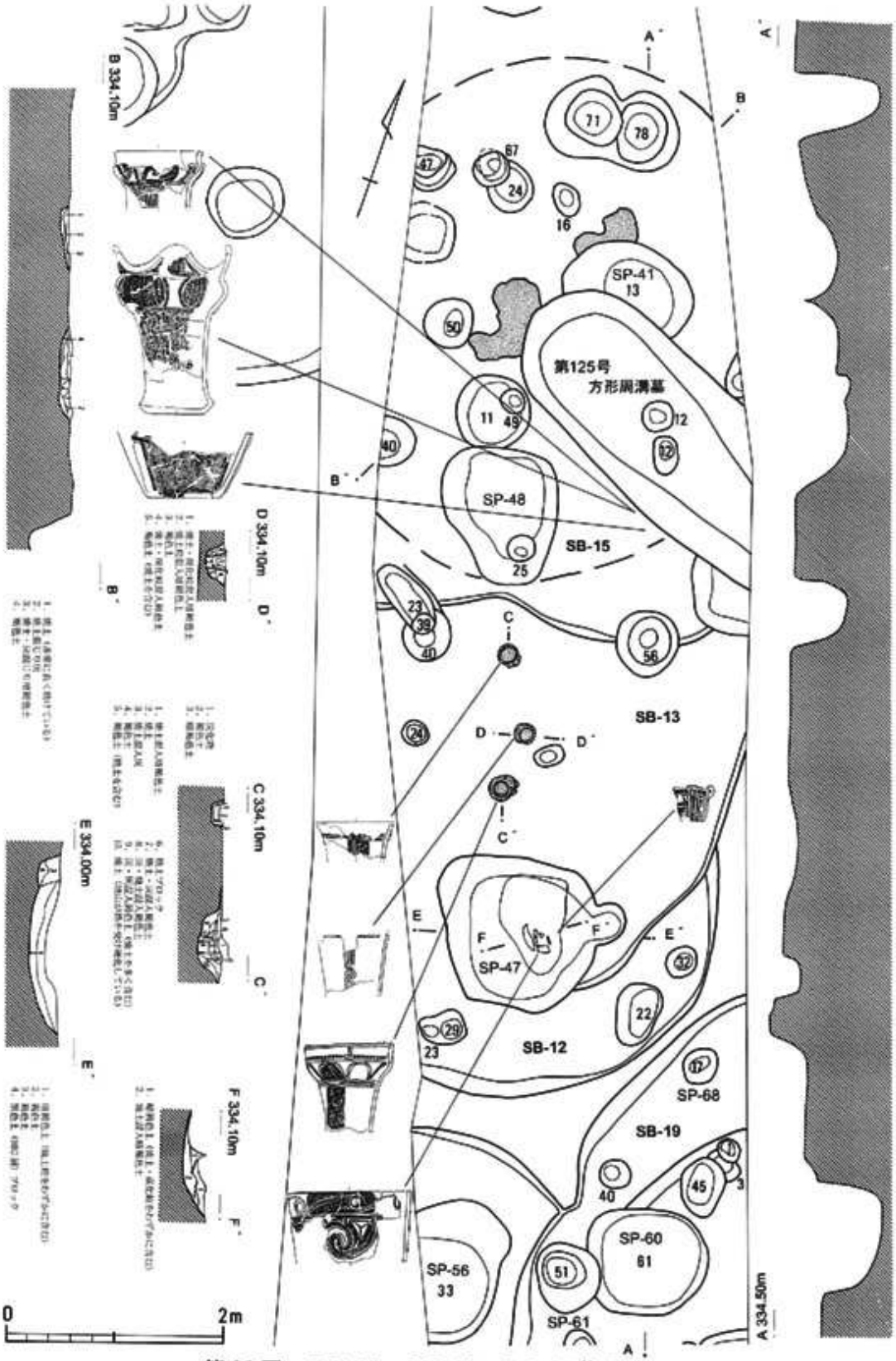
出土遺物　第25図1は縄文地文の上に結節浮線文が横位に走るもの、十三菩提期。2・3・6は沈線文系。4・5は沈線の区画内に縄文が施されるもの。7は連続刺突が施されるもの。8～10は浅鉢。8は角押文の押引文。9は連続爪形文。10は屈曲する口縁をもち、内外面ともに角押文・爪形文・交互刺突などが施される。11は波状口縁をなし、隆帯上と口唇上に刺突が施される。12は外面は沈線、内面には角押文の押引文が見られる。13は4単位の波状口縁をなす深鉢。隆帯上に刺突された隆帯によって楕円区画をつくる。交互刺突がみられる。胴部は撚糸文が施される、藤内期。14・15は屈曲する口縁をもち、口縁には連続爪形文、外面には沈線が施される。16は半截竹管の押引文が施され、縄文が上に施された横位の橋状把手の潰れたものが貼付されている。五領ヶ台期。17は口縁部には交互刺突や刻みをもつ隆帯が付けられ、胴部には撚糸文が施される、藤内期。18は無文に横位の橋状把手の潰れたものが貼付されている。19は底部、蛇行沈線を横位に走らせ、刺突を加える。20は口縁に沿って粘土紐と突起が貼付されている。21は撚糸文地文に刻みをもつ隆帯が貼付される、藤内期。遺構所属時期は藤内期。

ＳＢ1（第3図）

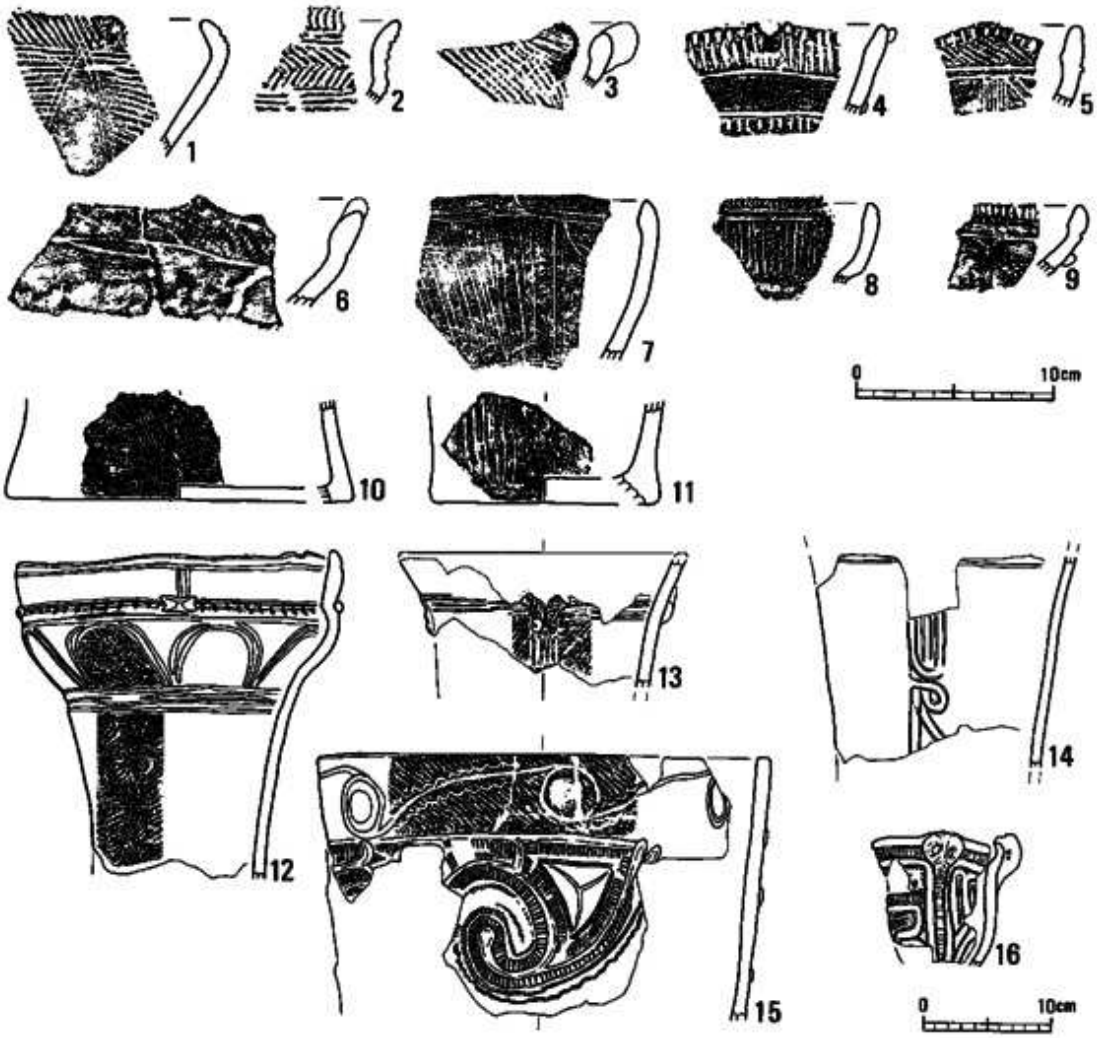
遺物が散布するため命名したが、重複した土坑群らしいが撹乱がひどくプランを把握出来なかった。

ＳＢ10（第3図）

第5次調査の37号住居址（井戸尻期）と同一遺構。



第23図　ＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ15住居跡



第24図　ＳＢ12・13住居跡出土土器

２．土坑

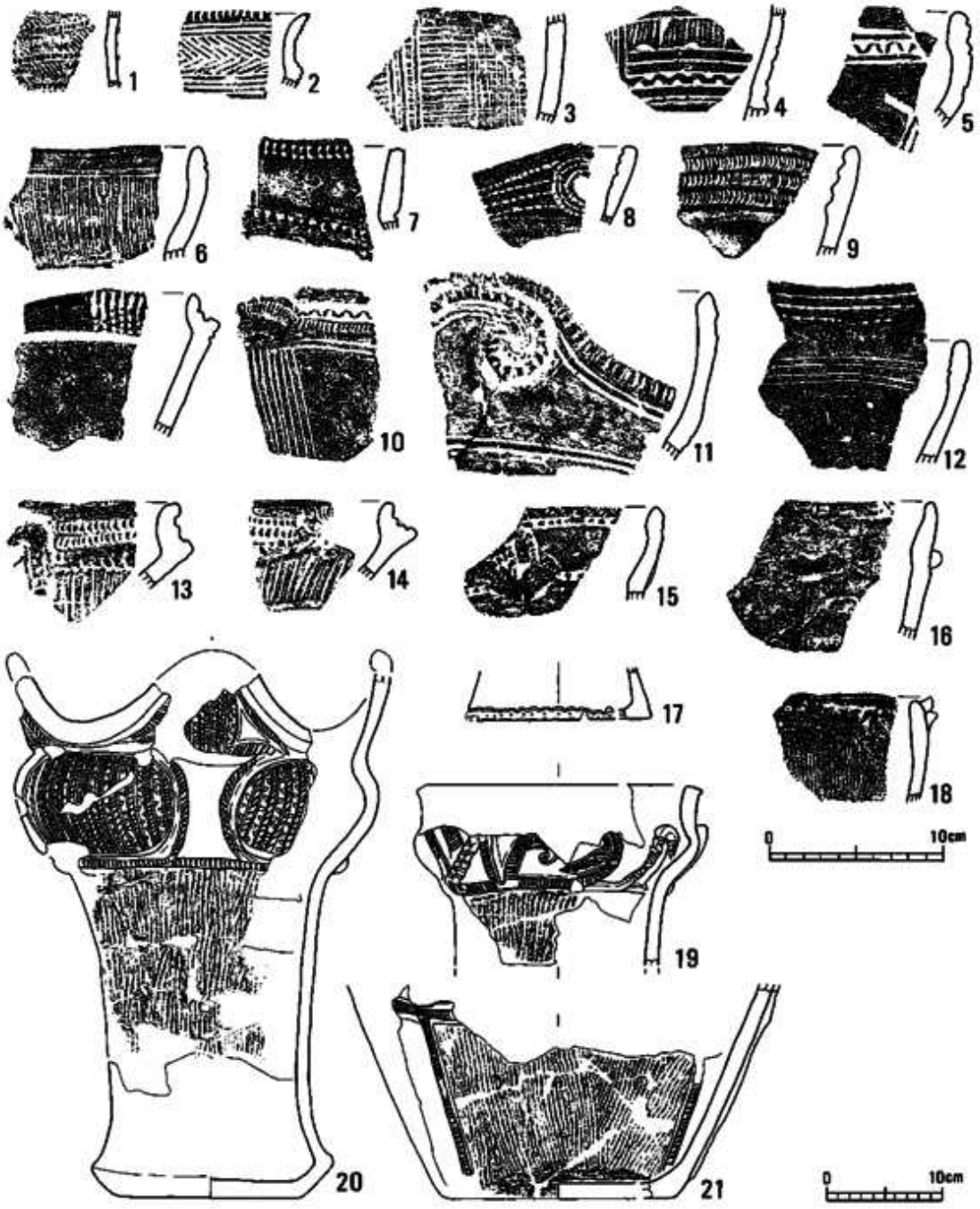
多数の土坑が発見され、土坑番号（ＳＰ）を付けたものだけでも73基を数え、これらを一覧表に整理した（第１表）。住居跡の柱穴と区別がつかない形態のものが大半である。以下には、底が広がるフラスコ形としたものや特別な遺物が出土した土坑のみ以下に掲載した。

ＳＰ59（第26・27図、図版４）

位　　置　ＳＢ11住居跡や第119号方形周溝墓に切られている。

形　　状　平面は楕円形、断面はフラスコ形

出土遺物　第27図１の深鉢が出土、胴部下半以下を欠くが上半の遺存は良好。五領ヶ台期の沈線文系。その他には大礫（拳大～人頭）が８個出土。



第25図　ＳＢ15住居跡出土土器

ＳＰ60（第26・27図、図版4・6）

位　　置　ＳＢ11住居跡やＳＰ61に切られる。

形　　状　平面は楕円形、断面は逆台形

出土遺物　第27図2・4～5の五領ヶ台期の沈線文系土器。その他には大礫が多数出土。

ＳＰ72（第14・15図、図版４）

位　　置　ＳＢ７を切る。現場では、ＳＢ７のピット１として調査を進めたが、整理段階にてＳＰ72と命名した。

形　　状　平面は楕円形、断面はフラスコ形

出土遺物　遺物は覆土上層のＳＢ７の床面とほぼ同一レベルから多く出土した。第15図５はミニチュア土器、縄文を地文とし沈線を巡らせ、刺突が施されている。第29図17の獣面把手の獣面のみのもの。

ＳＰ73（第14図、図版３）

位　　置　ＳＢ７を切る。現場では、ＳＢ７のピット２として調査を進めたが、整理段階にてＳＰ73と命名した。

形　　状　平面は楕円形、断面はフラスコ形

ＳＰ42（第17図、図版４）

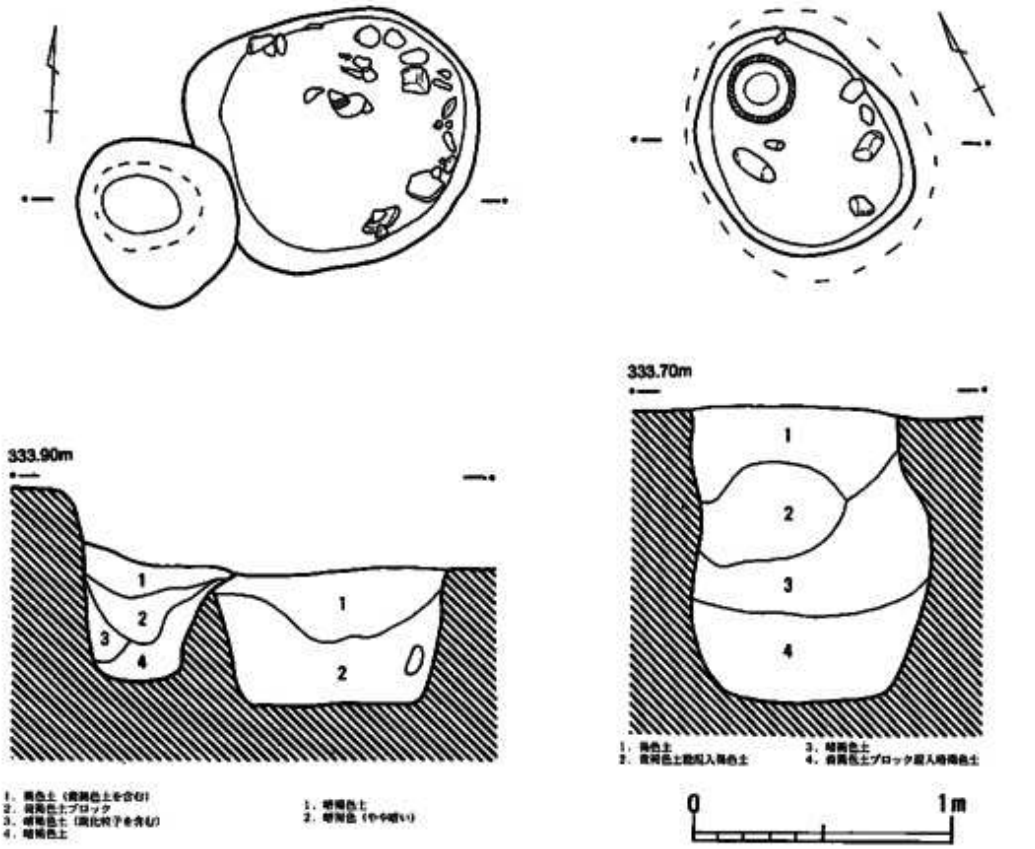
位　　置　119号方形周溝墓に切られる。

形　　状　平面は隅丸方形、断面は逆台形

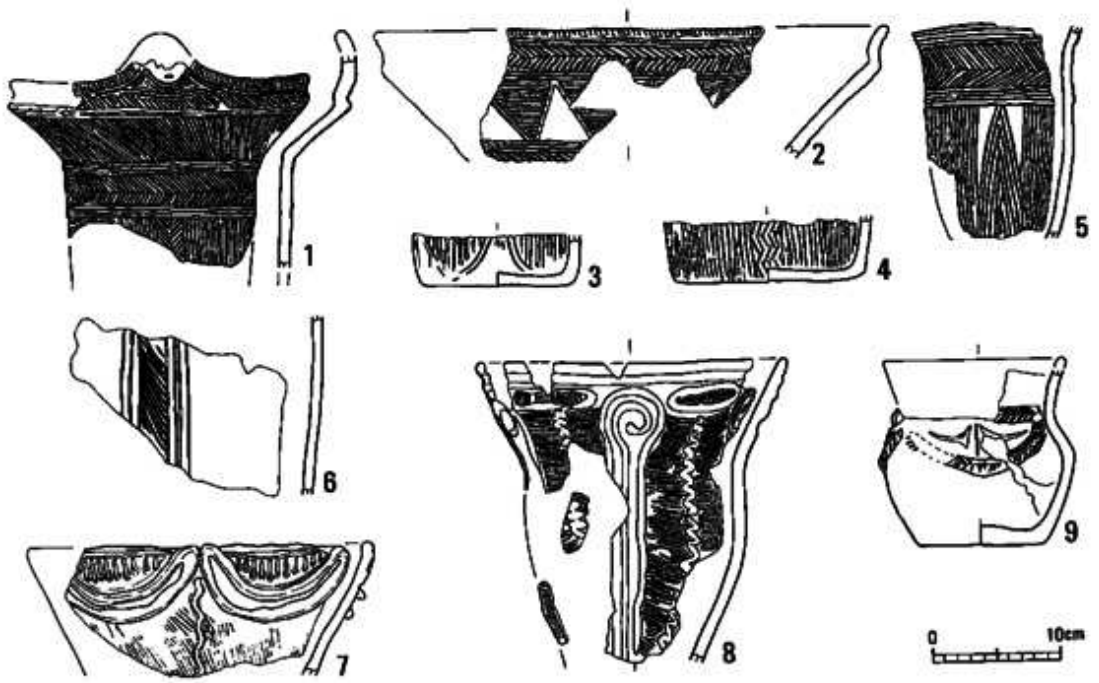
出土遺物　覆土中層より座像型の大型土偶の脚部（第29図10、図版６）が横向きで出土。また赤色顔料（第５節参照）が点々と出土した。平面形が隅丸方形で他の土坑と大きくことなることと、大型の座像型土偶という類例の少ない遺物が出土していることから、特殊な性格の遺構と考えられる。

第1表　土坑一覧

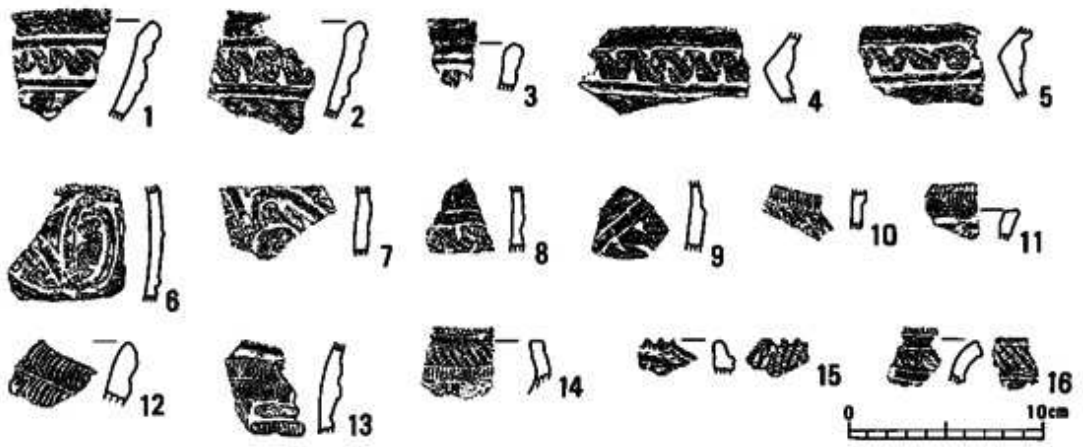
遺構番号	位置	平面形	断面形	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	重複関係	出土遺物
SP1	E-7G	楕円形	皿形	103	74	64	五ヶ領台期		
SP2	C-8G	円形	U字形	90	84	38	-		
SP3	C-8G	円形	逆台形	64	58	41	藤内・井戸尻期		
SP4	C-8G	円形	逆台形	50	43	38			
SP5	C-7G	円形	皿形	43	37	37	-		
SP6	C-7G	円形	U字形	40	34	43	-	SP5を切る	
SP7	C-7G	円形	U字形	80	76	32	藤内・井戸尻期		
SP8	C-8G	楕円形	U字形	42	(36)	34	-		
SP9	C-8G	楕円形	U字形	57	43	38	-		
SP10	C-7G	楕円形	皿形	12	(40)	39	-		
SP11	C-7G	楕円形	逆台形	170	118	47	曽利・新		
SP12	D-6G	不整円形	逆台形	131	104	43	新道期	SP14に切られる	
SP13	D-6G	不整円形	逆台形	155	135	63	曽利期		土偶16
SP14	D-6G	楕円形	逆台形	151	84	43	中期中葉	SP12を切る	
SP15	D-6G	楕円形	逆台形	135	74	49	-	SP16を切る	
SP16	D-6G	不整円形	逆台形	(167)	(84)	37	中期中葉	SP15に切られる	
SP17	D-7G	楕円形	逆台形	197	110	48	中期中葉	SP18に切られる	
SP18	D-7G	円形	U字形	113	111	36	中期中葉	SP17を切る	
SP19	C-5G	不整形	皿形	(65)	(46)	12	不明	第119号方形周溝墓に切られる	多量の中礫、土偶10
SP20	C-5G	不整形	皿形	(68)	(53)	16	不明	第119号方形周溝墓に切られる	多量の中礫
SP21	E-6G	楕円形	U字形	37	31	18	-		
SP22	D-7G	楕円形	U字形	50	42	42	-		
SP23A	D-8G	不整円形	U字形	41	33	38	-		
SP23B	D-8G	不整円形	U字形	50	(44)	23	-		
SP24	D-8G	円形	U字形	43	38	43	曽利期		
SP25	E-6G	撹乱	-	-	-	-	-		
SP26	欠番	-	-	-	-	-	-		
SP27	C-8G	円形	皿形	75	68	23	五ヶ領台期		
SP28	C-7G	円形	皿形	83	77	22	-		
SP29	C-7G	不整円形	皿形	90	78	19	-		
SP30	C-8G	楕円形	U字形	61	44	29	-		
SP31	C-8G	撹乱	-	-	-	-	-		
SP32	B-1G	円形	U字形	26	25	41	中期後半		
SP33	B-1G	不整円形	U字形	32	25	39	-	4次調査済	
SP34	B-38G	楕円形	逆台形	130	(63)	19	中期中葉		集石
SP35	B-40G	円形?	逆台形	103	(60)	34	中期中葉		殴土上層から巨礫
SP36	B-39G	円形	逆台形	(71)	(69)	45	-	第53号方形周溝墓に切られる	
SP37	B-39G	円形	逆台形	87	75	56	中期中葉	SD1に切られる	
SP38	Z-31G	円形?	U字型	102	51	-	-		
SP39	B-40G	楕円形	逆台形	151	122	45	-		
SP40	B-37G	円形	U字形	30	(17)	27	不明	SP43に切られる	
SP41	欠番	-	-	-	-	-	-		
SP42	B-37G	隅丸方形	逆台形	76	50	78	井戸尻期	第119号周溝墓に切られる	土偶10
SP43	B-37G	円形?	U字形	(54)	(22)	50	焼沢期	SP40を切る	
SP44	B-37G	不明	逆台形	(77)	(52)	65	-	SP45・第53号周溝墓に切られる	
SP45	B-37G	円形	U字形?	82	81	54	中期中葉	SP44・第53号周溝墓を切る	
SP46	B-37G	円形	U字形?	56	45	66	中期中葉	SP45を切る	
SP47	Z-34G	不整円形	皿形	162	140	32	中期中葉		土偶3
SP48	Z-33G	楕円形	皿形	140	98	20	五ヶ領台期		
SP49	B-38G	円形	U字形	46	44	44	-		
SP50	B-38G	円形	U字形	92	84	39	中期中葉	SP49・SP53に切られる	
SP51	B-38G	不明	逆台形	141	(55)	74	中期中葉		
SP52	B-38G	円形?	逆台形	65	(27)	13	-		
SP53	B-38G	不明	U字形	(31)	37	39	-		
SP54	欠番	-	-	-	-	-	-		
SP55	欠番	-	-	-	-	-	-		
SP56	A-35G	不整円形	逆台形	131	(68)	28	中期後半		
SP57	B-37G	楕円形?	逆台形	123	(79)	14	五ヶ領台期		
SP58	B-37G	円形	U字形	41	40	36	中期中葉		
SP59	A-35G	楕円形	フラスコ形	92	74	100	五ヶ領台期		深鉢上半と大礫
SP60	A-35G	楕円形	逆台形	114	98	70	五ヶ領台期		大形土器片と大礫
SP61	A-35G	円形	U字形	67	58	53	-		
SP62	B-39G	撹乱	-	-	-	-	-		
SP63	B-36G	楕円形	U字形	66	(25)	46	五ヶ領台期	SB20と重複	
SP64	A-35G	円形	U字形	84	69	78	五ヶ領台期	SP67・SP70を切る	
SP65	A-35G	不整円形	U字形	140	135	78	-		
SP66	A-35G	円形	U字形	21	19	32	-		
SP67	A-35G	楕円形	U字形	44	(21)	38	-		
SP68	A-34G	楕円形	U字形	37	30	17	-		
SP69	B-36G	楕円形	逆台形	(63)	(36)	24	五ヶ領台期	SB20に切られる	
SP70	A-35G	楕円形	?	(25)	35	33	中期中葉	SP64に切られる	
SP71	A-36G	円形	?	40	(35)	28	中期中葉		
SP72	B-1G	円形	フラスコ形	72	67	77	五ヶ領台期	旧称SB7ピット2	
SP73	C-2G	円形	フラスコ形	101	97	127	五ヶ領台期	旧称SB7ピット1	



第26図　ＳＰ59・ＳＰ60住居跡・ＳＰ20土坑



第27図　ＳＰ59・ＳＰ60・ＳＰ60・ＳＰ63土坑出土土器
（ＳＰ59：1、ＳＰ60：2・4～5、ＳＰ63：3、ＳＰ40：9、ＳＰ20：8）



第28図　その他出土土器

3．その他の土器（第28図）

1～9は縄文帯の上下に三角印刻文の交互刺突を施したものを特徴とする。色調は内外表面が淡黄色で、内部が黒色であり、白色の粗砂粒を多く含み、他の土器と比べ異質である。SB14・SB18・SB20などを中心に広範囲から出土したが、これらは同一個体と考えられる。薄手ではあるが、かなり大型の土器であると推測される。類例をもとめると、「北裏CI式2・3類」とされるものに当たり（増子1981）、中期初頭に属すると考えられる。10は縄文施文の上に連続の爪形文が付けられ、淡黄色を呈す。12・13は灰白色を呈し、12は波状口縁に連続爪形文が付けられる。13は2条の連続爪形文の下にはアナダラ属の貝殻腹縁による連続刺突が施されている。ともに北白川下層式。11は口唇部と細粘土紐上に刺突されている。14は粘土紐を貼付しその内外面に縄文、口唇には細かな連続刺突、外面の縄文の下には連続爪形文を施す。灰色。大歳山式（畿内）。15は波状口縁で波頂部に刺突をもち、粘土紐が口唇や外面に貼付され、内外面に縄文が施される。16は細粘土紐が貼付され、内面にも縄文が施文される。色調は表面が淡黄色で、内部が黒色を呈し、白色の粗砂粒を含む。

増子康真　1981「第3章東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の初段階（本文編）』

4．土偶

出土総点数は、16点であり、図示したものは15点である。第29図1はカッパ型土偶の頭部である。2は大型土偶の肩部と考えられるが全体像は明らかでない。3は頭部を差し込むための深さ10mmのほぞ穴があり、下側の割れ口では左右の腕を1本の粘土塊でつくったことが観察できる。4も頭部を差し込むための深さ19mmのほぞ穴が認められる。下側の割れ口は研磨され、平らになっている。10（図版6）は、もも下半から足先までの大型土偶の足の一部である。ひざ頭、すね、くるぶし、6本の沈線で7本とも数えられる足指など細部まで表現されている。誇張されたひざ頭の上には、接合していたものが剥がれた痕跡があり、腕などがここに接して

いたと考えられる。地域も時期もかけ離れているが、東北地方の後晩期に見られる屈折像土偶にみられるような蹲踞の姿勢をしていた可能性がある。中部・関東地域の中期の類例を求めれば、長野県岡谷市の広畑遺跡・花上寺遺跡出土の座像型がより大型化し、一体化していたももやすねなどが別々に造形されたものかと推定される。あくまでの試算ではあるが、すねの長さから土偶の身長をを概算すると、約28cmもの大きさとなる。また出土状態も注目される。土坑（ＳＰ42）の覆土中層中に横向きで出土し（図版４）、しかも同一層位からは赤色顔料が少量塊状で出土している。何か特別な意図が感じられる。

５．土製品

第29図９は大半が剥落しているがソーメン状に粘土細紐の貼付けられている。割れ口側で厚みを減じ、かつ反っていることから土偶の一部とは考えにくい。用途性格不明。17（図版６）は孔を眼とし、沈線文と三角印刻文によって獣の顔を表出している。裏側の縁は一部を除いて剥がれた痕跡があり、土器などに付いていたものと考えられる。中期初頭と考えられ、この時期で動物を表現した類例を求めれば真脇遺跡の「鳥形土器」などが挙げられよう。
18・20は小型有孔鍔付土器であり、内外面ともによく研磨され赤彩されている。

土製円盤は第30図に示した13点の他に、文様のあるもの９点、無文のもの19点があり、都合41点が出土している。

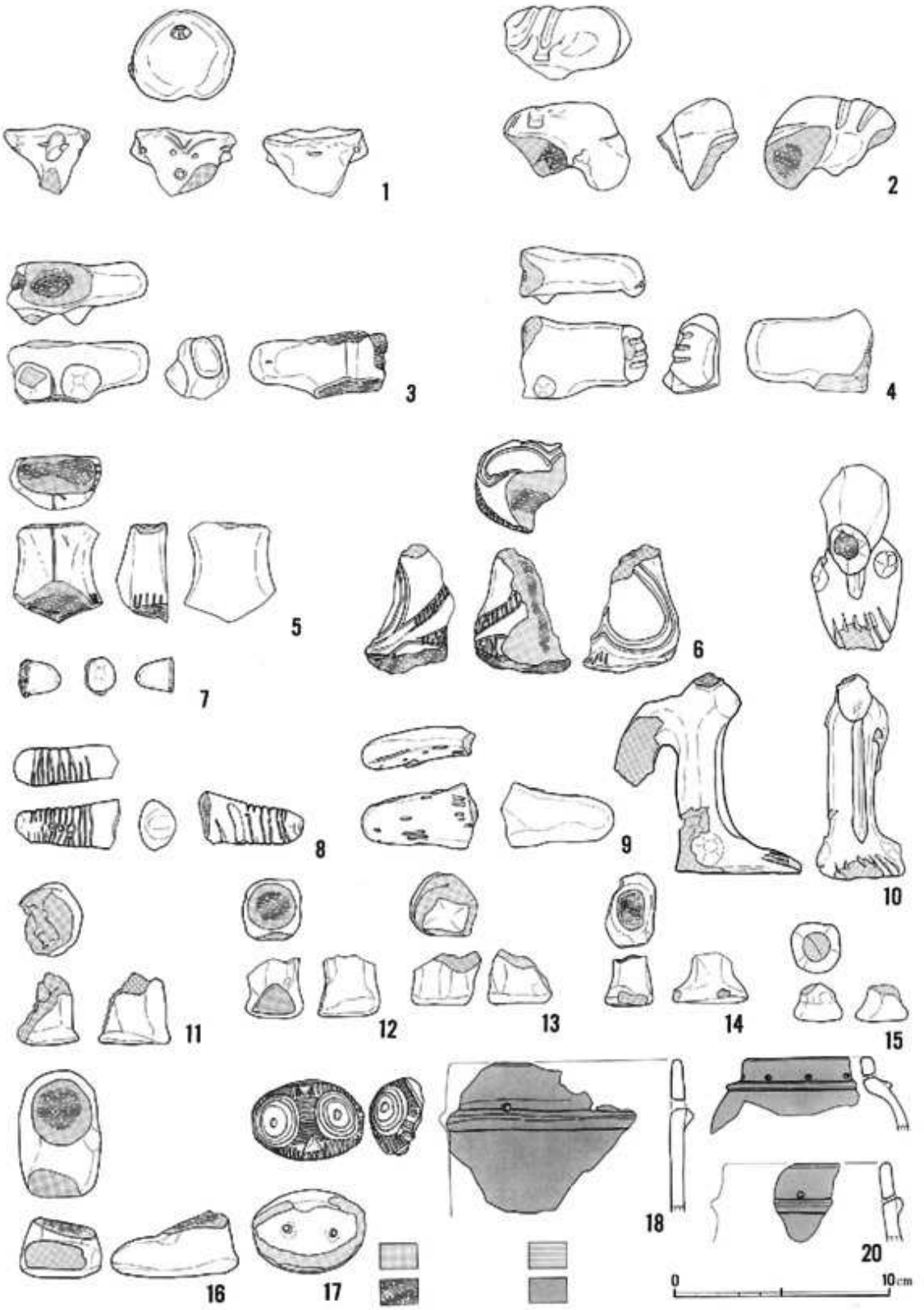
土製玦状耳飾は、第31図に示した３点の破片が出土している。精選された粘土が用いられ、よく研磨され、赤彩されている。

第2表　土偶一覧

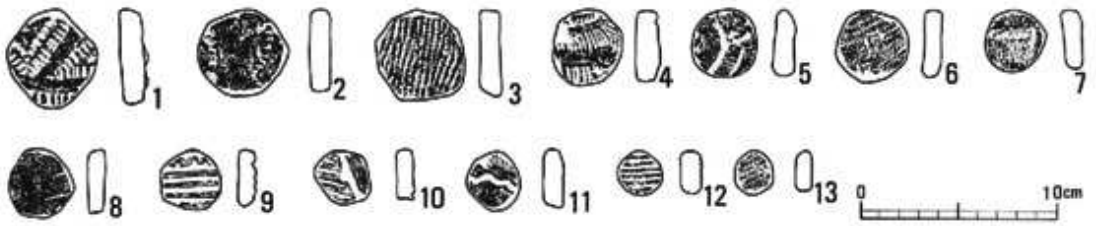
番号	種類	出土位置	部位	色調	焼成	製作1	幅cm	高さcm	厚さcm	時期
1	土偶	119号周溝墓	頭	にぶい黄	良		4.9	3.3	4.2	五領ヶ台
2	土偶	SB15	肩	にぶい黄	良	分割塊	5.2	4.2	3.4	藤内~井戸尻期
3	土偶	SP47	胴~左手	黄灰	良	分割塊、頸部を受けるほぞ穴	6.5	2.9	3	中期中葉？
4	土偶	SB16 P39	胴~右手	褐	良	分割塊、頭部、頸部を受けるほぞ穴	5.9	3.8	2.7	中期中葉
5	土偶	SB-5	胴	暗灰黄	良	分割塊	2.4	4.7	4.2	中期中葉
6	土偶	遺構外	胴	にぶい黄	良	分割塊	4.5	6.1	4.3	曽利期古
7	土偶	遺構外	手	褐	良		1.9	1.8	1.7	中期
8	土偶	SB06	右手	黒褐	良	分割塊	4.9	2.4	1.2	曽利期
10	土偶	SP42	足	褐	不良		4.1	9.6	8.6？	井戸尻期
11	土偶	SB10	足	褐	良		2.9	3.3	3.5	中期
12	土偶	遺構外	足	橙	良	分割塊	2.7	2.8	3	中期
13	土偶	遺構外	足	にぶい黄	良	中空	3.3	2.5	3	中期
14	土偶	SB10	足	にぶい黄	良	分割塊	2.2	2.4	3.5	中期
15	土偶	遺構外	足	にぶい黄	良		2.3	1.3	2.4	中期
16	土偶	SP13 P1	足	にぶい黄	良	分割塊	3.7	2.8	6	中期

第3表　土製品

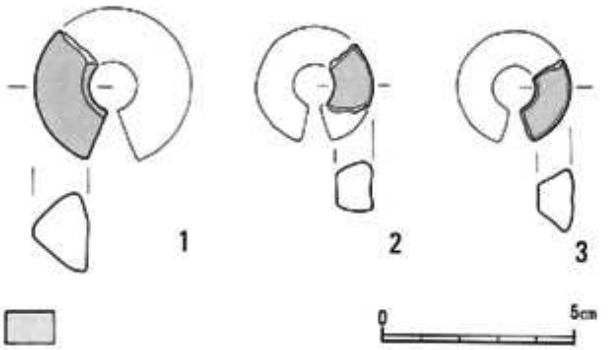
図	番号	種類	出土位置	色調	彩色	焼成	幅	直径	高さ	厚さmm	重量g	時期	備考
29	9	土製品	SB13	黄褐	/	不良	5.2	/	2.1	18	/	前期末	
29	17	獣面把手		にぶい黄	/	良	/	/			/	中期初頭	
29	18	小型有孔鍔付土器	119号周溝墓	にぶい黄橙	赤彩	良	/	11	7.1	5	/	中期	直径は口縁部
29	20	小型有孔鍔付土器	遺構外	暗褐	赤彩	良	/	7	2.7	4	/	前期末~中期初頭	同一個体
29	19	小型有孔鍔付土器	SB11 P181	にぶい黄橙	赤彩	良	/	6	3.4	5	/	前期末~中期初頭	同一個体
31	1	玦状耳飾	SB07	にぶい黄	赤彩	良	/	4	/	21	/	中期初頭	
31	2	玦状耳飾	SB18	にぶい黄	赤彩	良	/	3	/	17	/	中期初頭	
31	3	玦状耳飾	SB04	にぶい黄	赤彩	良	/	3	/	16	/	中期初頭	
30	1	土製円盤	119号周溝墓	暗褐	/	良	/	4.9	/	12	32.2	中期中葉	全周擦り
30	2	土製円盤	SP34 P2	にぶい黄橙	/	良	/	4.3	/	10	26.1	中期中葉	全周擦り
30	3	土製円盤	SB15	にぶい黄橙	/	良	/	4.7	/	11	29.0	中期	一部擦り
30	4	土製円盤	遺構外	褐灰	/	良	/	3.7	/	12	20.7	中期中葉	全周擦り
30	5	土製円盤	遺構外	にぶい黄橙	/	良	/	3.5	/	12	15.3	中期中葉	全周擦り
30	6	土製円盤	SB05 P19	暗褐	/	良	/	3.5	/	9	14.6	中期初頭	全周擦り
30	7	土製円盤	SB05	にぶい黄橙	/	良	/	3.1	/	12	8.4	中期中葉	全周擦り
30	8	土製円盤	SB11	にぶい黄橙	/	良	/	3.4	/	8	12.4	中期中葉	打ち欠き
30	9	土製円盤	SP48 P1	褐灰	/	良	/	2.9	/	9	9.6	中期初頭	一部擦り
30	10	土製円盤	遺構外	黒	/	良	/	3.0	/	9	7.9	中期初頭	一部擦り
30	11	土製円盤	遺構外	暗褐	/	良	/	3.0	/	10	9.9	中期中葉	一部擦り
30	12	土製円盤	119号周溝墓	暗褐	/	良	/	2.2	/	10	7	中期初頭	全周擦り
30	13	土製円盤	SB-20	褐灰	/	良	/	2.2	/	9	4.6	中期	全周擦り



第29図　土偶・土製品



第30図　土製円盤



第31図　土製玦状耳飾

6．石器

出土した石器の総数を出土遺構ごとに集計し、その結果を第4表石器組成に示した。破片点数であり個体数との誤差はあろうが、約5割が打製石斧、約3割が磨石・凹石・石皿、約1割が石鏃である。打製石斧にて食料を得て、磨石・凹石・石皿などで加工・調理する生活が推定される。また石鏃は、本来集落外にて消耗する性格の道具であり、当時の集落内での保有数の比率はさらに高いものと推定される。

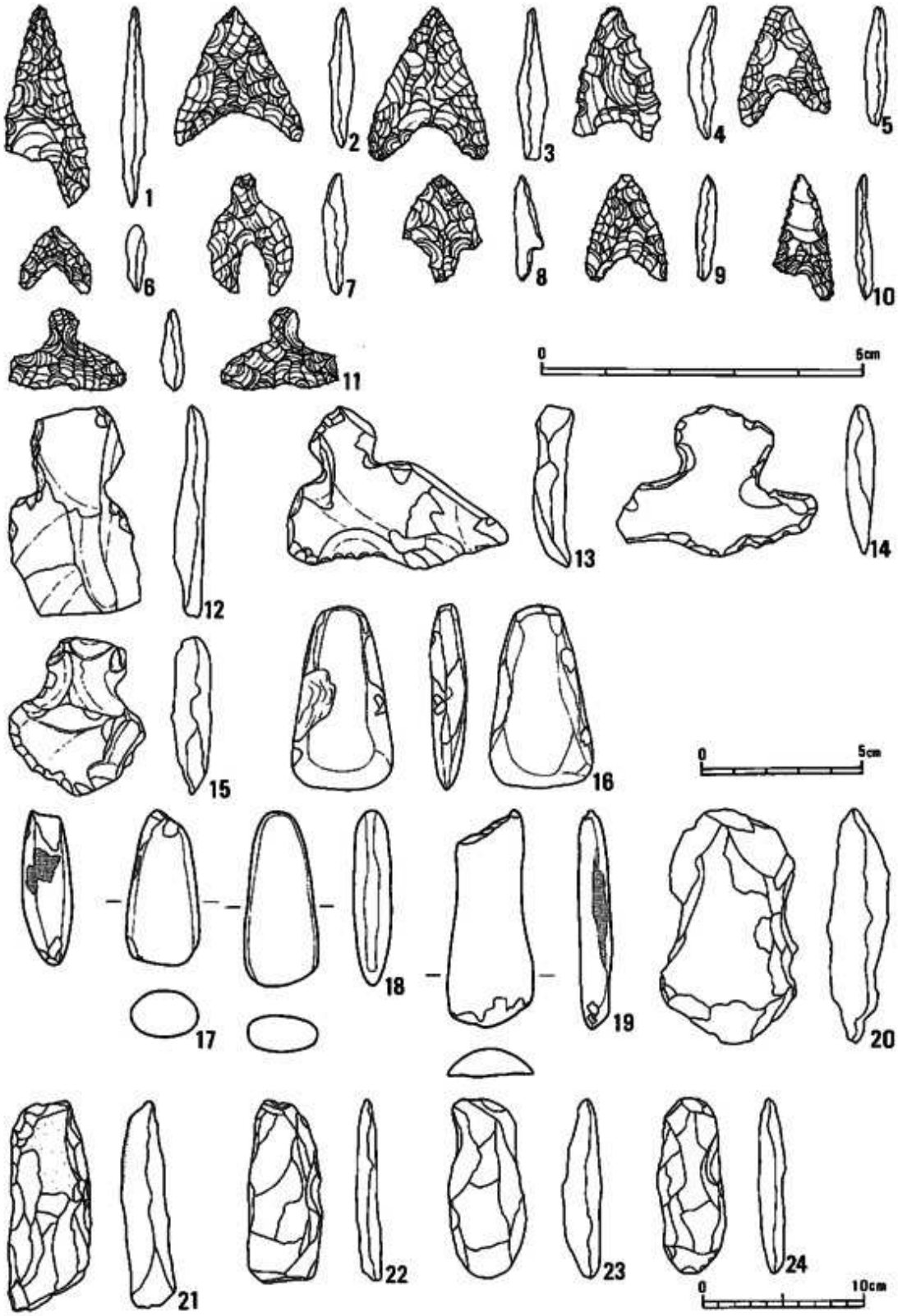
典型的なものあるいは特殊ものと判断したものを第32～35図、図版6に示した。実用性を離れた特殊なものの割合が高いことが注目される。具体的には、「の」字状垂飾や類例がほとんど不明な三脚垂飾・ハマグリ形垂飾であり、これらは五領ヶ台期に属すると考えられる。また中期中葉に属すると思われるが、線刻のある石皿や軽石製の用途不明の石製品も存在する。上の平遺跡が拠点的な集落であることをうかがわせる。

扁平面ありとしたものは、第34図1～3などでスクリーントーンで表現したような扁平な使用痕をもつものである。

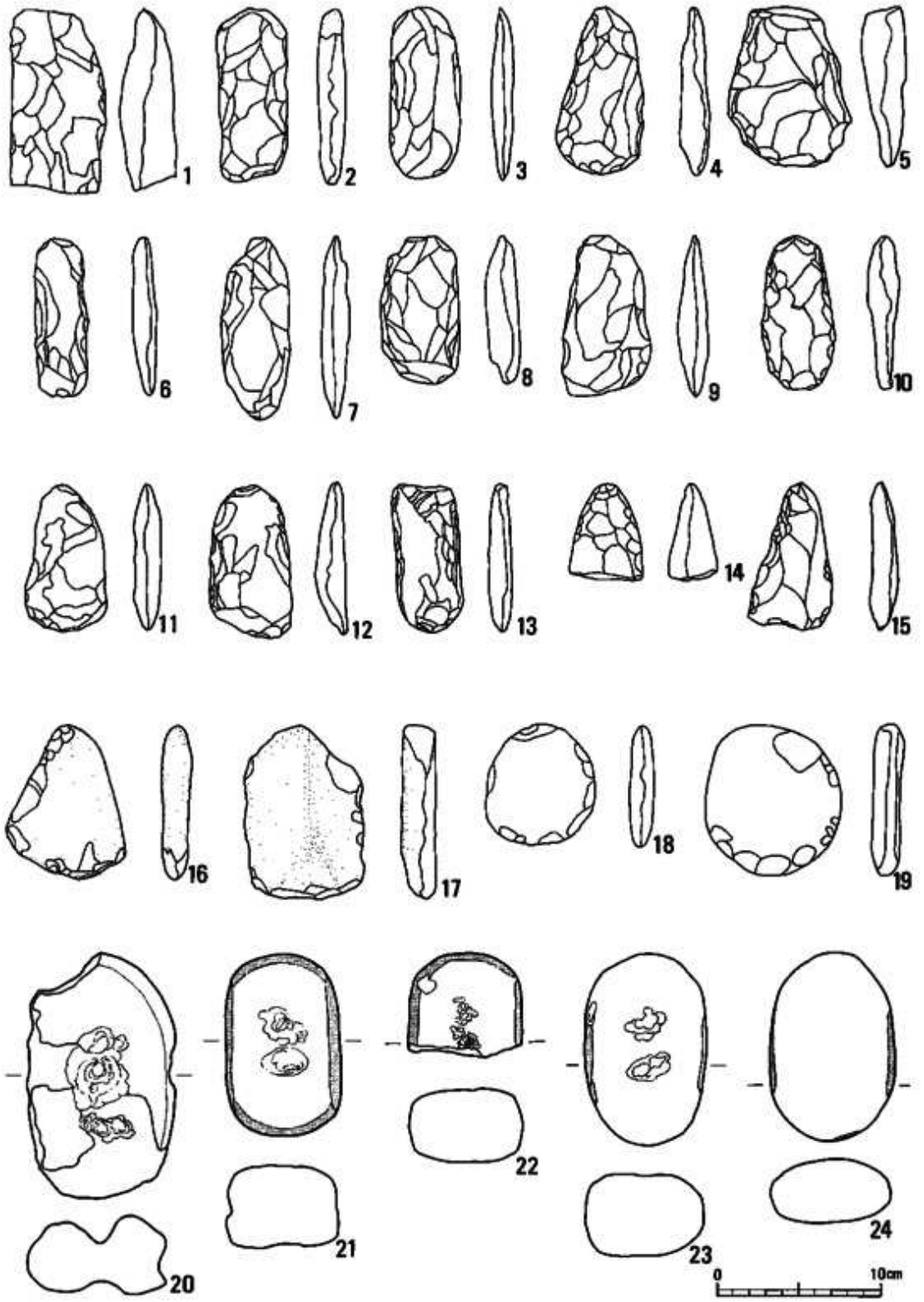
遺構名	石鏃	石匙	石錐	磨製石斧	打製石斧	磨石	磨石（扁平面有り）	石皿	凹石	蜂巣石	不明打製	石棒類	小型叩石	小型磨製石斧	垂飾	小計
SB01	4			1	5	1	1									12
SB02	1				6	1			2							10
SB03				1	2	1	6		1						1	12
SB04	9		1	2	25	3	2	2	1			1	1			47
SB05	2			1	10	1	1	1	2	1						19
SB06	1				3	1	1				1					7
SB07	5			1	16	5	6	2	8		2					45
SB08					2		3									5
SB09					1		2									3
SB10	3					2										5
SB11	7	1	1		10	2	3		2			1			1	28
SB12・13	1				9		1	1	3			1				16
SB14	1				11	1	3	1	2	1		1				21
SB15	5			1	11	3	1	2	1							24
SB16	2				2	1			1							6
SB18					3	2	5	2	3		1					16
SB19				1	1											2
SB20					3	1	1									5
SP01	1															1
SP17					1		1									2
SP19									1							1
SP20					1		1		2							4
SP21					4											4
SP25					1											1
SP31					1											1
SP33					6	1										7
SP34					1				1					1		3
SP35					1											1
SP45					1											1
SP56	1				2											3
SP58															1	1
SP59	1															1
SP60					1	1		1	3						1	7
SP62									1							1
SP65	1				1											2
遺構外	26	3	1	11	150	25	48	1	33	1						300
種別点数	71	4	3	19	291	52	86	13	67	3	4	4	1	1	4	624

第5表　石器一覧

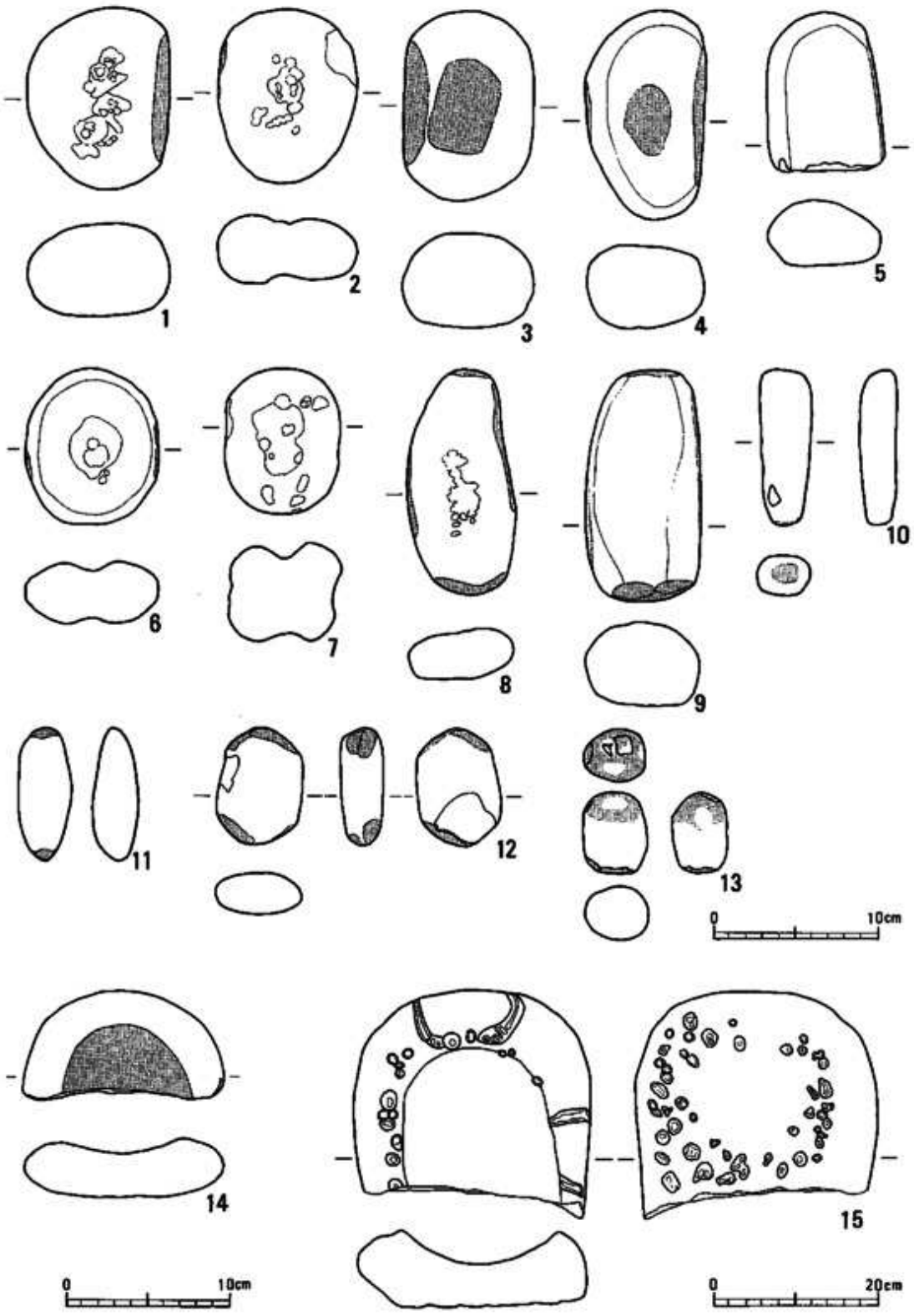
図	番号	種類	重量g	長さcm	幅cm	厚さcm	出土場所	石材	備考
32	1	石鏃	0.88	3.15	1.30	0.38	SB15	黒曜石	
32	2	石鏃	0.91	2.10	1.99	0.36	SB04	黒曜石	
32	3	石鏃	1.19	2.44	1.83	0.43	SB11	黒曜石	
32	4	石鏃	0.79	2.11	1.28	0.38	SB10	黒曜石	
32	5	石鏃	0.61	1.78	1.40	0.32	SB10	黒曜石	
32	6	石鏃	0.2	1.02	1.11	0.29	遺構外	黒曜石	
32	7	石鏃	0.56	1.93	1.32	0.36	SB12・13	黒曜石	
32	8	石鏃	0.48	1.63	1.19	0.33	SB15	黒曜石	
32	9	石鏃	0.45	1.70	1.25	0.31	遺構外	黒曜石	
32	10	石鏃	0.3	2.05	0.96	0.23	SB04	黒曜石	
32	11	ミニチュア石匙	0.46	1.25	1.83	0.33	遺構外	黒曜石	垂飾？
32	12	石匙	22.5	6.32	3.89	0.87	SB11	頁岩	
32	13	石匙	26.4	6.70	4.90	0.73	表土	粘板岩	
32	14	石匙	20.6	4.51	6.24	0.82	遺構外	粘板岩	
32	15	石匙	21.2	4.86	4.12	1.07	遺構外	メノウ	
32	16	小型磨製石斧	33.5	5.79	3.22	1.15	SP34	蛇紋岩類	刃部に使用痕顕著
32	17	磨製石斧	201	9.69	4.60	3.05	SB04	頁岩	
32	18	磨製石斧	219	10.84	4.71	2.39	遺構外	片麻岩	
32	19	磨製石斧	214	13.44	5.57	2.90	SB04	片麻岩	
32	20	打製石斧	449	14.64	8.40	3.60	遺構外	粘板岩	
32	21	打製石斧	248	12.77	5.11	2.75	SB18	粘板岩	
32	22	打製石斧	91	11.39	4.53	1.35	SB04	粘板岩ホルンフェルス	
32	23	打製石斧	154	11.22	4.88	2.46	SB15	粘板岩ホルンフェルス	
32	24	打製石斧	88	11.04	4.00	1.56	SB06 掘り方	粘板岩	
33	1	打製石斧	269	11.30	5.91	3.31	SB20	粘板岩	
33	2	打製石斧	119	10.73	4.41	1.73	SB15	粘板岩	
33	3	打製石斧	71.8	10.52	4.33	1.24	SB04	粘板岩ホルンフェルス	
33	4	打製石斧	111	10.35	5.33	1.80	SB02	粘板岩	
33	5	打製石斧	202	9.91	7.56	2.52	遺構外	頁岩ホルンフェルス	
33	6	打製石斧	60	9.69	3.29	1.33	SB01	粘板岩	
33	7	打製石斧	88	11.13	4.18	1.69	SB04	千枚岩ホルンフェルス	
33	8	打製石斧	126	9.16	4.98	1.90	SB01	粘板岩	
33	9	打製石斧	103	10.03	5.47	1.76	SB02	粘板岩	
33	10	打製石斧	85	9.48	4.45	1.95	SB15	粘板岩	
33	11	打製石斧	96	9.06	5.06	1.56	SB14	泥岩	
33	12	打製石斧	103	9.25	5.14	1.81	SB04	粘板岩	
33	13	打製石斧	72.6	9.02	4.04	1.31	SB18	粘板岩	
33	14	打製石斧	85	5.80	4.50	3.05	SB09	砂岩	
33	15	打製石斧	74.3	9.10	5.00	1.65	SB02	泥岩	
33	16	用途不明	159	9.46	7.43	1.90	SB07	砂岩	
33	17	用途不明	224	10.72	7.39	2.09	SB06	軽石	
33	18	用途不明	86	7.57	6.72	1.47	SB18	軽石	
33	19	用途不明	200	9.32	8.33	1.70	SB07	砂岩	
33	20	磨石	606	15.04	9.02	5.16	SB07	安山岩	
33	21	磨石	577	11.34	7.13	5.33	SB16	安山岩	
33	22	磨石	336	6.35	7.08	4.54	SB03	安山岩	
33	23	磨石	653	11.81	7.53	5.35	遺構外	安山岩	
33	24	磨石	548	11.43	7.66	4.22	SB15	安山岩	
34	1	磨石	695	11.17	8.76	5.80	遺構外	安山岩	
34	2	磨石	520	10.67	8.69	4.40	遺構外	安山岩	
34	3	磨石	806	11.58	8.14	5.97	遺構外	安山岩	
34	4	磨石	808	12.72	7.36	5.34	SB05	安山岩	
34	5	磨石	485	9.70	7.01	4.24	SP60	安山岩	
34	6	磨石	395	9.67	8.16	4.03	SB17	安山岩	
34	7	磨石	431	8.94	6.91	6.33	遺構外	安山岩	
34	8	磨石	438	13.85	6.64	3.28	SB14	安山岩	
34	9	磨石	836	14.18	7.06	5.36	SB07	安山岩	
34	10	磨石	119	9.52	3.20	2.32	遺構外	安山岩	
34	11	磨石	118	8.20	3.27	2.96	SB14	礫岩	
34	12	磨石	172	7.20	5.23	2.61	SB15	蛇紋岩	
34	13	石英製叩石	100	4.98	3.96	3.35	SB04	石英	上部に刻み
34	14	石皿	371	6.36	12.37	3.53	遺構外	安山岩	
34	15	石皿	8600	28.00	29.50	9.44	SB14	安山岩	線刻
35	1	石皿	2500	31.50	12.48	6.87	SB14	安山岩	
35	2	石皿	12000	24.20	29.50	13.67	SB07	安山岩	
35	3	石皿	7300	24.20	26.80	10.76	SB18	安山岩	
35	4	軽石	668	16.62	16.65	6.56	SB16	軽石	
35	5	石棒	8900	26.40	13.80	12.56	SB04	安山岩	
35	6	石棒	2900	33.00	12.88	3.86	SB11	安山岩	
35	7	石棒	3500	14.36	16.61	11.52	SB12・13	安山岩	
35	8	三脚垂飾	25.7	6.12	6.99	0.57	SB11	蛇紋岩	
35	9	垂飾	24.9	3.92	5.31	1.07	SB11	緑色凝灰岩	
35	10	の字状垂飾	1.89	3.18	2.20	0.20	SB16	蛇紋岩類	
35	11	垂飾	2.26	3.63	2.10	0.27	SB03	粘板岩	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
5cm
12
13
14
15
16
0
5cm
17
18
19
20
21
22
23
24
0
10cm

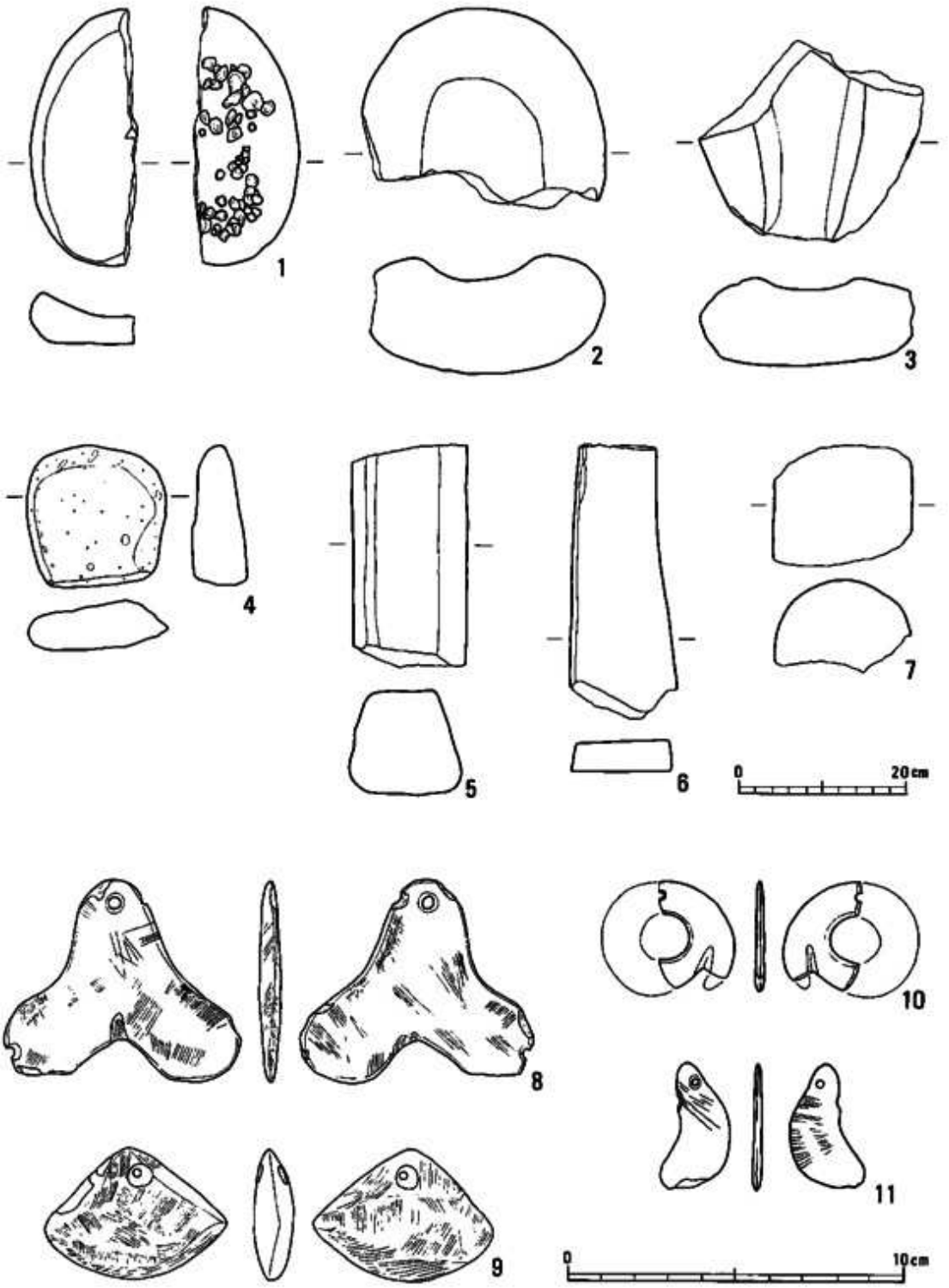
第32図　石器（1）



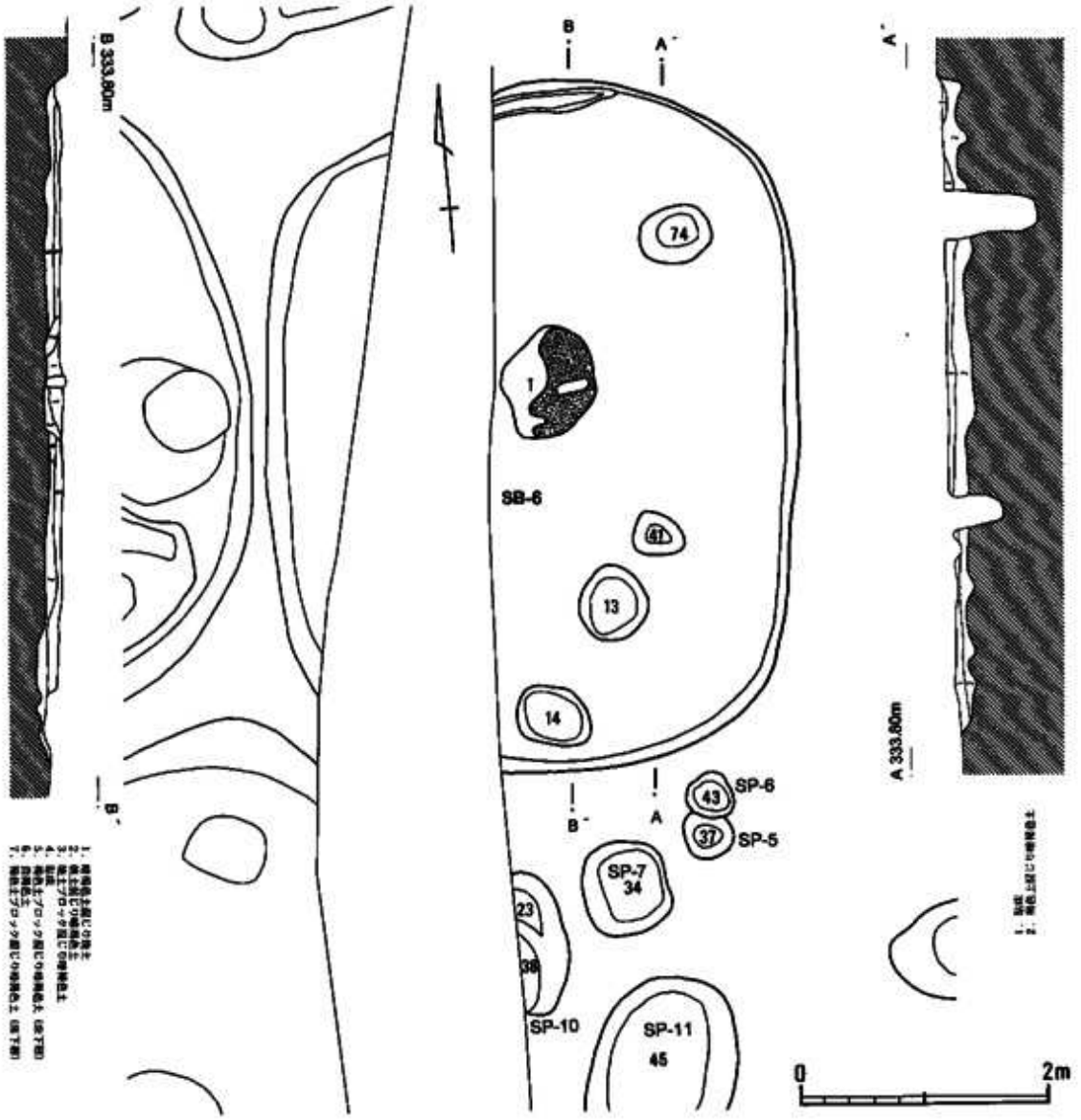
第33図　石器（2）



第34図　石器（3）

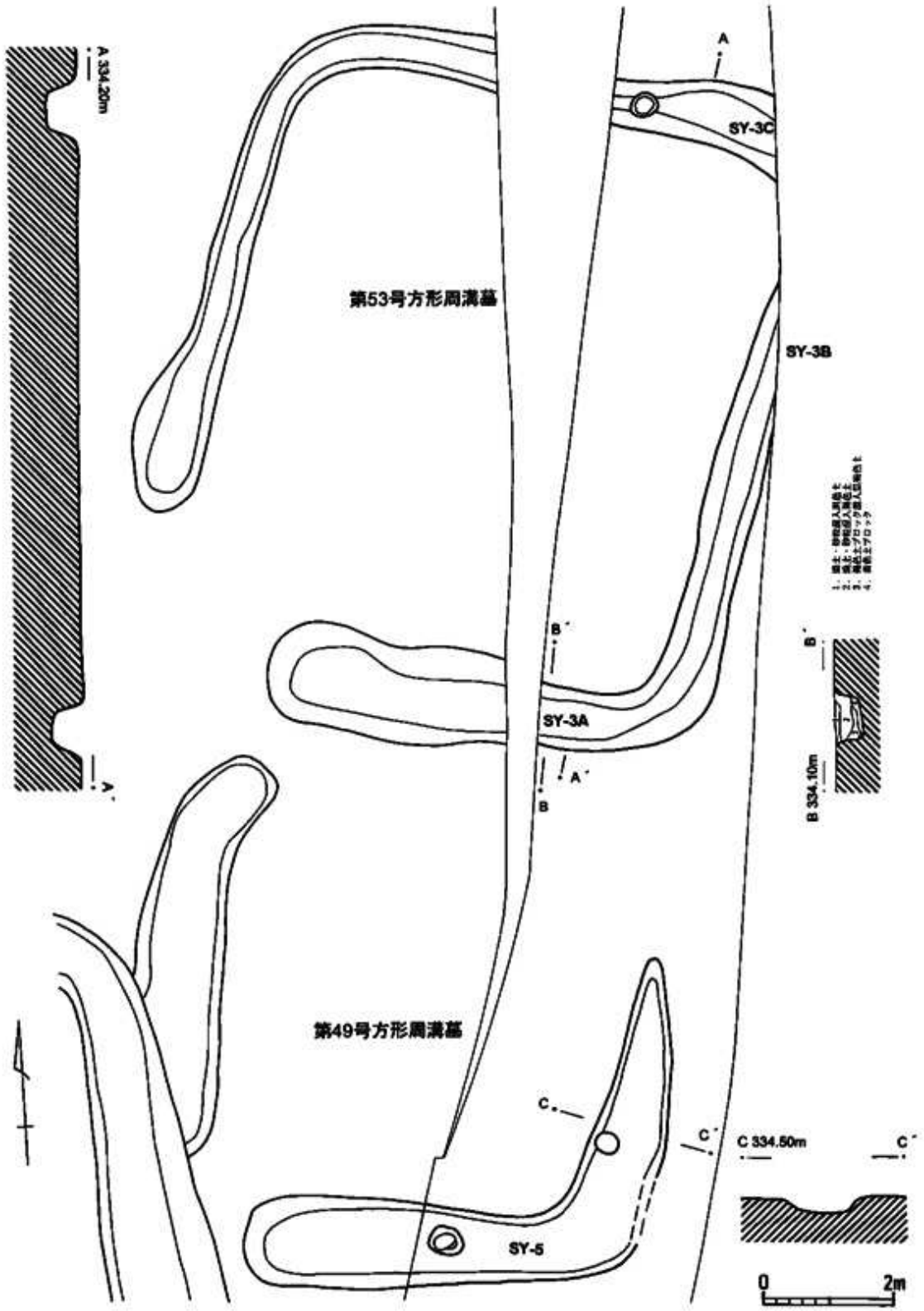


第35図　石器（4）

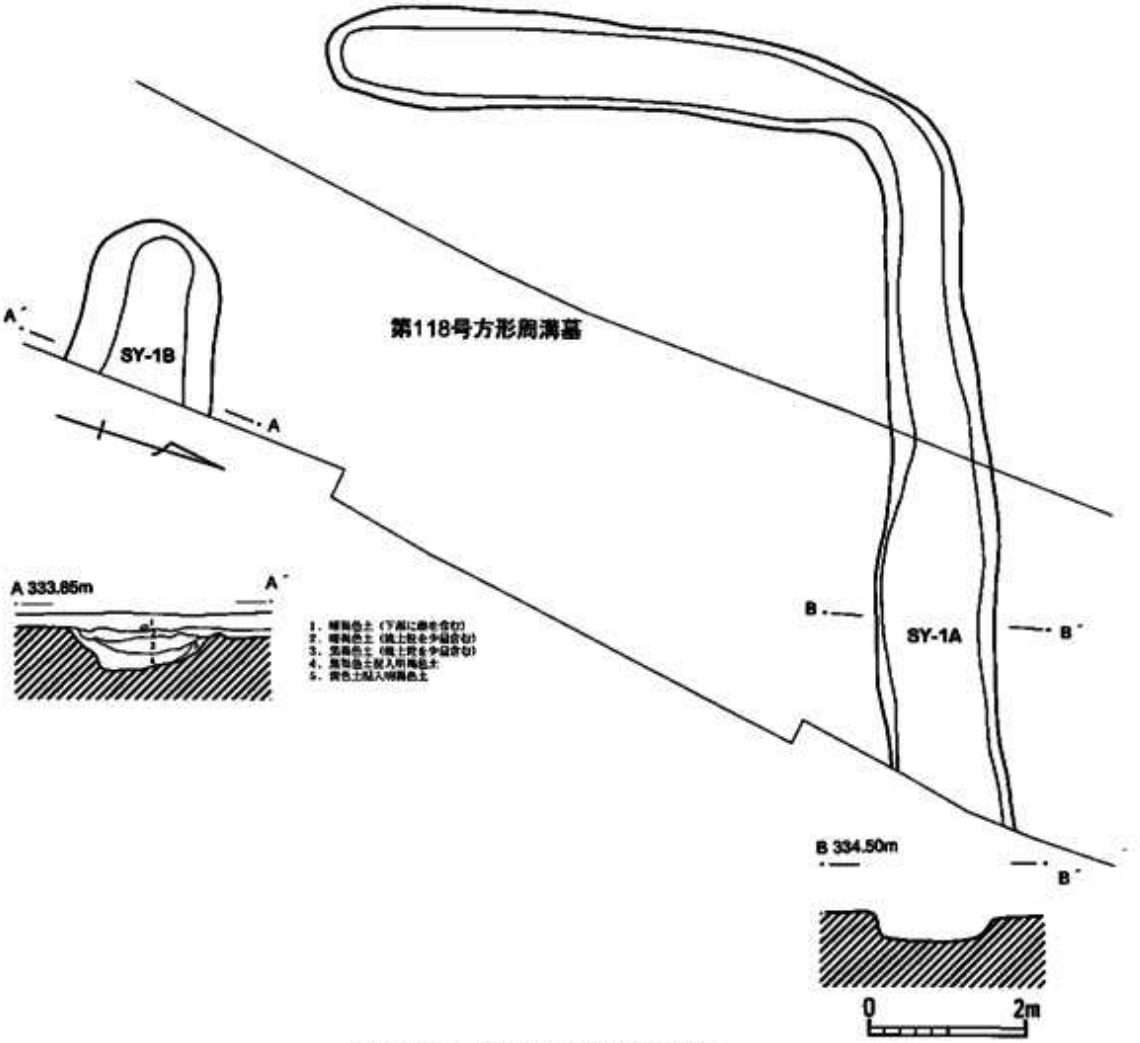


第36図　ＳＢ６住居跡

第37図　ＳＢ６住居跡出土土器



第38図　49号・53号方形周溝第墓



第39図　第118号方形周溝墓

1．住居跡

今回の第6次調査では住居跡を1軒を検出した。過去の調査を合わせて通算で、弥生時代の住居跡は計19軒である。

ＳＢ6住居跡（第36・37図、図版2）

位　　置　Ｃ－6Ｇ調査区の西限にあたる。第4次調査の28号住居址と同一遺構である。

形状・規模　小判形　長軸5.48ｍ、短軸4.29ｍ

床　・　壁　黒褐色土の貼床で非常に硬化していた。壁高23cm

　　炉　　枕石をもち、中央がやや窪む地床炉。規模は46cm×35cm、深さは床面より最大で14cm。

出土遺物　第37図1は棒状浮線文が貼付された口縁部片。2は外面にハケメがみられる。以上は弥生時代後期末に属する。3は無節の撚糸が施文され、胎土色調が淡黄色で赤彩の痕跡がみられる。時期不明。他には土偶の腕（第29図8）、縄文土器片が出土している。

2．方形周溝墓

今回の第6次調査では方形周溝墓を5基を検出し、略称ＳＹに加えて一辺ごとにＡ～Ｃの区別を付けて命名した。そして過去の調査成果と照合を行い、その中で4基は以前の調査にて確認された第49・53・118・119号方形周溝墓の一部であることが判明した。そして今回の新発見は残る1基であり、上の平遺跡の方形周溝墓の通算番号にて第125号方形周溝墓と命名した。つまり、上の平遺跡の方形周溝墓の総数は現在125基である。県内の多くの例と同様に、いずれも埋葬施設などの主体部は発見できなかった。

出土遺物は、縄文土器の破片が大部分であった。方形周溝墓に明確に伴うのは、第41図の片口のみである。

第49号方形周溝墓〔ＳＹ5〕（第38図　図版4）

位　　置　Ａ～Ｂ－40～1Ｇ　第53号方形周溝墓と隣接し、北辺溝を欠く。

形状・規模　北西・南西・北東の三つのコーナーにブリッジをもつ。東辺溝約5ｍ（現存）、西辺溝6.2ｍ、南辺溝6.1ｍ。溝の深さ20～31cm。

第53号方形周溝墓〔ＳＹ3〕（第38図　図版4）

位　　置　Ｚ・Ａ～Ｂ－38～39Ｇ　第49号方形周溝墓と隣接する。

形状・規模　南西コーナーにブリッジをもつ。東辺溝約10ｍ（推定）、西辺溝8.2ｍ、南辺溝6.9ｍ、北辺溝約9ｍ（推定）。溝の深さ23～47cm。

第118号方形周溝墓〔ＳＹ1Ａ・Ｂ〕（第39図）

位　　置　Ｂ～Ｃ－2～5Ｇ　第4次調査にて第118号方形周溝墓と報告されたもの。

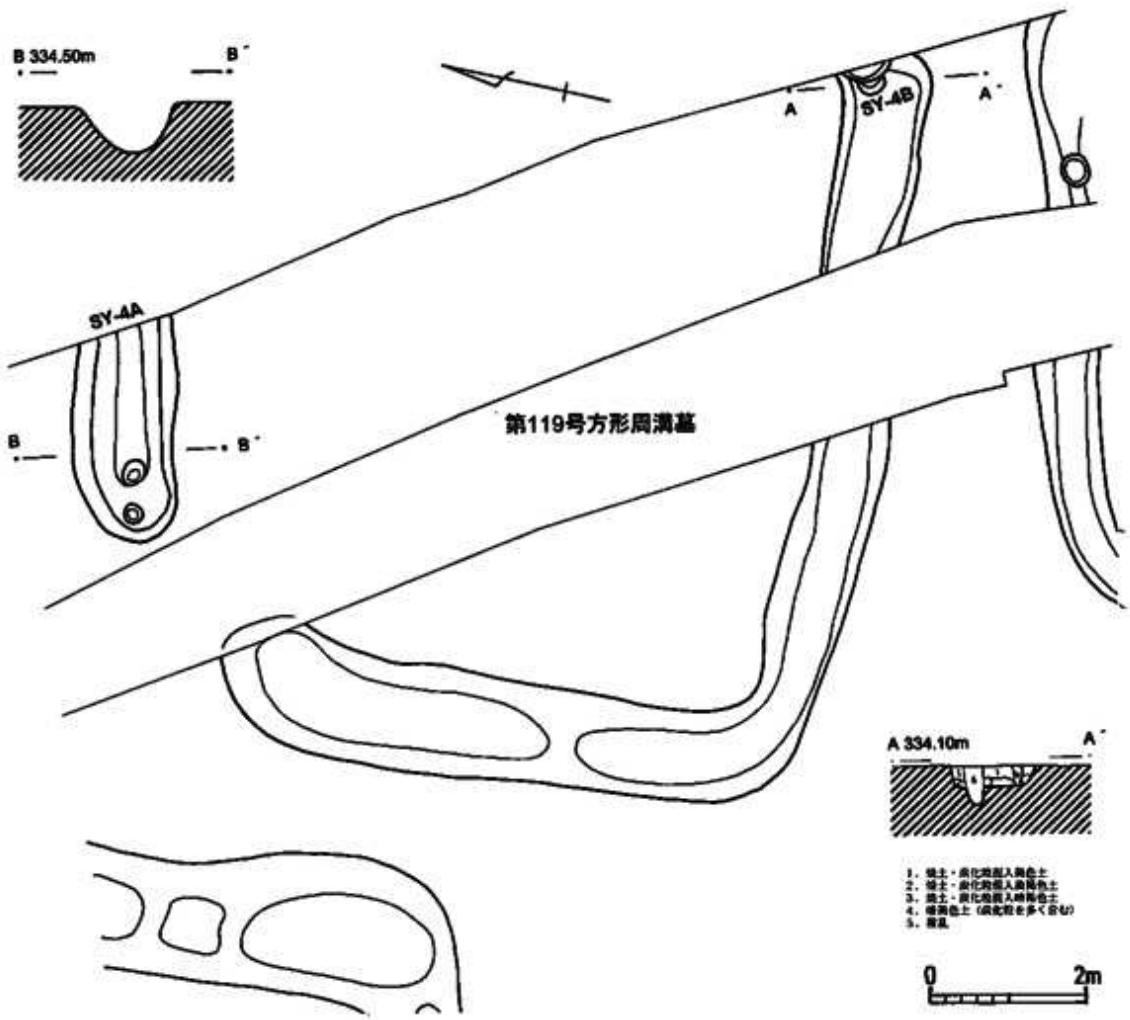
形状・規模　南西コーナーにブリッジをもつ。東辺溝不明、西辺溝7.2ｍ、南辺溝2.5ｍ（現存）、北辺溝8.0ｍ（現存）。溝の深さ100～30cm。溝の立ち上がりは内面が垂直に近く、外側がなだらかとなる。

第119号方形周溝墓〔ＳＹ4〕（第40図）

位　　置　Ｚ・Ａ～Ｂ－35～37Ｇ　第53号方形周溝墓と隣接する。

形状・規模　北西コーナーにブリッジをもつ。東辺溝7.5ｍ、西辺溝不明、南辺溝9.7ｍ、北辺溝2.9ｍ。溝の深さ27～59cm。

第125号方形周溝墓〔ＳＹ2〕（第41図　図版4・6）

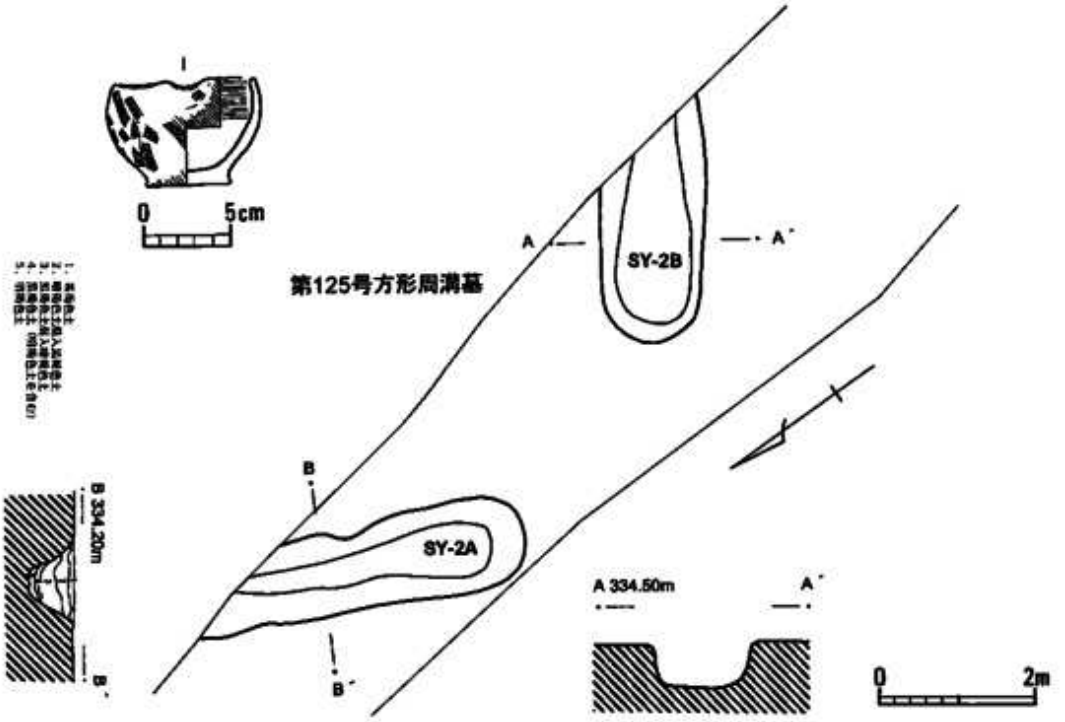


第40図　第119号方形周溝墓

位　　置　Z・A－32～33 G　この一基のみは過去の調査では確認されておらず、今回の調査にて第125号方形周溝墓と命名した。

形状・規模　南西コーナーにブリッジをもつ。西辺溝4.3 m（現存）、南辺溝3.1 m（現存）。溝の深さ76cm。

出土遺物　第41図の片口が1点出土している。口径が8.3cm、底径が4.7cm、高さ5.7cmである。底部付近に残っているような粗いハケにて全体を調整した後に、細かいハケで仕上げの調整がほどこされている。欠損部分のない完形品である。



第41図　第125号方形周溝墓

第５節　自然科学分析

１．上の平遺跡の赤色顔料

パレオ・ラボ

概　要

上の平遺跡では、縄文時代中期の土坑ＳＰ42内の土壌から明瞭な赤色を示す土壌が出土した。この試料は、褐色土壌に１cm程度の不定形で赤色部分が集積する状態である。ここでは、まずこの赤色の物質が顔料であるかどうか、また赤色顔料であればその主要な構成元素が何であるかを解明するため蛍光Ｘ線分析を行った。

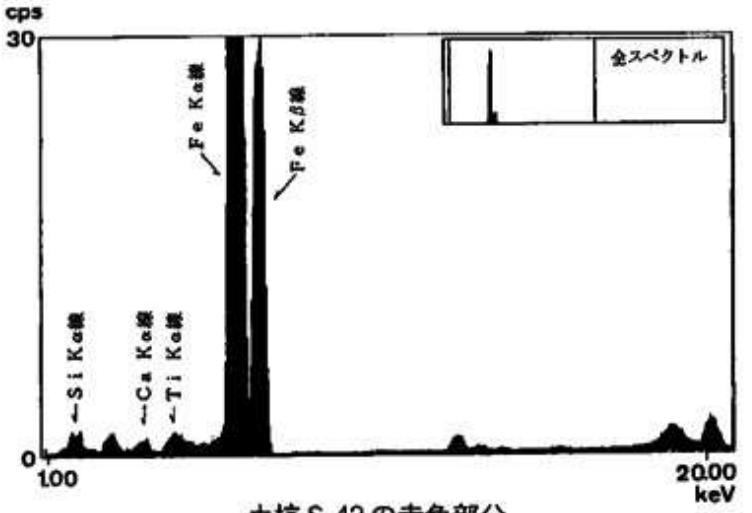
分析は、土壌試料の状態で極力平坦な部分を選んで非破壊で測定した。測定は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA-2001L：セイコー電子工業株製、Be薄型 - Ｘ管球(Rh)で特性Ｘ線を計測した。測定条件は、測定時間：500sec、照射径：10mm、電流10μＡ、電圧：50KVで、測定試料室を真空にして行った。

分析結果と若干の考察

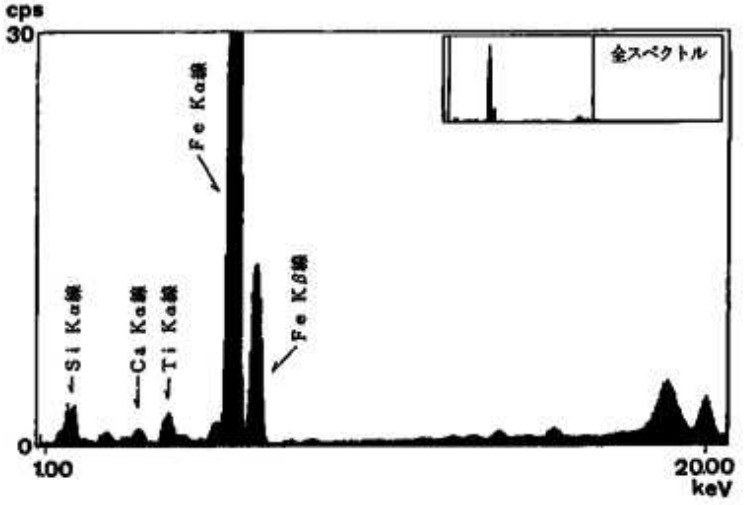
蛍光Ｘ線分析は、土坑ＳＰ42の試料の赤色部分と比較のため周辺の褐色土壌部分で行った。なお、褐色土壌もいくぶん赤みを帯びていることから、通常の土壌とは特性が異なるようである。ＳＰ42の試料の特性Ｘ線スペクトルを第42図に示す。その結果、いずれの試料からもケイ素（Ｓｉ）、カルシウム（Ｃａ）、チタン（Ｔｉ）、鉄（Ｆｅ）などが検出され、ルビジウム（Ｒｂ）やストロンチウム（Ｓｒ）も認められた。なお、水銀（Ｈｇ）は検出されていない。また、鉄とケイ素のＸ線強度比（ＦｅＫα／ＳｉＫα）は、赤色部分が115.9、周辺の土壌は30.7と赤色部分で鉄の成分がきわめて高いことを示す。したがって、赤色部分は鉄を主成分とする元素組成であると考えられる。なお、非破壊で定量分析を行ったところ、赤色部分の酸化第二鉄（Fe_2O_3）は76%程度含まれていたが、試料の状態が良くない（平滑さや平坦性がよくない）ことから誤差はきわめて高い値と考えられる。

一方、赤色部分の鉄の価数をフェロシアン化カリウムとフェリシアン化カリウムにより分析したところ３価の鉄（Fe^{3+}）を主体とすることを確認した。

赤色顔料としては、水銀朱（ＨｇＳ）、ベンガラ（Fe_2O_3）、鉛丹（Pb_3O_3）が知られている。また、土壌中では酸化した褐鉄鉱（リモナイト：$FeO \cdot OH \cdot nH_2O$）が赤色を示す。一方、最近、硫化水銀の辰砂に少量の赤鉄鉱（ヘマタイト：Fe_2O_3）であるベンガラを混じえた赤色顔料や赤鉄鉱に少量の水銀朱を含む赤色顔料が確認されている（小山・菊池1987）。しかし市毛（1984）は、天然の辰砂はベンガラを伴い、ベンガラはまた微量の水銀を伴うものであるとした。したがって、前述のベンガラに水銀を混じえたとする見解の妥当性については、精度の高い定量分析が必要であろう。いずれにしても、上の平遺跡の試料は蛍光Ｘ線分析から鉄を主体とした水銀を含まないことや３価の鉄からなることから、赤色部分はベンガラを主成分とする赤色顔料と考えられる。



土坑Ｓ42の赤色部分



土坑ＳＰ42の赤色部周辺の褐色土壌

第42図ＳＰ42土坑試料の蛍光Ｘ線スペクトル

引用文献

市毛　勲（1984）増補『朱の考古学』考古学選書12、雄山閣出版

小山陽蔵・菊池良栄（1987）「上尾鮫(1)遺跡の土坑土壌中の赤色顔料並びに無機燐酸と残存脂肪酸組成及び壺形土器と土器片の赤色彩色顔料の分析」青森県教育委員会『上尾鮫（1)遺跡Ｃ地区』、青森県埋蔵文化財調査報告書　第113集、p.267-279

2．上の平遺跡より出土した炭化種実類

吉川純子（パレオ・ラボ）

上の平遺跡より出土したＳＢ７およびＳＢ８の２試料について種実の同定を行ったので以下に報告する（図版７）。

試料はすべて炭化したもので、炭化材の小片とＳＢ７から出土したタデ属を除いては、種実の破片であった。図版７の写真１は選別前の試料の様子である。この中には、オニグルミの核、タデ属の果実、不明堅果の破片が含まれていた。不明堅果の種類の可能性としては、オニグルミの核の内側部分、シイ、カシ、クリ、ハシバミなどの果皮、トチノキの種皮などの可能性がある。通常は出土した炭化種実の個体数を数えるのだが、ここでは大きい種実とみられる種類がすべて破片で出土しているため、観察した破片総数を基数としておよその比率で示すことにする。

ＳＢ７では、オニグミ核25%、タデ属の完形果実13%、不明破片62%である。不明のうちオニグルミ核内側の可能性があるもの３%、ドングリ類の可能性があるもの３%、トチノキの可能性があるものが56%であった。

ＳＢ８では、オニグルミ核９%、不明破片91%である。不明のうちオニグルミ核内側の可能性があるものが５%、ドングリ類の可能性があるもの９%、トチノキの可能性があるもの77%であった。

以下に出土した炭化種実の形態などについて記載を行う。

オルグルミ（Juglans ailanthifolia Carr.)は、沢沿いに生育する落葉高木で、果実内の核の中の脂肪に富んだ仁を食用にすることで広く知られている。写真２・３は出土した核の破片で、写真４はやや拡大したものである。炭化材よりも緻密な構造で、表面にはやや細かい凹凸と、細かい溝が不規則に分布する。よく炭化されたものでは、割れ口に光沢がある。また、写真５オニグルミの硬い核の内側のやや軟らかい部分と思われるが、トチノキの種皮と見分けが非常つきにくい。

タデ属（Polygonum)は、３稜があり、1.9mm前後で、果皮は硬い。表面の網目模様は細かく、ヤナギタデに似るが、それよりもやや小さいため、タデ属にとどめた。

不明果皮は、写真７がドングリ類の可能性がある破片で、内側に規則的な縦方向の筋が入り、果皮の曲面が球面状に安定していて凹凸がない。しかし、外側はドングリ類に特徴的な縦の筋が確認されなかった。可能性としては、ハシバミ属、コナラ属、クリ属、シイノキ属などが考えられる。

写真８はトチノキ（Aesculus turbinata Blume）の種皮の可能性がある破片で、内側にも外側にも筋状の構造がなく、曲面は凹凸が激しく、破片は薄いが割れ口に光沢がある。しかし、これもトチノキの種子の表面に特徴的な模様は確認できなかった。

第３章　東山北遺跡発掘調査（第４次）

第１節　東山北遺跡の概要

本遺跡は東八代郡中道町下向山地内と同郡境川村間門にまたがる遺跡で、曽根丘陵の東山台地上、標高300ｍの平坦面に立地する。本遺跡の面積は約１万平方メートルであるが、更に、北側に一段下がったテラス（境川村地内）にも同時期の別遺跡が存在する。この遺跡の中道町地内は甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の建設事業が進行しており、歴史植物園の建設が進められいるが、事業地は既に第１～３次の調査がおこなわれ、弥生時代住居跡27軒、方形周溝墓２基、土坑、溝、土器焼成遺構などが発見されている。なお、これらの遺構がすべてでなく、保存のために未調査のまま埋設した遺構も存在する。

本年度の調査は、第３次調査（平成４年度）によって明らかになった２号方形周溝墓が、公園買収地区の境界まで広がっていたために、当初予定していた境界への道路建設ができなくなり、このため更に外側に道路幅を買収したことにともなって、調査を実施することになった。調査は平成５年４月19日から４月30日まで行い、179㎡を調査した。この結果、町村を境とするような、南北に走る大きな溝が検出された。

第２節　遺構・遺物

１．遺構（第43図、図版８）

遺構は溝のみで、町村境の線の下に位置している。溝は１条だけでなく、数回の掘り直しが行われたもので、溝の底や断面観察からも、そのことが確認される。溝の幅は、南端の標高が高い箇所では１ｍ、中央部で1.5ｍ、北端で４ｍである。溝の深さは南側で１ｍ、中央部で1.3ｍ、北端で65cmで、底面は平らであるが法面はＶ字形を呈す。セクションＡ断面及びＢ断面の土層２には拳大の礫層が詰まっているが、この中や下から古墳時代の馬具・刀・玉・金銅製品・須恵器などが出土している。古墳時代の遺物は南側に集中しているため、この近くに後期古墳が存在したことが想定できる。溝の中からは縄文時代の土器・石器、弥生時代の壺・甕などの土器破片、平安時代土師器（坏・甕）、近世陶器などが出土している。特に、近世陶磁器の出土が見られるため、この溝の年代を近世～近現代とすることができる。

２．遺物

土器（第44図、図版８）

縄文時代の遺物は土器・石器が出土しているが、土器は縄文前期から中期初頭の土器である。１は諸磯ｂ式の波状口縁部で、半截竹管による爪形連続文が４段に曲線を描き、それぞれの間は斜めにヘラ刺突文が施される。２は半截竹管の平行沈線によって縦横に器面を施文し、円形貼付文が施されたもので諸磯ｃ式に属する。３は半隆起半截竹管平行沈線を器面に充填させた前期終末から中期初頭の土器である。十三菩提式の中でも朝日下層系に属するものか、五領ヶ台式土器の沈線文系に属するかは、破片が小さくて決しがたい。４は頸部下に横方向の半截竹管が施文され、くびれ部には半截竹管浮線文が１条巡る五領ヶ台式土器である。５は口唇部に

刻みが付けられ、体部外面にヘラ刺突文が3条巡る。五領ヶ台式に属するものと思われるが、明らかではない。7は特殊な器形の土器と思われ、鍔状に張り出した部分であろう。上下の面に半円文が強く刻まれ、先端にはヘラで斜めの刻みが入る。中期初頭ではなかろうか。

弥生時代の遺物は土器のみで壺・甕などである。掲載した8～17のうち8～13は壺形土器であり、14・15は台付甕、16は甕形土器口縁部、17は器種不明である。17は口唇部に小孔が巡る可能性がある土器で、蓋あるいは壺口縁部かもしれない。

古墳時代前期の土器として、18は有段口縁壺の口縁部で、口唇及び口縁部に刻みが付けられる。19は北陸系甕形土器の口縁部であろう。21・22は須恵器甕口縁部であり、良質な焼成である。

22～24は平安時代の土師器で、22は坏、23は内黒坏で底部糸切り底、24は甕形土器口縁部である。いずれも10世紀中葉から後半に属するであろう。

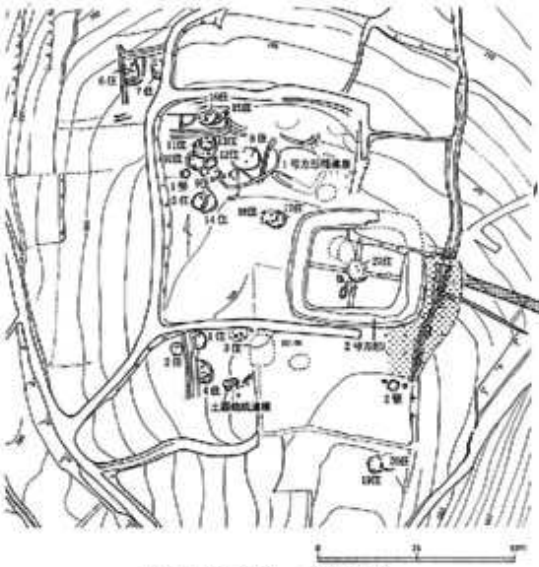
25は陶器である。内外面濃緑色の釉薬が掛けられる。体部中央の正面及び背面に直径1.8mmの円形貼り付け文が6個ある。年代は明らかではないが、近世の香炉ではなかろうか。

鉄製品・玉・石器（第45・46図）

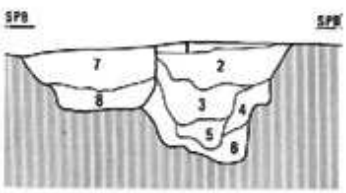
1・2は古墳時代の馬具で、1は素環鏡板付轡の一部であり、2は楕形素環鏡板付轡の一部である。3は直刀残欠。4は不明鉄器。5・6は銅地金貼製品である。おそらく刀装飾りの金具であろう。7は全長3.2cmの水晶製勾玉である。8は火打ち金であるが、紐を通すための穴は明らかではない。火打ち金は本遺跡2号方形周溝墓より1点出土しており、平安時代に属するものであろう。

9は凝灰質砂岩製の石器である。全体の形状は不明であり、断面は三角形で刃部は上片面が発達しているが、背面は僅かである。縄文時代前期～中期に属すると思われ、用途は特定されていない。この他、石鏃3点（第46図1～3、4は表採）のほか打製石斧や磨石などが出土している。

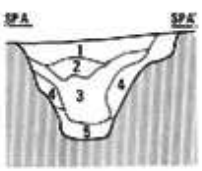
☆勾玉の実測は石神孝子（埋蔵文化財センター）、9の石器は宮里　学（埋蔵文化財センター）による。他は伊藤順子・末木　健による。



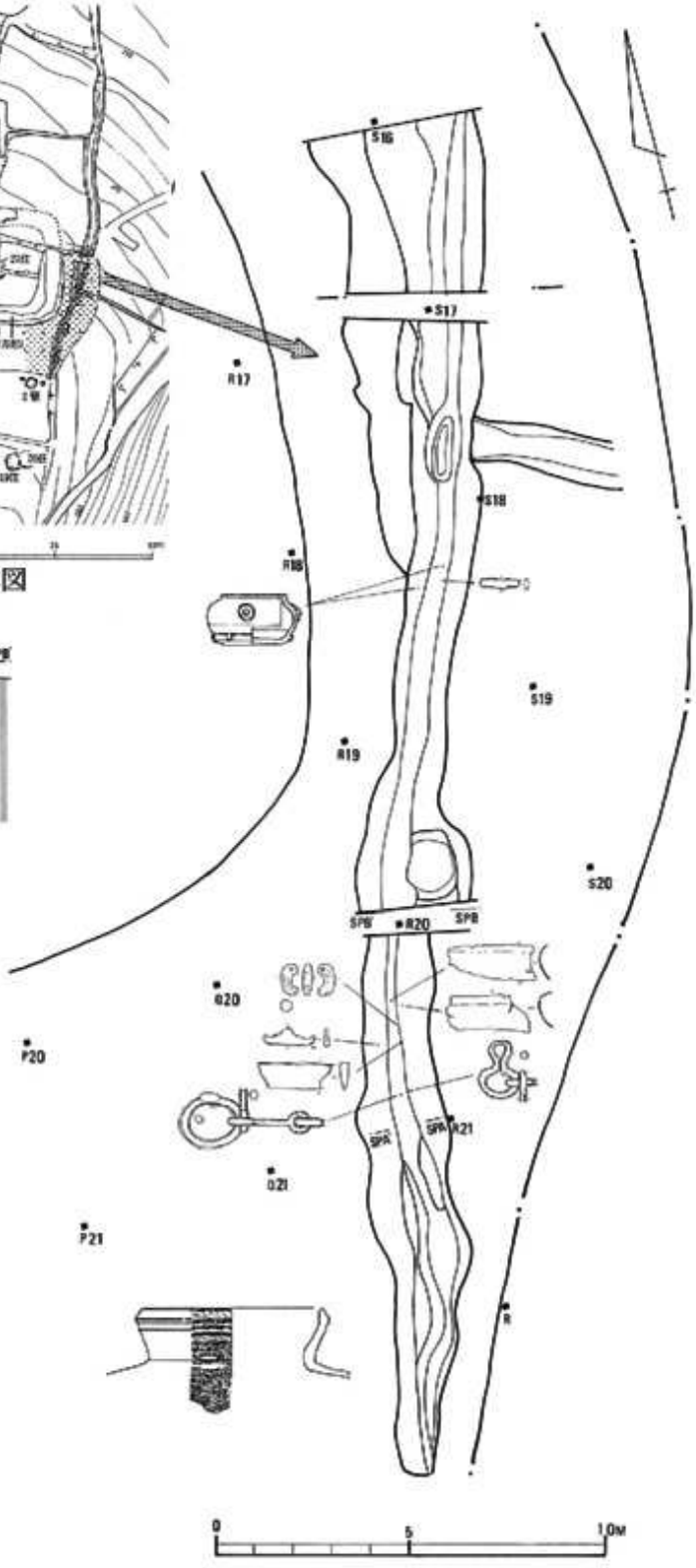
東山北遺跡　全体図



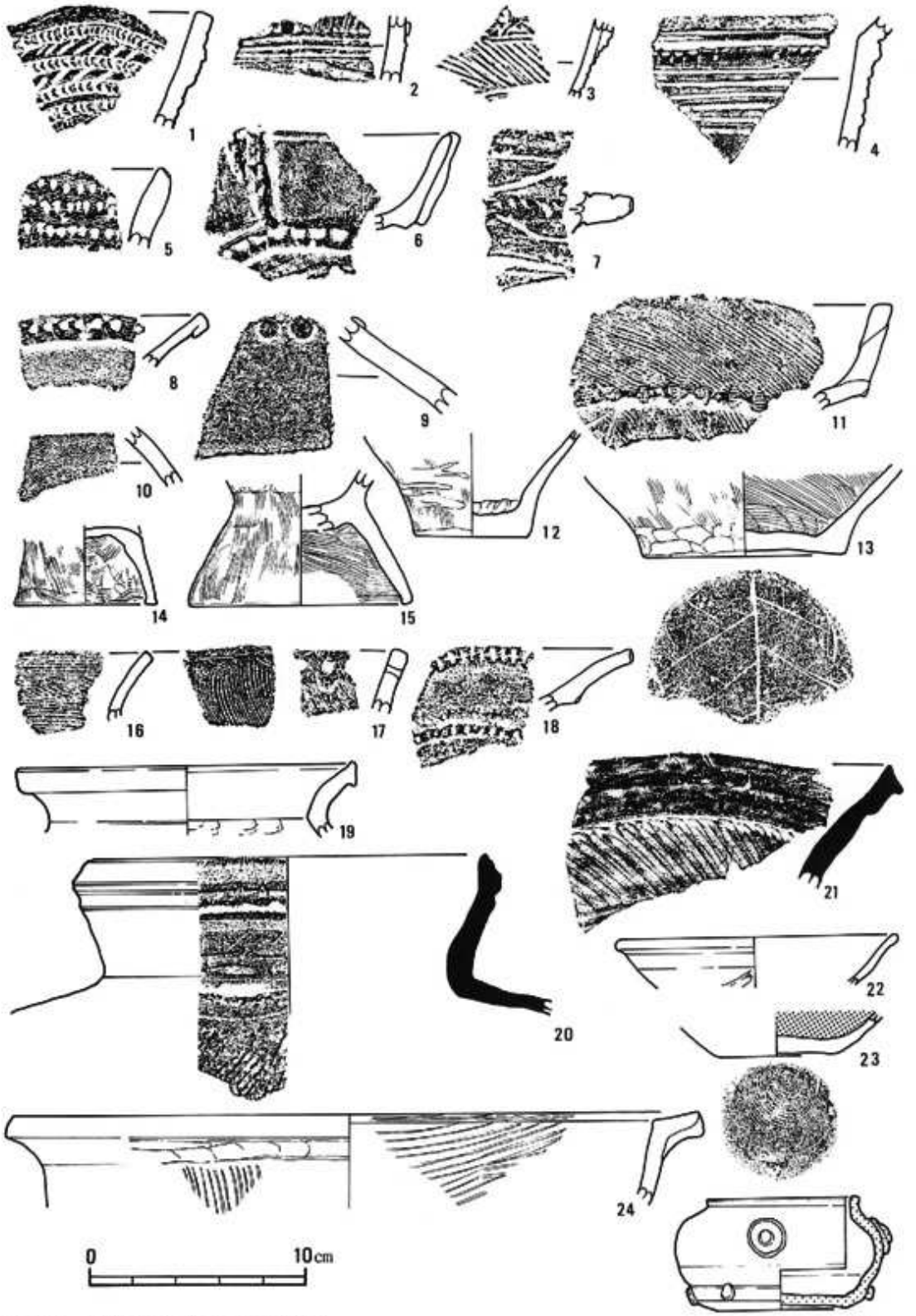
セクション（B－B'）土層説明
1．茶褐色土
2．火砕（孝大）層
3．暗褐色土（黄褐色土粒子多く軟弱）
4．茶褐色ブロック混入褐色土
5．茶褐色ブロック混入暗褐色土
6．褐色ブロック混入黄褐色土
7．黄色土ブロック混入褐色土
8．暗褐色土（柔らかい）



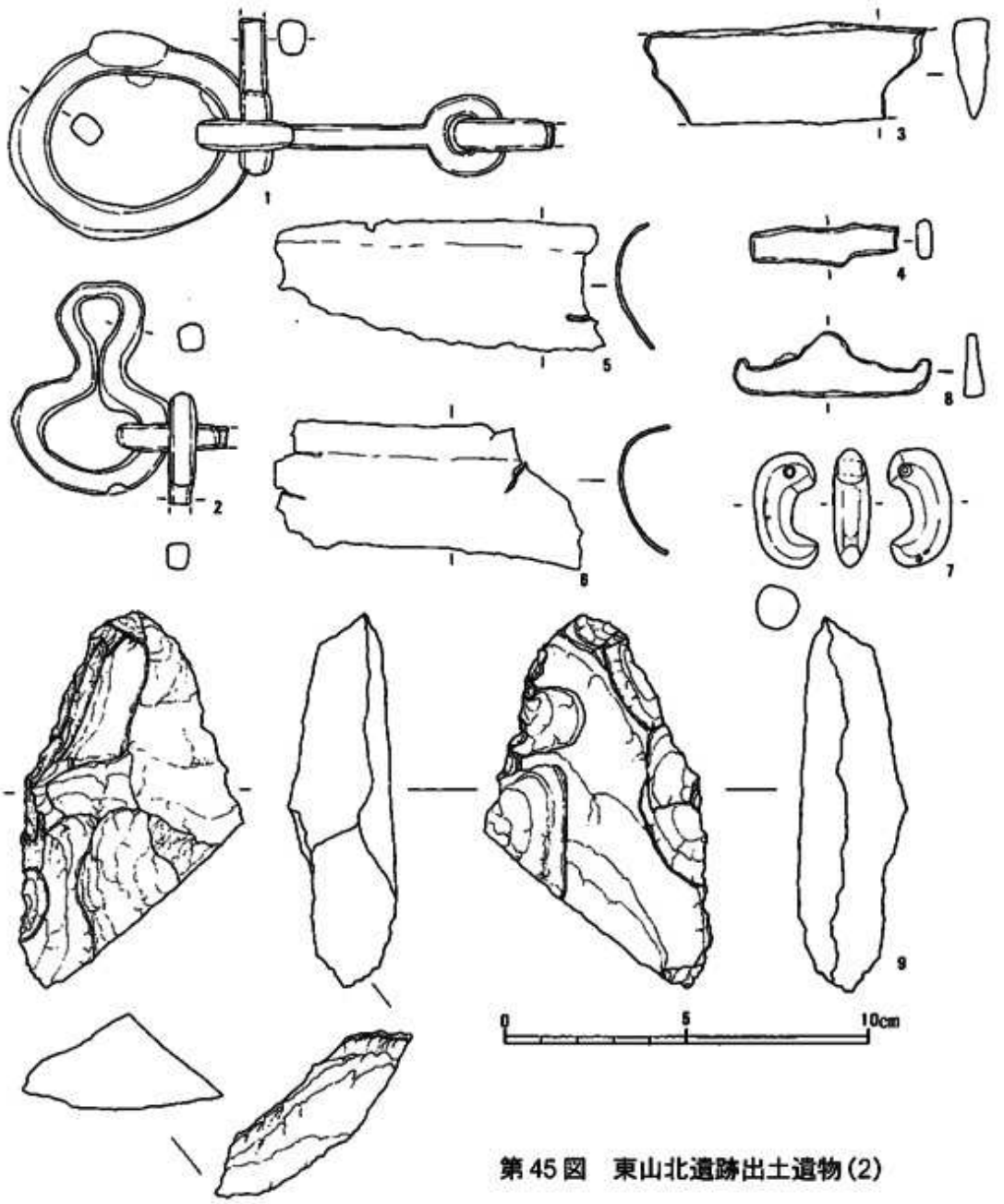
セクション（A－A'）土層説明
1．茶褐色土（しまりなし）
2．茶褐色土混入大礫（孝大）層
3．灰褐色シルト粒混入茶褐色土
4．茶褐色土（3層よりやや暗い）
5．茶褐色土（灰褐色土を若干含む）



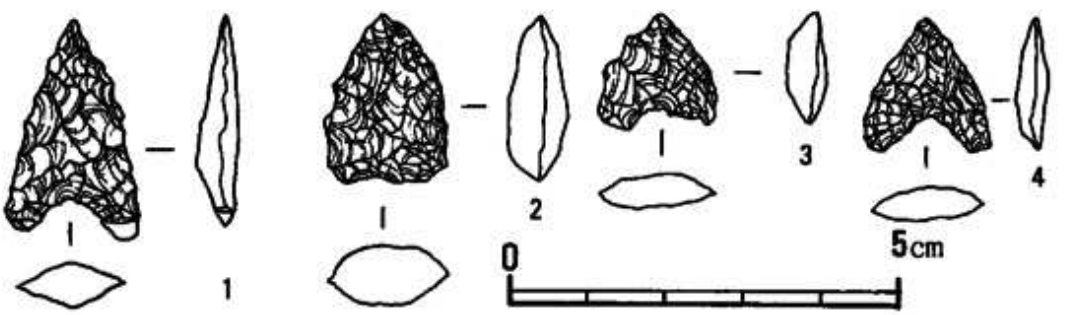
第43図　第4次調査全体図



第44図　東山北遺跡出土遺物(1)



第45図　東山北遺跡出土遺物(2)



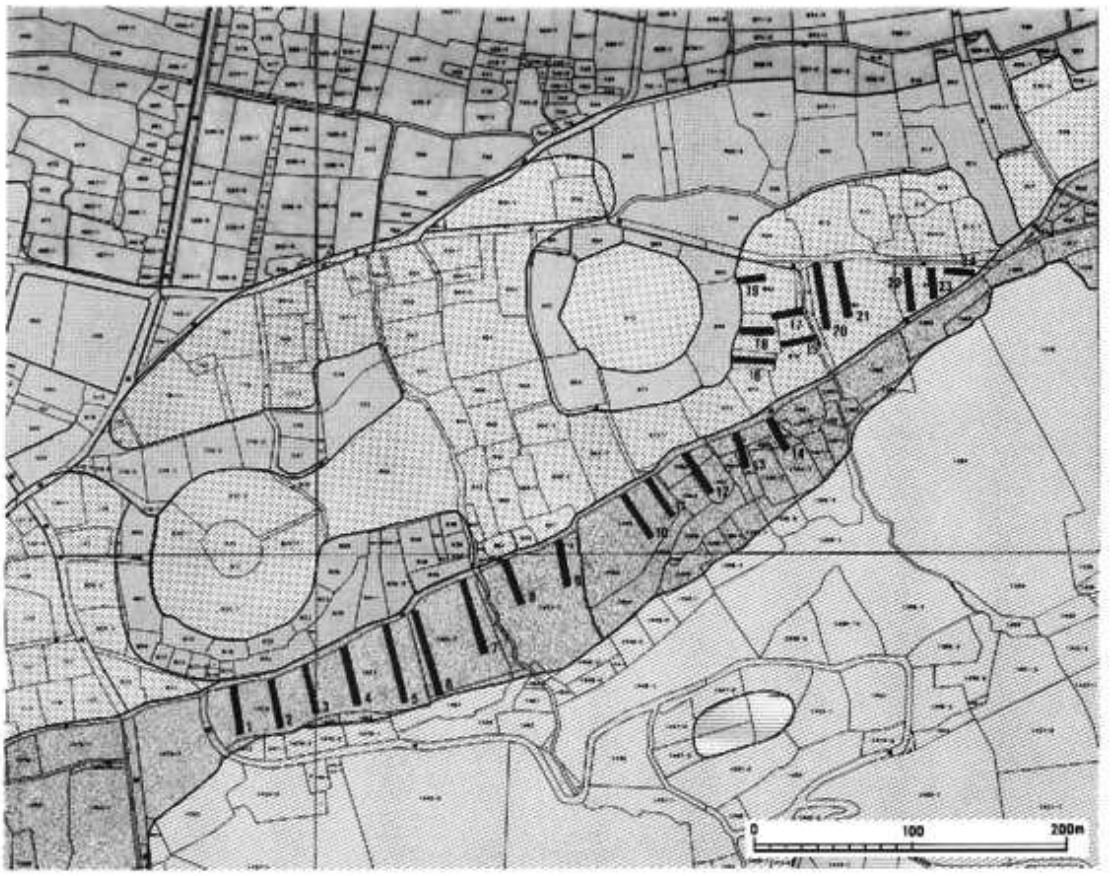
第46図　東山北遺跡出土遺物（3）

第4章　銚子塚古墳南東部試掘調査

1983・1984年度の調査が及ばなかった銚子塚古墳の南側に9本、丸山塚古墳の南側に5本と東側に10本、計24本のトレンチを設定した(第47図、図版8)。その結果、丸山塚古墳の東方の第18と第21トレンチにて、弥生時代後期末に属する土器底部などを検出した。

また試掘に併せて約8000分の1空中写真を利用して地形分類を行った。地形は3つに大別される。「山頂緩斜面」と「丘陵急斜面」に分類した曽根丘陵、これから発する小扇状地が複合した部分、「低地」とした笛吹川の氾濫原である。小扇状地は「扇状地（急斜面）」と古墳築造に伴って人工改変を若干受けているが、扇状地性の「緩斜面（高位面）」と「緩斜面（低位面）」に分類される。遺物が出土したトレンチは「緩斜面（高位面）」にあたる。傾斜が緩やかで、水はけが良好で居住などにも適し、集落跡が存在する可能性が高いと考えられる。

次の1994年度に本格的な調査が実施される予定である。



第47図　銚子塚古墳南東部地形分類図

まとめ

1993年度に行った「山梨県甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」内の3遺跡の調査成果を以下にまとめる。

上の平遺跡は、既に1979～1986年までに5次の調査が進められ縄文時代の住居跡23軒・土坑117基、弥生時代の住居跡18軒・方形周溝墓124基、平安時代の住居跡3軒が報告されている。今回は「公園」の外周道路部分を中心とした6次調査にあたり、縄文時代の住居跡12軒・竪穴状遺構6軒・土坑70基、弥生時代の住居跡1軒・方形周溝墓5基（ただし新たな発見は1基のみ）の調査を行った。縄文時代中期の住居跡などの遺構が多く密集して発見され、また全国的にも10数例しか発見されていない「の」字状垂飾品、畿内の大歳山式系土器などの破片や多数の土偶の出土などにより、縄文時代中期初頭には数少ない拠点的集落であることが明らかになった。他の多くの遺跡では遺構・遺物の希薄な前期末に、この上の平遺跡では住居跡が存在し、続く中期初頭には数少ない拠点的集落であったことは、おおいに注目される。しかも、方形周溝墓群が保存となったため、その下に調査が及んでおらず、縄文集落の調査としては、ごく一部の範囲に光りが当たったに過ぎない。上の平遺跡は、総数125基を数える方形周溝墓群としてだけでなく、拠点的な縄文集落としてもとらえなおす必要があろう。

東山北遺跡も1990～1992年の間に3次の調査が行われ、県内最大クラスの古墳時代前期の第2号方形周溝墓をはじめとして、弥生時代後期の住居跡27軒、土器焼成遺構1基、古墳時代前期の住居跡1軒・方形周溝墓1基などを確認している。今回は第4次調査にあたり、第2号方形周溝墓全体を保存するために追加買収を行った部分を対象とした。近世～近現代の溝1条の調査を行い、この覆土中から馬具2点、水晶製勾玉1点、金銅製刀装具などが出土した。これらの遺物は後期古墳に由来するものと考えられ、近隣にて古墳が削平されその遺物が流入したものと推定される。

銚子塚古墳南東部試掘は、国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の南縁から曽根丘陵に向かって立ち上がる北向きの斜面上を対象とした。計24本のトレンチを設定し、丸山塚古墳の東方の二本のトレンチにて、弥生時代後期末にあたる土器底部などを発見した。また地形分類も併せて行い、遺物を発見したトレンチが緩傾斜で水はけの良い土地に立地することを確認し、集落跡が存在する強い可能性を指摘した。この地域は、弥生時代からの伝統的な方形周溝墓と新しい文化要素の前方後円墳などが近接して存在し、全国的にも注目をされている。次年度の調査成果が期待される。

図版1　上の平遺跡

全景北から（手前はSB7住居跡）

写真撮影のための清掃

平板実測

SB5住居跡付近より東を望む

全景南から

全景南から（手前SB8住居跡）

ピット確認のため精査・清掃

写真撮影のための清掃

SB2 住居跡

SB3 住居跡

SB4 住居跡

SB4 住居跡遺物出土状態

SB5 住居跡

SB5 住居跡埋甕炉

SB6 住居跡

SB7 住居跡遺物出土状態

SB7 住居跡

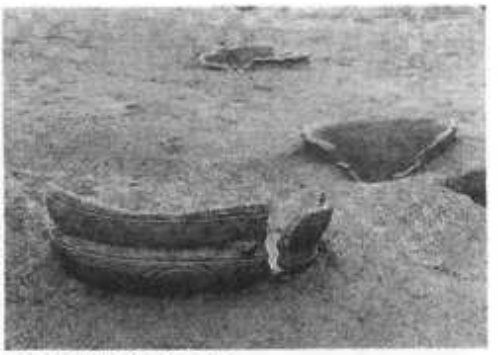
SB7 住居跡埋甕炉

SB8 住居跡

SB11 住居跡

SB11 住居跡埋甕炉

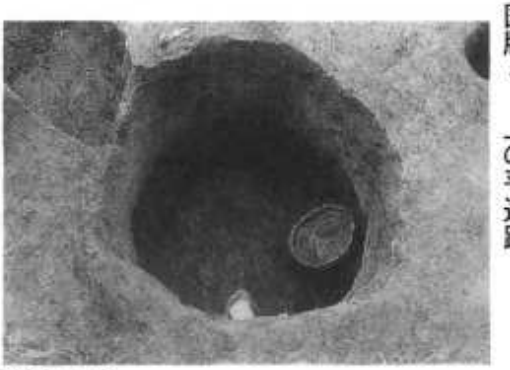
SB12・SB13 住居跡



SB13 住居跡埋甕炉

SB18 住居跡

SP73 土坑



SP59 土坑

SP42 土坑土偶出土状態

125 号方形周溝墓

49・53 号方形周溝墓南から

49・53 号方形周溝墓北から

図版5　上の平遺跡出土土器（原則として約1／10）

SB5 住居跡炉体

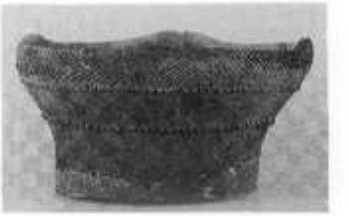
SB4 住居跡出土

SB4 住居跡出土

SB4 住居跡出土

SB4 住居跡出土

SB4 住居跡出土（約 1/8）


SB7 住居跡出土

SB7 住居跡出土

SB7 住居跡出土

SB7 住居跡出土

SB7 住居跡出土

SB14 住居跡出土

SB16 住居跡出土

SB11 住居跡出土

SB11 住居跡出土

図版6　上の平遺跡出土土器（原則として約1／10）

SB18住居跡出土

SB14住居跡出土

SB13住居跡炉体

SB13住居跡炉体

SB15住居跡出土

SP59土坑出土

SP60土坑出土

SP40土坑出土

SB20遺構出土

SB12住居跡出土（約1/5）

SP73土坑出土（約1/5）

119号方形周溝墓出土（約1/5）

座像型土偶脚部（約1/2）

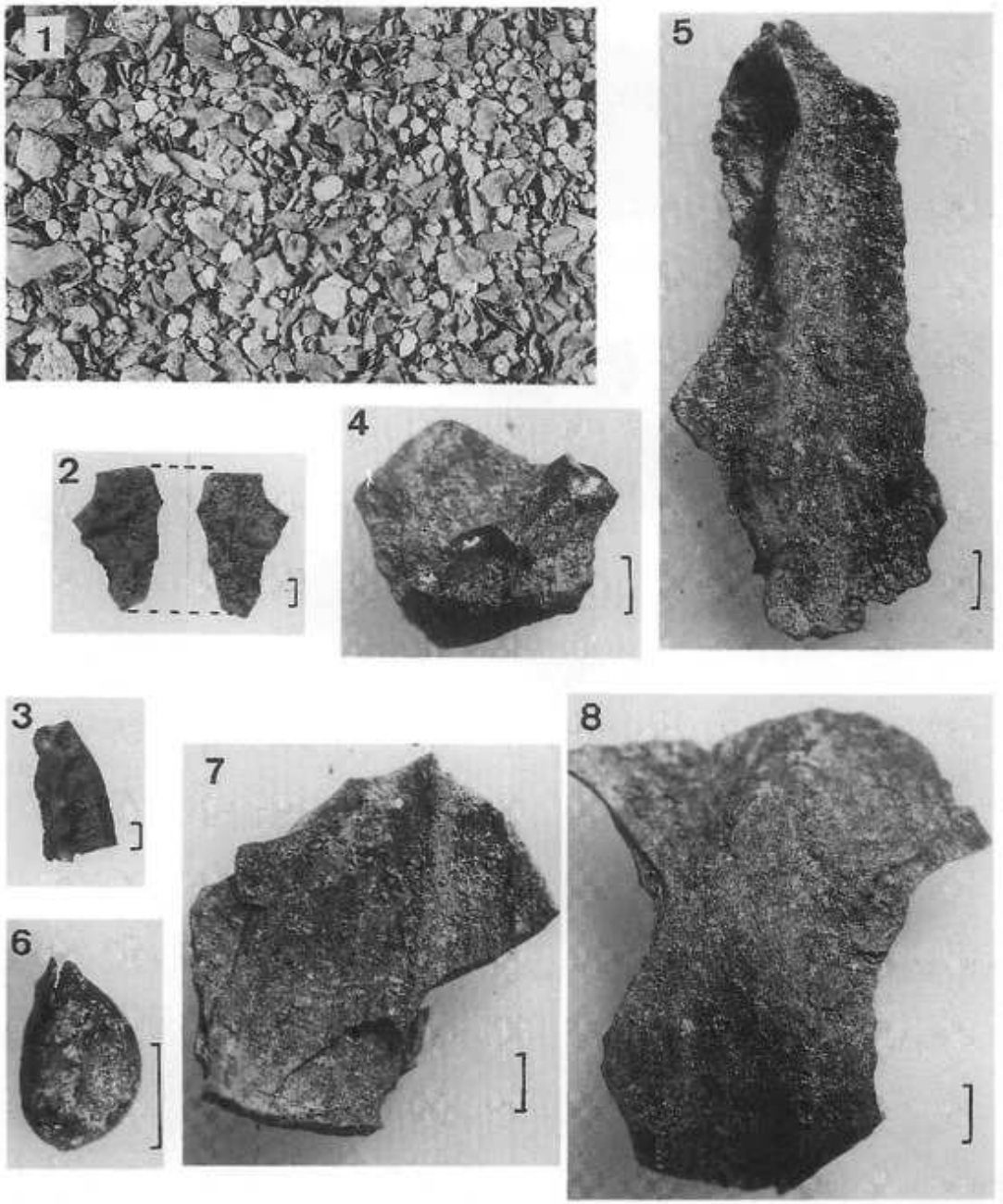
獣面把手（約1/2）

三脚垂飾（約1/2）

ハマグリ形垂飾（約1/2）

の字状垂飾（約1/2）

図版7　上の平遺跡出土炭化種実



上の平遺跡炭化種実（スケールは1mm）

1. 出土状況　2. オニグルミ、核破片（核壁部分）　3. オニグルミ、核破片（縫線部分）　4. オニグルミ、核破片（拡大）　5. オニグルミ、核破片（内側）　6. タデ属、果実　7. ドングリ類の可能性があるもの、破片　8. トチノキの種皮の可能性があるもの

溝全景南から

発掘作業

溝全景北から

轡出土状態

発掘作業

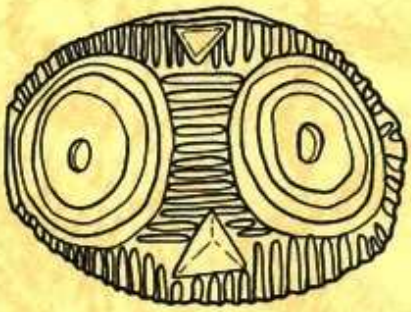
出土遺物（金属製品及び勾玉）

銚子塚古墳南東部試掘東北東上空から

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書概要

フリガナ		ウエノダイライセキ　ヒガシヤマキタイセキ　チョウシヅカコフンナントウブ
書名		上の平遺跡・東山北遺跡・銚子塚古墳南東部
副題		甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第94集
編著者名		末木　健・村石眞澄
発行者		山梨県教育委員会
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話番号		〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL 0552-66-3016
印刷所		新星堂
発行日		1994年3月31日
遺跡名		上の平遺跡
上の平遺跡概要	遺跡所在地	山梨県東八代郡中道町下向山字上ノ平1069-1外
	1/25000地図名・位	甲府・北緯35度35分7秒　東経138度35分25秒
	主要な時代	縄文時代中期、弥生時代後期
	主要な遺構	住居跡41軒、方形周溝墓５基、土坑73基
	主要な遺物	縄文土器、石器、弥生土器、土偶
	特殊遺構	
	特殊遺物	の字状ほか垂飾4点、大型座像型土偶の脚部
	調査期間	1993年5月6日～7月23日、8月30日～11月26日
東山北遺跡概要	遺跡名	東山北遺跡
	遺跡所在地	山梨県東八代郡境川村寺尾字間門163外
	1/25000地図名・位	甲府・北緯35度35分20秒　東経138度35分18秒
	主要な時代	古墳時代後期、近世～現代
	主要な遺構	溝１本
	主要な遺物	縄文土器、石器、陶器
	特殊遺構	
	特殊遺物	馬具２、水晶製勾玉１、金銅製刀装具１
	調査期間	1993年4月19日～4月30日
銚子塚古墳南東部	遺跡名	銚子塚古墳南東部
	遺跡所在地	山梨県東八代郡中道町下曽根字山本874、下向山字東山1393外
	1/25000地図名・位	甲府・北緯35度35分20秒　東経138度35分0秒
	主要な時代	弥生時代終末期
	主要な遺構	不明
	主要な遺物	弥生土器
	特殊遺構	
	特殊遺物	
	調査期間	1993年7月91日～4月30日

山梨県埋蔵文化センター調査報告書　第94集

甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園
上の平遺跡第６次調査
東山北遺跡第４次調査
銚子塚古墳南東部試掘

発　行　1994年３月31日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
　　山梨県東八代郡中道町下曽根923
　　TEL　0552-66-3016　FAX0552-66-3882
印　刷　有限会社新星堂印刷